

著者略歴◆ミゲル・ネリ (Miguel Neri)
メキシコの人類学者。

古代から伝わる叢知に注目、ギリシヤ、ローマ、エジプト、フランス、インドなど各国を遍歴、その調査研究にあたる。

哲学、芸術、宗教、神秘学、科学を網羅したノーシス (GNOSIS) の知識を、アメリカ、カナダで講義、多くの支持を得る。

一九八二年に來日、ノーシスを講ずるかたわら、月刊誌「ムー」(学研)

に、「性エネルギー昇華法」「夢と幽体離脱」「黒魔術の防御法」「エジプシャン・タロット」などを発表、好評を博した。

連絡先◆113-91 東京都文京区本郷郵便局私書箱108 ミゲル・ネリ

●いま開かれる異次元世界の扉!!

この世に生をうけたからには、誰もが免れることのできない死

——その死後の世界を君は見てみたいと思わないか!?

限りなく日本を愛するメキシコの一人類学者が、その半生を賭

けて学んだノーシス——神秘的直観——のすべてを傾注して、

未知なる次元を旅する具体的テクニクを開陳する。

君の前生も見えてくるぞ!!



幽体離脱 アストラル・トリップ

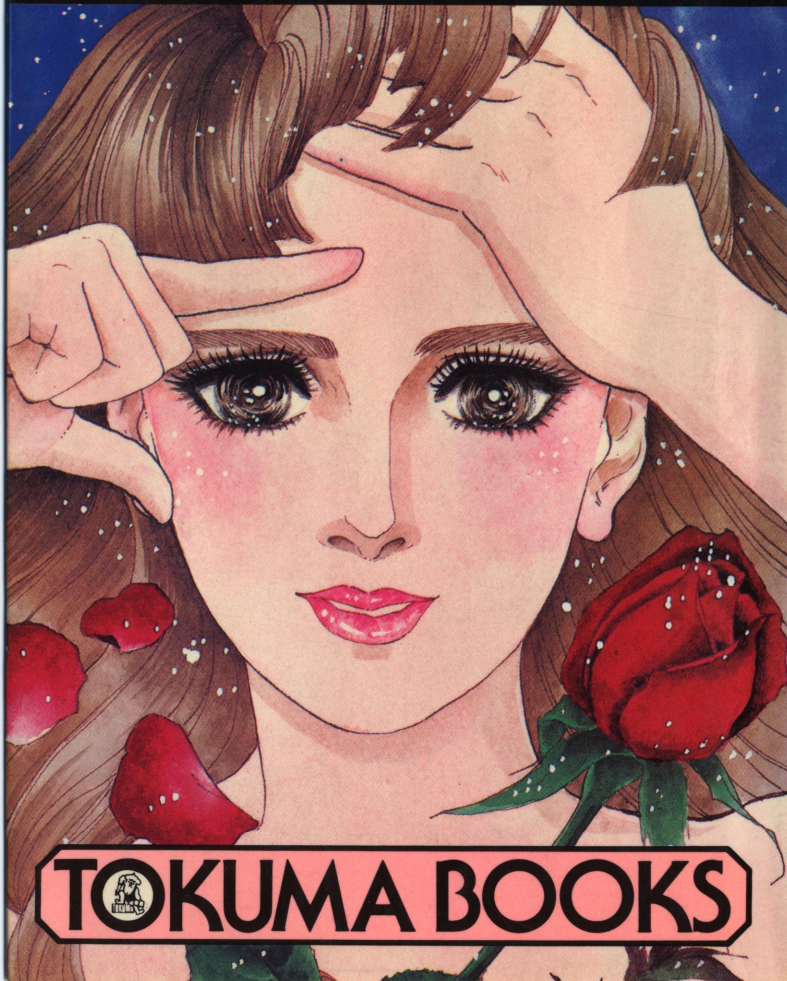
ミゲル・ネリ

徳間書店
TB-424

幽体離脱

アストラル・トリップ

異次元世界を探訪する9つの秘法
ミゲル・ネリ



TOKUMA BOOKS

TOKUMA BOOKS

はじめに

一人のメキシコ人にとって、日本は驚くべき国である。

日本には多くの神秘がある。というより、日本人自身が（メキシコ人は日本人を非常に尊敬し、賞賛している）一つの神秘である。それは、いつどんな反応や行動を起こすかは決してわからないが、いざという時に示す底力のようなものを持っているからである。しかも同時に、同じ行動をいつせいに起こす。

また日本の伝統は、歴史の中に見失われるほど古く、先祖の霊を敬うという風習を持っている。それは、死後にもこの世の生活とは異なるもう一つの世界が存在するを感じているからだ。

その上、日本人は本来、向学心と探究心をそなえ持ち、真理を求め、宇宙の謎を探究するということをし、私自身見てきた。さらに、日本人にはすぐれた才能がある。それは習ったことを即、実用化し、その有効性を確認することだ。多くの西洋人に見られるように、頭の中だけに何年間も、時には一生の間、理論（そのうちの多くは現実的な機能にとぼしい）を詰めこんだままにしておくのではない。すなわち日本人は、何かを習得すればすぐにそれを現実に

適用する心の準備がつねにできているのだ。

この美しい国に住んで約一年経った一九八二年の末、私は精神世界に興味を持つ多くの若い読者をつかむ『ムー』という雑誌に、アストラル・プロジェクト（幽体離脱）の体験とテクニク、及び夢の機能と意味について発表した。この記事は、その実用性と有効性によって多大の興味と反響を呼び起こした。なぜなら、アストラル・トリップとは、まだ生きている私たちが「あの世」のできごとを体験的に識る、一つの方法だからである。

近い将来、死後の世界で起こる多くのできごととは神秘でも謎でもなくなるだろう。そして情報不足や物的確証の不在ゆえに懐疑的になっている多くの人々も、それを確認する機会を持つに違いない。というのは、日本ではエレクトロニクスの開発が進み、サーモグラフィや赤外線写真、コンピュータ、マイクロウェーブ、レーザー光線などの最新科学技術を通してダイレクトに、ヴィジュアルに（直接、視覚を通して）これらの平行する異次元とのコミュニケーションが成立する日が近いのは、明らかだからである。その日がいつきても不思議でないと考えるほど、日本の最新科学は進んでいる。いまから私たちは、全世界をゆるがすほどのその強烈なショックを受けとめる心の準備をしておくのが賢明である。読者の皆さんにとって、本書が未来の科学的発見に際しての準備として、もっとも有益なものになると私は確信している。

しかも、私たちが誰一人として死を免れることができないのは、厳然とした事実である。本

書によって、前もって死後の世界について知ることができるということは、それらの平行する異次元に生活を展開してゆく上においても、貴重な情報であるのは明らかだ。

ところで私の生まれた国メキシコは、経済的にはそれほど豊かだとはいえないが、ピラミッドやすぐれた数学、天文学などを残した古代アステカやマヤの時代から、魔術や自然医術を脈々と受け継ぎ、死後の世界や肉眼では見えないが確かに存在する他の次元を信じ、それらがごく自然に日常生活に溶けこんだ精神的な国である。物質的な富以外の何かを探究させる、内的な力を感じて生きている。だからこそ、日本人の心の中にあるその同じ力——表面的な人生だけでなく、何かを求めずにはいられないその気持を、メキシコ人である私は感じとることができるのだ。

メキシコ原住民の多くの部族では、ナーワリズムを実践している。ナーワリズムとは、精神のみならず肉体そのものも一緒に、あつという間に遠くへ移転したり、鷲や虎に変身することのできる術のことである。また彼らは、農作物のための雨乞いの儀式や、超自然的な治療法なども日々実践している。

表面、超近代的な生活を送るように見えながらも、多くの日本人の心の中には、生と死の神秘を知りたい、あるいはおのれの存在の意義を発見したいと希求する種子が潜在しているのを、

私は観察してきた。芽を出すために、少しの水が注がれるのを待ち望んでいる種子がある。わずかの水で、その種子は強く大きく育ち、「肉体と精神の調和」という何ものにもかえがたいすばらしい果実を実らせ、幸福な人生を生きることが可能となる。金銭で手に入れることのできない内的な果実、永遠の価値は、心の中にその種子が生きているうちに発芽させなければならない。

8

人類が何世紀にもわたって受け継いできた知識は、あまりにも広大で多様化している。しかし現代において、それらを簡潔に総括、体系化し、その実用的用途を私に教えたのは、恩師サマエル・アウン・ベオールであることをここに記しておきたい。

一九七六年、メキシコシティで、私は彼に出会った。すでに七十冊余りの著書を出版していた彼は、執筆活動と平行して、精力的な講演活動を行っていた。そこには、私が求めていたことのすべてが語られていたのだ。私自身の長い探求の末の「ノーシス」(GNOSIS「直観的認識」)との出会いだった。それはすべての物事の判断基準となる普遍的知識である。

十一年前にメキシコで知り合ってから私の伴侶である阿部美知子が、同国人である日本人たちにその知識を伝えたいと希望したことが動機となって、私たちは海を渡って日本に来了。そして彼女の内助を得て、いくつかの雑誌への執筆以外に、ノーシスの講座をもってきた。こ

の講座を通して、多くの日本人の精神的渴望を身近に感じ、人間の心理や死後の世界の研究調査をさらに深め、体験したが、本書はそれらの多くの体験や講演の内容をまとめたものである。録音テープのおこしは講座に参加した多くの人々の協力によるものであり、それを、西田みどり・隆男両氏が、より多くの日本の皆さんに読んでいただくために整理し、一冊の本としてまとめてくださった。

私は、今日、この東洋の国に古今東西のすべての科学が結集し、最も古いものと最も新しいものが浸透しあい、さらに日本の神秘と普遍的知識のパワーが結びついてゆく様を、この目で観察した。

日本は、人類が犯してきた多くの誤りを肥料として、新しい文化を創造し、育てる大きな可能性を持った豊かな土地である。日本民族は創造的で深く繊細な感性を持ち、表面的な形のみでなく、良い種子の価値を認めることを知っている。だからこそ、近い将来、その永遠的価値のあくなき探究に勝利をおさめ、その恩恵を世界中の人々とわかち合うであろうことを、私は信じて疑わないのである。

一九八四年四月二七日

はじめに

ミゲル・ネリ

9

■ アストラル・トリップ／目次

はじめに

I 時空を超えた不思議体験

- 女高生に頻発しているアストラル・トリップ現象／20
授業中におばさんの霊と感応／24
壁を通り抜けるもう一人の自分／27
異次元を旅して生の秘密を知ろう／30
女神とともに天国から地獄まで／34
“ジャンプ”のはずみで異次元へ／38
「眠り」は一種のアストラル・トリップ／44
証明されたドアの通り抜け／46

II 異次元自由自在のアストラル体

- 三次元での認識能力は貧しい／50
“次元”とはどういうものか／51
眠りⅡアストラル体の離脱／55
強い欲求が幽体離脱を呼び起こす／57
まず、昨夜見た夢を覚えておく／62
アストラル界Ⅱすばらしい夜の飛翔世界／66
忘れた夢を思い出す法／69
夢のメッセージをどう読みとるか／71
お風呂の縁がスーッと下がって……／72
夢の解釈で現実を変革する／75
アストラル・トリップの敵は恐怖心と怠惰／77
“ファーストオーン”のマントラで体が宙に浮いた／79
ペンタグラムで金縛りを解く／82

金縛り防御法／83

より充実した人生のためにアストラル界へ／86

Ⅲ

死後の世界はどうなっているか

“銀色の糸”が切れたとき／92

人は死ぬと軽くなる／95

人生のプログラムは変更可能／97

死の判定は眼球を押して／98

偉大なる発光体の質問／103

自分では気づかぬ他人への冷たさ／106

死後にたどる三つの道／110

新しい生命への生まれ変わり／112

あなたの現実は前生で培ったもの／115

地獄で救われるためのマントラ／117

男性は女性的アストラル体を持つ／120

Ⅳ

地獄の世界はどうなっているか

性エネルギーの昇華によって高次元の世界へ／121

地獄は世界各地に存在する／126

『神曲』はダンテのアストラル界旅行記／127

地獄界の樹に封じこめられた自殺者の霊／129

第一の地獄―心理的地獄／134

アルコールの臭いを好む怪物たち／136

エゴと魂の戦い／137

大気汚染と同じエゴの有害エネルギー／140

第二の地獄―強制的洗浄の次元／141

宇宙の法を体現した空海／144

日常生活の中に真理をさぐる／147

死後の行先を決定するアヌービス／149

般若は鏡に映ったエゴの姿／153

V

- 地獄の階段は九段階^{ラング}／154
- 肉欲に溺れた男は二段目に／156
- 三段目～六段目——大食漢・浪費家・おこりん坊・狂信者／158
- 七段目～九段目——無理強い・ウソつき・裏切者／160
- 閻魔大王にも慈悲がある／163
- 病氣や困難にも冷静に対処／165

前生の世界はどうなっているか

- 人生は氷山の一角にすぎない／168
- 里子に出された長男／170
- 甘やかして育てた次男の本性／173
- 足の指でピアノを弾く長男の演奏のすばらしさ／177
- 次男にあらわれた母親の前生の罪／179
- 耳の聞こえないベートーベンは天の音楽を聞いていた／182
- ポピュラー歌手になった混血児／186

- 高次元の世界で白ロジのマスターに会う／188
- 火を恐れた理由／191

あなたにもある三十二万四千回の転生のチャンス／193

転生の目的は進化すること／195

まず、ちっぽけな自分の枠を打ち破れ／198

ポイント1——魂を活性化しよう／200

ポイント2——霊（心理）の洗練／202

ポイント3——肉体は進化のための実験室／203

ポイント4——アストラル・トリップで運命を変えよ／204

ポイント5——魂を侵すエゴを追放せよ／206

パーソナリティーのエネルギーは死後、幽霊^{スプライト}となる／210

エゴはあなたの内部の最大の敵／212

力強く光を求めている日本人／213

進化のプロセスの三要素／216

いま人類は転生のラストチャンスにいる／218

VI 異次元の扉を開く9つの秘法

肉体と精神のバランスある進化のために／224

秘法1 大切なアストラル・トリップの感覚／226

秘法2 性エネルギーをアストラル体へ向ける／229

秘法3 卵の宇宙カプセルで時空を飛翔する／230

秘法4 自然界に宿る妖精の力を借りる／233

秘法5 ピラミッド・パワーで叡知を知る／240

秘法6 瞑想を利用して泡の中に入る／241

秘法7 猫科の動物と友だちになる／242

秘法8 内的な願望に照準を合わせる／245

秘法9 五つの体を次々に脱いでいく／246

アストラル界にいることを確認する方法／248

アストラル界で攻撃された時／250

アストラル・トリップの記憶再現法／252

アストラル・トリップで高次元へ飛翔／253

《付》 夢を解釈する鍵——シンボルとその意味／255

I

時空を超えた 不思議体験



カバー・イラスト／山本鈴美香
本文・イラスト／山本鈴美香
杉本 征

女高生に頻発しているアストラル・トリップ現象

先ごろ、親しい友人で女子高校の講師をしている西田君に会ったのであるが、彼は私と顔を合わせるや否や、あいさつもそこそこここのういったのである。

「ネリさん、女子高校生たちの間に異変が起こっているようです。不思議な体験を持つ少女たちがぞくぞくと名乗りをあげているのです。それはネリさんがぼくたちに教えてくれた、アストラル・トリップではないかと思われるのですが、いったいどういうことなのでしょうか」

西田君はT大学の博士課程で宗教学を専攻しており、心理学や宗教学などの学会にも籍をおいて研究活動が続けるかたわら、高校で英語を教えている。まだ三十歳に少し間のある好青年である。

彼が講師を勤めるのは、東京・板橋区にある私立S女子高校である。小学校から短大まである、いわゆるお嬢さん学校であるが、その学校の生徒たちがアストラル・トリップを体験しているというのである。

ところで、アストラル・トリップという言葉は、読者の皆さんには耳なれない言葉かもしれない。しかし「幽体離脱」といえば、なんとなくどんなものか想像がつくだろう。肉体とは別のもう一つの体、霊的な体（幽体）が肉体から脱け出して、あちこちを浮遊することだ。その

霊的な体をアストラル体といい、その体をもって異次元を旅^{トリップ}することをアストラル・トリップというのである。

その行動範囲はたいへん広くて、たとえばこの世界の中で時間・空間を超越してあちこちに一瞬のうちに出没することもできるし、死後の世界や自分の前世、あるいは天国や地獄へも行くことができる。自然界の精と話したり、目に見えない異次元の住人と交信することもできるのだ。

そういった現象があることを聞いたことはあるが、自分には信じられない、かりにあるにしても自分とはまったく別の世界のことだ、そう思っている人も少なくないだろう。

だが、実際はそうではない。アストラル・トリップは誰にでも生じており、またできることで、その具体的な方法^{テクニック}さえあるのだ。その方法をご紹介します、同時にアストラル・トリ



アストラル・プロジェクション

ップで行くことのできる異次元にあなたをご案内することが、本書の目的である。

もう少し、西田君の話に耳を傾けてみよう。

「この四月から授業を受け持っている高校三年の生徒なのですが、ぼくが授業中の余談で超常現象について話したら、その反応がすごかったです。」

ちょうど五時間目の授業で、お弁当を食べてお腹はいっぱい、とてもあたたかい日もあった。で、眠そうな顔をしている生徒が多かったのです。これでは授業にならないと思って、眠気ざましに超常現象の話をしたところが、それまでくっつきそうだった生徒たちのまぶたがパツチリ開き、瞳がらんらんと輝き始めたのです」

西田君によると、彼女らの反応は単なる興味本位、恐いもの見たさ、というレベルのものではなく、真剣そのものの、いや切実とさえ言えるものだったという。

「あきらかに彼女たちは、自分の体験したことが一体どういうことなのか、という情報不足で悩んでいたのです。」

なぜなら、その授業が終わった後、何人もの生徒が、もっと詳しく話を聞かせてほしいと職員室までやってきたからです。あまりにその要望が多いので、休み時間を利用して有志の生徒たちに超常現象や異次元についての話をしているのですが、その中に自分の体験した不思議な現象について話す生徒が何人もいるのです。そして、そのほとんどが、アストラル・トリップ

なのです。

本人たちはむろんそんなことに気づいてなくて、むしろ気味わるがっていたのですが……。

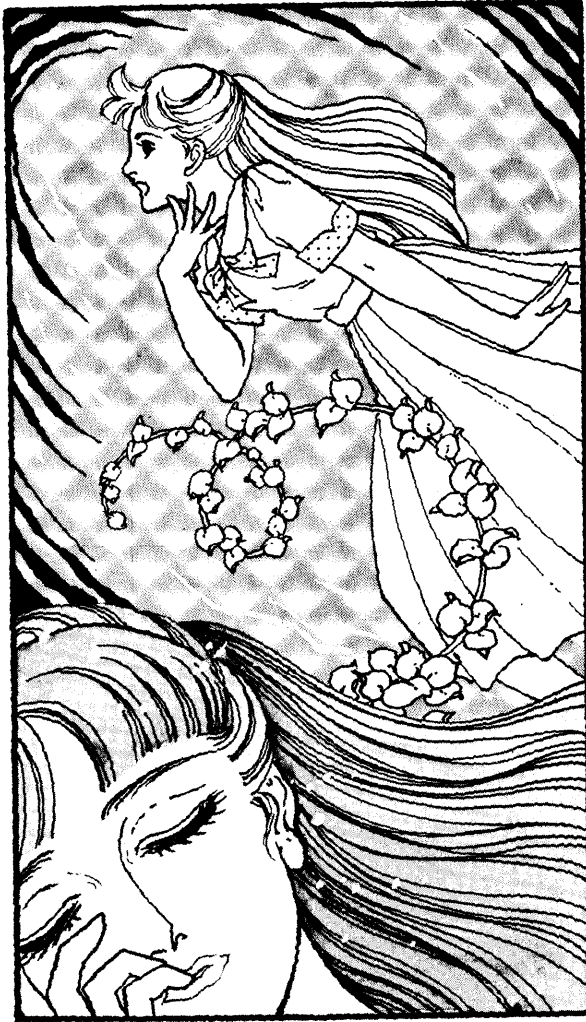
普通の人に話しても、まともには聞いてもらえないでしょうしね」

私は大きくうなずいた。若い人々の間にアストラル・トリップの体験者が多いということは、充分納得できることだったからである。

ご承知のとおり、現在は光の時代、アクエリアスの時代である。すべてが光のもとにさらされ、あきらかにされる時代なのだ。この時代の天体の影響を受けた子どもたちは、昔の人びとにくらべて感受性が敏感になっており、靈感そのものも大人たちとは比較にならないくらい鋭くなっているはずである。

そして世紀末を目前にした今の時代を生き抜くには、靈感をいかに上手に日常生活に生かすかということが、非常に重要なのである。

感受性が鈍くなった大人に比べて、思春期の少女たちがそういった非日常的な体験するのは、やや大げさに言えば、人類の歴史のプログラムの一つといってもいい。なぜなら、アストラル・トリップによって学ぶことのできる多くの貴重な知識こそ、未来の人類を救う大切な鍵だからである。



授業中におばさんの霊と感応

西田君が話してくれた女高生の体験談の一つは、東京・池袋に住んでいる太田恵子さんのものだ。彼女は身長が一七〇センチ近く、プロボーションは抜群、大きくて澄んだ瞳をもつ印象的な少女だという。以下にまず、太田さんの体験談をご紹介します。

ちょうど一年前の、六月のこと、夏も間近く、暑くなりはじめたころだったが、その日はとくにむし暑かった。

その体験は五時間目の授業中に起こった。たしか政経の時間だったと思う。

四時間目は体育でテニスをやり、いささか疲れていた。そこへお弁当を食べたあとときいてから、クラス全員が何となく「眠い」雰囲気だった。授業は退屈、彼女はいつしか居眠りしはじめていた。

実はその日、彼女には残念なことが一つあった。というのは、大好きなおばさんが家に遊びにくるのに、会えないのだ。午前中に来て昼すぎに帰るということだった。なぜそのおばさんが好きかというと、本当に高校生らしい単純な理由で、おばさんは会うと必ずおこづかいをくれるからだという。

さて、恵子さんが教室で居眠りしたのは午後一時半くらいだが、ちょうどその時刻、当の

おばさんは池袋から山手線に乗って田端まで来たところだった。そしてホームを隔てた向かい側に京浜東北線の青い電車が止まっているのを見たが、なんとその電車に姪の恵子さんが乗っており、こちらに向かって手を振っているのだ。

おばさんは、おかしい、と思った。その時間は授業中のはずだから、電車なんかに乗っているわけではない。学校をさぼってどこかに遊びに行ってきたに違いない、おばさんはびっくりするのだと思ひこんでしまった。そこで家に帰るとすぐ、恵子さんのお母さんに電話して、彼女がさぼっていることを告げた。

六時間目の授業が終わり、恵子さんは四時すぎに家に帰ってきた。

ところが家に一歩足を踏み入れるやいなや、お母さんの声がとんできた。学校をさぼってどこへ行ってきたのか、というわけである。彼女には身に覚えのないことなので、びっくりしてしまった。

「そんなはずないわよ。友だちに聞いても、先生に聞いてもいいわ。そんなことしてないもの！」

恵子さんが反論したのも当然である。

お母さんもおばさんから話を聞いたときは一時は逆上したが、よく考えてみれば、日ごろはそういうことをする娘ではない。娘の言い分をもっともだと思ふようになった。そして親子二

人して、「おかしいわねえ」と首をかしげたのだが、おばさんがわざわざ電話でそんな嘘をいうわけもなく、結局、原因は分からずじまいだった。

そしてそれからおよそ一年後、西田君が余談でアストラル・トリップについて話したときに、もうすっかり忘れていたその体験を思い出した。授業が終わってから個人的に彼に聞いたところ、たしかにそうであるということが分かったのだ。

すなわち彼女は、アストラル・トリップして、大好きなおばさんに会いに行ったのである。おばさんに彼女の姿が見えたということであるが、これはちょうど、死を前にした人が親しい人に別れのあいさつをしに行く現象と似ている。おそらく恵子さんの姿を見たのはおばさんだけで、その周囲の人々には見えていないはずだ。そしてそのとき、おばさんも恵子さんについて考えていたのだ。両者の意識が感応しあって、そういうことになったのである。

壁を通り抜けるもう一人の自分

さて次の体験は、東京・板橋に住む秋山知子さんのものだ。彼女は色の白い、見るからに靈感の強そうな少女である。

中間試験だったので、前夜二、三時間しか睡眠がとれず、その日は家に帰って食事をすませると昼すぎに眠ってしまった。試験が終わってほっとしていたせいもあり、スーッと眠りの中

へ入っていった。

が、肉体が眠ったと思ったらすぐ、もう一人の自分が起きあがって、家の中を歩き始めた。壁もドアも難なく通り抜けて、家の中をぐるぐる巡り歩いているのだ。

旧家なので、東京の家としてはかなり大きいほうである。その家の中を、もう一人の自分は、何をするでもなく、ただ歩き回っている。そしていつの間にか、自分の肉体に戻って眠っていた――。

彼女にはこのような体験がしばしばあったので、それは誰にでも起こる、あたりまえの現象だと思っていた。

何だか嘘みたいな話なのだが、本当なのだ。本人もその時のことを細かく覚えていてるわけではないので、もっと詳しく話してほしいと頼んでも、かえって困惑顔であった。だいたい、自分で意識しないアストラル・トリップとはそんなものだ。

秋山さんは予知夢もよく見るということで、最近見たのは試験の問題だという。試験の前日に、数学の問題を夢で見たのだ。そして目が覚めたとき、それは必ず当たるという確信があったということだ。

彼女の家では父親と弟さんがやはり同じような体験をしているそうで、敏感で未知なる次元からのメッセージを受けやすい体質なのだろう。

さて、この二人の女高生の体験は、あきらかにアストラル・トリップである。いわゆる幽体離脱といわれるものだ。

だからといって、この二人がひどい変わりものかということ、そんなことはない。どこにでもいる、ごく普通の女子高校生である。

西田君はその後も、生徒からの強い要望があれば、それに応えて異次元の話などを行っているが、彼女たちはまるで乾いた砂漠が水を吸いこむように、その話を吸収し、次々に鋭い質問を投げかけてくるという。それらの質問のほとんどが実体験に基づいているため、リアリティがあって、答える西田君もたじたじになるということだ。

「彼女たちは、見たところ明るい、屈託のない少女たちです。」

小学校から短大まであるエスカレーター式の、いわゆるお嬢さん学校ですから、まあ真面目な生徒が多い。

そんな彼女たちが、もう一つの面でそんな問題を抱えて悩んでいるのです。金縛りにあう生徒も多く、実際真剣なのですが、大人たちに話しても相手にされないからといって、言いもしない。友人間でも変人扱いされるのがいやで、話し合わない。たいてい一人で悩んでいるのですね。

今では、同じ体験をしている仲間がいるということで、少なくとも一人で悩むことはなくな

っているのですが、ぼくには高校生の間にこういう体験者がふえていることが、たいへん不思議に思われました。

ネリさんがよく執筆されている『ムー』は何十万部も売れているというのですが、その読者層の七〇パーセント近くが中・高生であることも、このことと無関係ではないでしょうね」

西田君はそう言って、ホッとためいきをついた。彼は大学に残って学問を続けている学究の徒であるから、そういった立場でこの現象をながめているのであろう。

超心理学・超常現象を研究しているも、このジャンルはアカデミズムの世界ではまだ日陰の存在であるから、実体験者のリアリティのある話を聞くと大いに刺激され、研究活動が活発になるにちがいない。

現代人の多くは「科学による実証・証明」というお墨つきがないものは信じない、というくらいに科学を盲信しているから、西田君のこうした研究が進み、世に受けいれられるようになることは大切なことだ。私は西田君の活躍を心から願っているのである。

異次元を旅して生の秘密を知ろう

アストラル・トリップ——この現象を日本語では「幽体離脱」「靈魂離脱」「肉体離脱」などといっているが、そのどれもが正確にアストラル・トリップを表現し得ているとはいえない。

本書では「アストラル・トリップ」という、もっとも正確でストレートな言葉を使いたいと思う。さて、前述の女高生の二例によって、あなたはアストラル・トリップの入口を理解できたかどうか。

そうなのだ。彼女たちの体験は、アストラル・トリップのほんの入口にすぎない。地上における旅^{トリップ}でいえば、家の玄関から外へ一歩足を踏み出したところにすぎないのである。

これから駅まで行って電車に乗り、目的地まで行かねばならない。目的地に着いたら、そこを見学して回って、楽しんだり学んだりする。そして多くのおみやげをもって帰ってくるのだ。地上における旅^{トリップ}があなたの目を開かせ、その後の生き方に大きな示唆を与えるように、このアストラル・トリップもあなたの人生を変えずにおかない。地上における旅よりもっと強烈に、もっと感動的に、である。

なぜなら、アストラル・トリップによって行く世界は異次元の世界であり、そこには人間の生のすべての秘密が隠されているからだ。

あなたはなぜ、この世に生まれてきたか。

男として、あるいは女として、そのような容姿をもって、そのような家庭に、そのような環境のところに、なぜ生まれてきたのか。

あなたはなぜそんな性格で、そんな食物を好み、そんな異性に恋をするのか——。

だけれども、そのような疑問が湧いてくることがあるだろう。

アストラル・トリップはそのすべてに解答を与える。いや、与えるのではない、あなた自身が見いだすのである。そして今、この世で何をして生きればよいのかということも、アストラル・トリップによって知ることができる。

あなたはこの世に、食べ、眠り、お金を稼いでらかな生活を維持し、やがて死んでいくために、生まれてきたのではない。

あなたはやるべき何かがあって生まれてきたのであり、環境や容姿はそのやるべきことをもつとも効率よくやりとげることができるようにと、与えられたものののだ。

アストラル・トリップで、あなたはそのすべてを知ることができる。

それを念頭において、余分な先入観をすべて取り去ったうえで、本書を読みすすめていってほしい。

ここでもう一度わかりやすく説明しておく、アストラル・トリップとは、肉体から脱けだしたアストラル体が、肉眼では見ることでできない高次元の世界や低次元の世界を自覚することである。

読者は驚くかもしれないが、アストラル体というのは、私たち人間が誰でも持っている肉体以外のもう一つの体なのである。この体は、肉体のように固体ではない。すなわち三次元に属

しているものではないから、時間や空間（距離）などという三次元の法則には拘束されない。それらを超えて、どんな過去へも未来へも、そしてどんな遠い所へも一瞬のうちにいくことができるのだ。

この次元では、私たちの感情と意志がたいへん役に立つ。そしてまた、意識の目覚めも欠かせない大切な要素である。

さらに、アストラル・トリップは、練習することによって、誰にでも可能なものである。決して難しいものではない。その具体的なテクニックについてはⅥ章で詳しく触れるが、ここではもう少しアストラル・トリップになじんでいただくために、さらに興味深い体験談をご紹介します。

読者の中には、この体験談を読むことで、自分の過去の似たような体験を思い出す方があるかもしれない。

「夢だとはばかり思っていたのだけれど、あれはもしかしたら……」

きっとそう感じる方がいるはずだ。

なぜなら、夢とは、アストラル・トリップ体験の記憶の断片だからである。自分の過去の体験や夢を思い出しつつ、以下の体験談を読みすすめていけば、あなたの意外な一面が浮き彫りされてくる可能性は大いに期待できる。

女神とともに天国から地獄まで

では、アストラル・トリップによって天国と地獄に行き、また自分がこの世に生まれてくる前にとどまっていたところにも行ったという、ある人物の体験をご紹介します。

竹内てるよという、今年八十歳になられた霊能者であり詩人でもある方だが、最近その体験を詳しく書いた本を出版されたので、そこから引用したい。

私が二十七歳で、本当にひどい病気をしているときでした。もうこれまで、と自分でもおもったとき、私は天国と地獄を視たのです。

けれども私は、それをみなさまにお話しする前に、私が生まれる前のことについてお話ししなければなりません。

暗い岩屋の奥に暗い部屋がありまして、そこには体格のいい、おもしろい衣裳を着た女神さまがいらっしゃいました。そして赤んぼうの私をひざの上に抱いてくださるのです。女神さまは私に、

「今日はあなたが使命をもって、遠くへ行く日ですよ」と、おっしゃいました。

そして私の頬にそって指の先をくわえさせてくださいます。そこからはあたたかいお乳がでて、私はすぐに満腹することができました。

岩屋から外を見ますと、外には明るい光が満ちています。あまり体の大きくない男の人たちが狩りから帰ってきて、立ち働いており、またいろいろな動物たちもいっしょに働いていました。マンモスのようなものから下はネズミのように小さなものまでが、それぞれの力に合わせて働いていました。その日は私の別れの日で、やがて別れの宴が始まりました。

女神さまは私におっしゃいました。

「遠いところに行くのです。そして今生においては人を助けることができますのですから、それを使命として行くのですよ」

私はお別れが辛くて、むずがっていましたが、女神さまは、どんなときにも力を与えてあげるから、と、そうおっしゃったとおもいます。

そして二十七歳、もうこれまでとおもったときに、また女神さまにお会いしました。

私は女神さまに、

「使命を果たさないで死ななければならないのは、ほんとうに申しわけないことでございます」

と申し上げました。けれども女神さまは、

「なに、まだ死にはしません。あなたをここまで連れてきたのは、あなたに見せたいものがあるからです」

と、おっしゃいます。

そのときの私は、医学的にいうと意識不明の状態で、注射だけで命を保っているときでした。

女神さまは私の首をおさえて、

「これをよくごらん」

と、おっしゃいました。

そこには大きな崖があつて、崖の下にはゴツゴツした岩がいっぱいあります。そしてその岩のところで、半分裸の人間たちが苦しうごめいていました。みんな水が飲みたいらしく、岩にしゃぶりついたりしているのですが、飲むことができません。男も女もいて、心中した男女などは体が重なつてくっついてしまったまま、離れることができないのです。

みんな上を仰いでいましたが、その目はことばにならない敵意のようなものを宿っていました。体は死んでしまったのに、魂が死ねないで苦しんでいるのです。

そこは生でもない、といって死でもない世界でした。死なら死、生なら生、と決まればもつと楽になるのだろう、水も飲めるのだろうとおもいます。水も飲めない、生とも死ともつ

かない宙ぶらりんの世界、それが地獄なのでしょう。

女神さまは、これが地獄である、よく見ておきなさい、と念を押されました。

そしてまたしばらくあとをついて行きましたら、広い、スロープのあるきれいな野原のようなどころに出ました。

そこには白木で建てたような家がいくつか建っていて、白い着物を着た人たちが、楽しそうに、あっち行きこっち行きして遊んでいました。古い時代の人も新しい時代の人もいました。

おそらくこれが、天国とはいわないまでも、人間が安らかにいる世界だろうとおもいました。
(『いのち新し』たま出版)

長々と引用させていただいた。

ここでひとこと言っておきたいことは、竹内さんが見ている天国と地獄は、そのすべてではない、ということである。

異次元の世界は非常に広大であり、個々人の精神によって見えるものが違ってくる。その人の状態にふさわしい世界に、引きつけられていくのである。

争いごとの好きな人(そういう心の状態の人)は、争いごとばかりしている地獄の一つにア

ストラル・トリップするだろうし、クラシック音楽の好きな人は、ベートーベンたちの集う「エメラルドの館」にトリップするかもしれない。

竹内さんの見た天国と地獄は、それはそれとして興味深い例ではあるが、広大な異次元世界のほんの一部分であるということを付け加えておきたい。

「ジャンプ」のはずみで異次元へ

次にあげるのは、私の祖国メキシコの、ある中年婦人の体験である。

彼女は正直な、素朴な人柄で、その体験をごくあたりまえの出来事のように、淡々と私に話してくれた。

ある晩のことです。

私がベッドで眠っていると、外で車のぶつかるような音がしたのです。何ごとだろうと起きて、窓まで歩いて行って外を見たのですが、格別何も起こってはいません。おかしいな、気のせいかな、とおもってベッドまで戻ると、なんとそこには私の肉体が眠っているのです。つまり私の聞いた音は、三次元の音ではなくて四次元の音だったわけです。

私はそれほど驚きませんでした。そしていいチャンスだからと思って、天使を呼びました。

すると本当に、翼をもったとても美しい天使がおりてこられて、

「何かご用ですか」

と、私にお聞きになるのです。

そこで私は、前からそうしたいと望んでいたことをお願いしました。それは世界中に行ってみたい、ということです。

「お願いですから、この世界を知りたいので、連れて行ってくださいませ」

すると天使は、私の手を取って、高くジャンプなさいました――。

この「ジャンプする」というのは、たいへん重要なことなのである。というのは、アストラル・トリップをするためのテクニクの一つに、夢の中でジャンプする、という方法があるからだ。またアストラル・トリップそのものが、空中を飛んでいく体験でもある。

スーパーマンは人間がつくりだしたヒーローであるが、いつも飛び始めるときにはジャンプする。また絵画などでも、飛ぼうとしている人は今にもジャンプしようという感じで片足をあげている。人間は飛ぶことができないにもかかわらず、飛ぼうとする人を描くときには、必ずジャンプするという共通の動作から始めさせているのである。

これはアストラル・トリップでの経験の、潜在意識のなせるわざである。

アストラル・トリップで四次元を訪問するときにも、ジャンプして飛んでいく。だから常日頃から、何か驚くようなできごとがあったらジャンプする、という習慣をつけておけば、アストラル・トリップはより容易になる。

以下、メキシコ婦人の話の続きを要約してみよう。

彼女は天使に、かねてより行きたかった日本と中国に連れて行ってくれるように頼んだ。そしてその願いは即座にかなえられた。

日本にきて飲んだお茶の味や日本人の習慣について話してくれたが、正確でリアリティがあった。彼女は文盲なので本を読んで日本について知ることはできないのだから、確かに日本に行つて自分でその体験をしてきたとしか考えられない。

また彼女は、次にアストラル・トリップしたときには、自分の前生を見せてほしいと天使に頼んだという。

すると大きな本を見せられて、その本には彼女の転生のすべての記録が記されていた。といっても、文字で書かれているのではなく、一ページ、一ページめくりながら、まるでそれはテレビ画面を見るような感じなのである。人間である時代の転生を見終わったら、次には鳥であった時代にまでさかのぼって見せてくれたということだ。

次に彼女は、地獄へ行つてみた。

だんだん下降して行くと川にぶつかった。その川を渡り終えると、たいへんな圧力で押しつぶされるような感じがして、そこが地獄の入口であった。

地獄は低い次元なので、凝縮された重苦しい感じがして、降りて行けば行くほどその感じは強くなる。ほとんど息ができないくらい苦しくなったので、いそいで戻つてきたということだった。

反対に上の次元、天使たちのいる高次を訪れると、すばらしい解放感があるという。

ここで、私がアストラル・トリップを行なったときの体験談も、ひとつお話ししておこう。それは夢から意識をもってアストラル・トリップを行なったときのことである。

日本に来て半年ほどたった六月のある晩のことだった。

以前住んでいたメキシコのカンクンにあるような、白い柔い砂の海岸にいる夢を見ていた。波打ち際に寄せてくる波は、ビールのような白い泡となり、水の色はあざやかな、本当の海よりももっと澄んだ濃いマリン・ブルーだった。

海岸には何人かの人があった。私は海岸を走りながら、はだしの足に砂の感触をはっきりと感じていた。

その瞬間、はっと気づいた。

「今は日本に住んでいて、カンクンにはいないのだから、これはアストラル・トリップだ」そう気づいて、走りながら大きく高くジャンプした。すると、空中に浮く軽い感覚と想像を絶するスピードを感じ、言葉では表現できないほどすばらしい、何ともいえない解放感を味わった。

それと同時に、冷静であるようにも努めていた。というのも、以前、あまりにも喜びすぎて、その強い感情のために、瞬間的に肉体に戻ってしまった苦い経験があったからである。自覚したその瞬間から、夢の中のメンタル・イメージはすべて消え去り、私のまわりはすべて黒になった。

そこで私は、自分の日本での前生を知りたいと思い、私の両親だった人に会いに行った。

というのも、私の前生は、日本人であったことを確信していたが、実際にまだどんな生涯を送ったのかは知らなかったからだ。

私は幼いころから日本人が大好きで、よく日本人の集まる場所に遊びに行った。大きくなってからは日本人のやっている店を無料報酬で手伝ったりした。そこには日本人の客がよく来たので、いろいろな話ができただけだ。また、メキシコで初めて柔道を習ったのも私である。日本に郷愁に近いものを感じていたのだ。

はじめにも述べたように、私の伴侶も日本人だ。だから私は、日本人のメンタリティと私のそれが共通の基盤にあることがよく分かる。そんなことから前生が日本人であったことは分かっていたので、この時をいいチャンスとして見に行ったのである。

アストラル界で私は両親だった人たちに会って話もできたし、今生、なぜメキシコ人として生まれたのかも理解できた。アストラル・トリップによって、私はこの人生でやるべきことをさらに確信できたのである。

ところで、あなたはどうか感じながら、これらの体験談をお読みになっただろうか。

これらはすべて事実であるし、あなた自身も体験することが可能なことである。それは今すぐ簡単にというわけにはいかないが、練習を積むことで誰にでもできるようになることなのだ。メキシコの婦人は天使を呼んだという。

高次の存在に会いたくための、特別のマントラ「真言」があるのである。

マントラとは叡知をもって組合された文字と音節で、意識集中をともなって発音されるとき、パワフルなエネルギーを発する。

マントラにはその組合せによって、さまざまな用途がある。自然界の力を操作したり、病気を治療したり、超常感覚機能を開発したり、そして高次の存在を呼び助けを願ったり、などである。

このマントラの持つ力の秘密は、人間の精神的感性を神聖なエッセンスと結びつけるところにある。音の力が活動する目に見えない次元において、高次の力と共振し、活動させるのである（したがって、決して遊び半分に発音すべきものではないことを、ここに明記しておく）。

高次の存在は私たちを助けてくれる。私たちが清らかな心を持ち、霊的進化をとげるための努力をしているならば、助けを求めて呼ぶ私たちの声をキャッチして、おりてきてくれる。

メキシコの婦人はいとも簡単にこれらの体験をすることができたようだが、それは彼女の心が澄みきっており、そういう体験をするための準備がととのっていたからである。先ほども述べたように、この世界は感情と意志が強く働く世界である。日ごろからの心の持ち方が、アストラル・トリップで訪問する世界を決定するのである。

「眠り」は一種のアストラル・トリップ

以上の実例で、アストラル・トリップがどういうものかお分りいただけたと思う。

読者の中にも、自分が体験したのはアストラル・トリップだと、お気づきになられた方もおられるにちがいない。実際、私のまわりにも、アストラル・トリップの体験者はいへん多い。むろん天国や地獄まで行った人となると数は限られてくるが、アストラル体が肉体から離れて空を飛んだ、という程度の体験者はたくさんいるのである。

それもあたりまえといえばあたりまえで、肉体からアストラル体が抜け出すことは、私たちの正常な機能なのである。何ら不思議なことではないのだ。

なぜなら、私たちが毎晩眠るときに、アストラル体は肉体から抜け出しているからである。ただ私たちの意識が眠りこけているため、それに気づかないだけなのである。

アストラル・トリップしている間は、時間や空間という概念に拘束されることはない。過去に行ったり未来に行ったり、あるいは遠く離れた未知の土地に行ったり、と自由自在である。しかし大切なのは、意識を目覚めさせておかねばならない、ということだ。そして感情と意志をコントロールすることによって、さまざまな体験をすることが可能となる。

たとえば、恋人に会いたいと強く願えば、どんなに彼女が遠くに住んでいようと、すぐにそのもとへ飛ぶことができる。もちろん、アストラル体で行っているのだから話をしたりすることはできないけれども、彼女の姿を見つめ、元気でいることを確かめることはできる。強い念力を送れば、彼女はなんとなくあなたの存在を感じるかもしれない。

また海外旅行に行ったときなど、アストラル・トリップで故郷に戻ったりすることがある。異国の地でいささかの不安と興奮を感じて気持が高揚しているうえに、より故郷への想いが強くなっているためである。

目覚めた意識と、冷静な感情と、強い意志をもって、そこへ行きたいとあなたが強く願うな

ら、次の瞬間にはもうそこに着いているのである。

アストラル・トリップは単なる夢や空想ではない。

事実、翌日に行なわれる試験の問題や、宝くじの当たり番号をアストラル・トリップで見に行った人たちがいて、現実世界に戻ったときにもそれが正しかったことを確認している。アストラル・トリップで時空間を超越したことの実証である。

しかし、ここで注意しておきたいのは、現世での利益のためにアストラル・トリップを行なうのは、あまり感心できないということだ。精神的機能が目覚めているその貴重な時間は、精神的進化のために生かすべきものだからである。

証明されたドアの通り抜け

このアストラル・トリップについて、おもしろい実験をしたことがある。

私の友人に、ただ横たわるだけでアストラル・トリップできる人がある。昼間だろうが夜だろうがおかまいなし、いつでもできるというユニークな人物である。そこで彼に協力をたのみ、私の他の友人も数人呼んで、実験を行なった。

その実験について述べる前に、彼がはじめて自分の能力に気づいたときのことを、参考までに引いておこう。

私が自分のこの奇妙な能力にはじめて気がついたとき、まず鏡を見に行きました。肉体はベッドに横たわっていることを知っていましたから、鏡にいったい何が写るのか、興味しんしんだったのです。

で、鏡をのぞきますと、色とりどりの丸い雲のようなものが写っていました。それが何なのか、私にはわかりませんでした。

次に私は、部屋の外に出ようと決めて、ドアに近づいてノブを回そうとしました。と、あっという間に、ドアを通り抜けてしまいました。そしてすぐに、ドアだけではなく、壁までも通り抜けられることに気づいたのです。

私はそんなふうにして、家じゅうをくまなく歩き回りました。中庭パティオにも出てみました。それからしばらくして、自分の部屋に戻り、ベッドにはいつて朝まで眠ったのです。

この興味深い体験を聞いた私と、その場に居合わせた友人たちは、さっそく実験してみようということになったのだ。

その実験とはこうである。

まず彼を一室に閉じこめ、外から鍵をかける。そして友人のうちの一人がドアの外に立って、彼が外に出ないように見張る。

残った数人は別の部屋に行き、いつもとは違う行動、すなわち彼があてずっぽうにいつでも当たりそうもないことをした。私自身は、部屋にあったタイプライターで、ある文章を書いた。

そして三十分後——私たちは彼のいる部屋の鍵をあけ、待ちかねた質問をあびせかけた。

彼の語るところによると、横になるとすぐ肉体から抜け出し、ドアを通り抜けて誰が外で見張っているかを見たという。それがルイスであったことを彼は簡単に言いあてた。

次に私たちがいた部屋に来了。彼は私たちがしていたことを一つ一つ細かく説明し、さらには私がタイプライターで書いた文章の内容までも言いあててしまった。ただ、タイプライターをうつ音は聞こえなかったという。うんと近寄って耳をすましてみても聞こえなかった。このことは、その後の研究で、超聴覚機能が開発されなければ聞こえないということがわかった。

この実験で、私は自分たちにもアストラル・トリップといわれる現象が実際に可能であることを確認したのである。そしてその後も研究を続けるうちに、私自身もそれを体験できるようになり、肉眼では見えない世界の存在と、そこにあるさまざまなすばらしい存在、さらに高い次元の存在も知るようになったのだ。

アストラル・トリップが意外に身近なものであり、誰にでもできるということがお分かりいただけたであろうか。

Ⅱ

異次元自由自在の
アストラル体



三次元での認識能力は貧しい

アストラル・トリップは、私たちが持つもう一つの体、アストラル体でなされるものだ。アストラル体というのは、肉体との関係で見れば、〈霊的な体〉といえは分かりやすいだろう。目に見ることはできないが確かに存在する体なのである。肉体とは別の次元に属し、したがって異なった振動数を持っているので、肉眼では見えない。

こういうあなたは、

「でもアストラル体も自分には違いなのだから、私がある存在を知らないなんておかしい」と思われるかもしれない。

しかし私たちは、それほど自分についてよく知っているだろうか。たとえばガン細胞が体のどこかにできたとき、あなたはすぐにそれを認識することができるだろうか。日に日に増え続け、人間をやがては死に至らしめるほどの力を持つその細胞さえ、もう手遅れになる頃にならないと気づかないのが、私たち人間の認識の程度なのである。いや、手遅れになり、体中をガン細胞に占領されていても、周囲の人々が見事にそれを隠すならば、当人はガンだと知らないで死んでしまうこともある。

同じ次元に属する肉体についてさえ、私たちはそんな貧しい認識能力しか持ち合わせていな

いのだ。ましてや別の次元のことなど、どれほど知っているというのだろうか。ほとんどの人々がまったく認識せず、物質世界で一喜一憂し生活しているのが、人間の正直な状態だろう。さて、私たちの肉体は三次元に属している。だから三次元の法則に縛られているが、アストラル体は四次元に属しているのもっと自由である。むしろ四次元には四次元の法則があるのだから、まったく自由というわけにいかないことはいうまでもない。

“次元”とはどういうものか

次元がちがうと、低次元の存在は高次元の存在を認識することができない。これについて、物理学者の都筑卓司氏はこう述べておられる。少し長いが、とても分かりやすい説明なので引用させていたどころ。

いまここに一次元の生物がいたとする。直線の途中に石の妨害物がある。彼には、石のこちら側にある物体を石のむこう側にもっていく能力はない。そこに二次元の生物がやってくる。二次元の生物にとってはその物体をつかんで石のそばをまわり、直線のむこう側に置くことは何の造作もない。しかしこの操作を一次元の生物が見たらどう思うだろうか。一次元の方は、とにかく直線上にしか彼の世界はない。だから二次元の生物によって物体が直

線からはずされた瞬間に、その物体は一次元の生物の視野から消え失せてしまうだろう。しばらくたってこの物体は石のむこう側に忽然と姿を現わす。二次元の人間にはあたりまえのことが、一次元の人間にとっては、とんでもない奇怪なできごとに写るのである。

三次元の世界

われわれの住む世界は一次元でも二次元でもなく三次元である。たとえわれわれが野原の真ん中でバリケードで囲まれても、その上を越えて脱出する方法を知っている。壁が高ければ棒高とびをしてもいいし、壁をよじ登ってもかまわない。あるいはヘリコプターや気球を使って脱出をはかってもさしつかえない。

しかしこれを二次元の生物が見ていたらまったく驚異である。閉曲線の中に閉じ込められている物体が突如として消え、やがて曲線の外側に姿を見せる。曲線のどの部分も破られてはいない。われわれにとって当然のことが、二次元の生物にはまったく理解できない現象になる。(中略)

卵をわらずに黄身を出す

次元の思考に関する限り、大は小を兼ねるということわざがあてはまる。つまり三次元の世界に住むわれわれが、三次元的な頭脳で一、二、三次元を理解するのは容易である。ところが一つ上って四次元ということになるとどうにもならない。(中略)

ここで一本道や運動場でのバリケードの話の思いだして頂きたい。二次元の生物は、一次元の生物がどうにもならない障害を簡単に迂回することができた。さらに三次元の人間は、二次元の生物ではこえがたいバリケードを苦もなくとびこえることができる。

仮に、大きなバレーボールを作るとき、その中に小さな野球のボールを封じ込めてしまったとする。バレーボールの外皮はひもでしっかり縫いつける。振ってみると中で野球ボールがごとごとと音をたてている。この場合は野球ボールという物体のまわりを、バレーボールの皮という閉曲面がとりかこんでいる。

ここにもし四次元の生物が来たらどうなるか。彼はたやすく中の野球ボールを外側にとり出すにちがいない。しかもバレーボールの皮には何の損傷も与えないで。

そんなことはわれわれには絶対に不可能である。これはやむをえない。人間は三次元の世界に住む動物だから。それでは野球ボールはどこを通過して外側に出たか。四次元の空間を通過したのである。二次元空間(つまり平面)は一次元空間のすぐ隣に広がっている。三次元空間(立体)は二次元空間のすぐそばに(あるいはすぐ上といった方がわかり易いかもしれない)存在している。同じような考え方をすれば、四次元空間はわれわれの知っている三次元空間に接して無限に大きく広がっているはずである。その空間をちょっと利用して野球ボールは外側に出た……と結論しなければならぬ。同様に四次元の生物は、卵のカラを割ら

ずに黄身を取り出すことが可能である。(中略)

現世は四次元空間の切り口

人間は想像力に富む動物である。見たことがないようなものをも、頭の中で考える。昔の人は、空飛ぶ船とか、地底を走るくるまなどを絵に描いた。三つ目小僧やノッペラボウ、あるいはさまざまな妖怪変化などは、すべて想像力の産物である。地獄におちた亡者たちが血の池、針の山で苦しむ絵は子供たちに恐怖の念を与える。

これらはすべて頭の中だけで考えられたものである。誰も見たものはいない。見たこともないのに、かく、あり、なんとして絵を描く。

四次元の世界も、誰も見たことがない。しかし考える能力のある人間は、これを頭の中に描こうとする。だがそれは紙の上に描き表わすわけにはいかない。この意味で、四次元の世界は怪物よりも妖怪変化よりも、もっとやっかいなものである。もっときびしい想像力が要求されるものである。

だからもし空間が四次元だったらどうなるか……という問題は、数学的な方法で調べていくのが最も確かである。具体的なイメージにとらわれず、理屈で考えていこうというわけである。しかし、そのために話が形式的になるのはやむをえない。(中略)

このことから類推すれば、われわれの住む三次元空間は、非常に広い四次元空間を二つに

分けている切り口であるといえる。あるいは四次元空間を無限に薄くしていった極限が現世であるといってもよい。ただ残念なことには、人間の眼には現世の姿しかうつらない。そのすぐそばに広々とした四次元空間があったとしても、われわれの感覚ではどうにもならない。

(都筑卓司『四次元の世界』講談社ブルーバックス、傍点原著)

以上の引用で、次元というものについてはだいたいお分かりいただけたと思う。それでは三次元に属する肉体と四次元に属するアストラル体とは、いったいどのような関係にあるのだろうか。

眠りⅡアストラル体の離脱

アストラル体と肉体との関係は、玉ネギにたとえると分かりやすい。

玉ネギのいちばん外側の皮を肉体とみなせば、その内側にある何枚もの皮がアストラル体である。それらは気体のように透明で、とても繊細なものだ。それゆえ、それら一枚一枚はよく混同されるのだが、私たちの霊の中の各々の機能によって、一枚ずつ区別できる。またこの玉ネギの中には、私たちの持つもっとも価値あるものである魂も宿っている。

こうしたものが肉体によって包まれて、目に見える次元(私たちが日常生活を行なっている

次元)では、学校や仕事などを通して活動し、目に見えない次元では肉体以外の部分が活動しているということである。

アストラル体が肉体から脱け出るという現象の、もっとも分かりやすい例が「眠り」である。私たちは毎日、一日の活動が終わったあとで、明日の活力を養うために休養、すなわち睡眠をとる。この「眠る」という行為は、私たちの肉体機能を正常に維持するために重要であり、眠らずにいることは困難である。

私たちが六十歳になったとき、平均的にいって過去二十年間は眠っていたことになる。これだけ多くの時間をついやす睡眠というものは、休養と体力回復という肉体的機能と、夢という心理的現象を生じさせる。

肉体的な面から眠りの役割を見ると、まず第一に肉体の休養があり、第二に、起きている間ひっきりなしに感じている感情によってふさがれた神経チャンネルを、洗浄する役目がある。そのため甲狀線からヨードが分泌され、私たちの生命エネルギーが流通する七万二千本のチャンネルを洗浄し、有機生命を維持させる。昼間の生活で疲れ切った神経チャンネルを、そうやって蘇生させるのだ。

だから起きているときに感情の動揺が激しければ激しいほど、長い睡眠時間が必要となる。逆に感情の起伏が少ない場合は、睡眠時間は短くてすむ。私の友人にイギリス人の看護婦さん

がいるが、彼女は一日二時間しか眠らない。たいへんな人格者で、看護婦を天職として病人の世話をしておられるのだが、どんな過剰な労働時間になっても平気である。心が安定している

ので、肉体的疲労をとり、回復するためにのみ眠るのである。
「わが辞書に不可能の文字はない」と言い放った、かのナポレオンも、四時間しか眠らなかった。そして常人には真似のできない精力的な活動を行なったが、その秘密は、実はここにある。さて、肉体がこうした回復をはかっている間、この仕事の妨害とならないために、私たちのアストラル体は肉体から離れなければならない。それが眠気を感じることであり、夢を見るということなのである。

感情があまりに強すぎると(たとえば愛する人の死を知らされたり、宝くじで何千万円も当たったなどというとき)、人は気を失うことがある。これはその瞬間、すべての神経チャンネルがつまってしまい、緊急に洗浄する必要が生じ、そのためアストラル体が急に外に出てしまうからである。

強い欲求が幽体離脱を呼び起こす

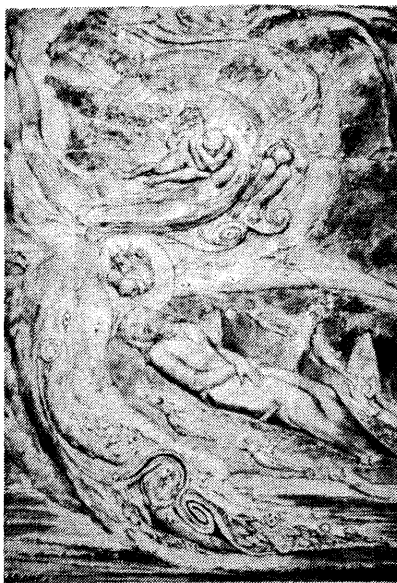
眠りによって、アストラル体が肉体から離脱することについて、もう少し身近に感じていただくために、二つの体験例をお話しよう。こんな経験は、たぶん誰にでもあることと思う。



それは生徒総会を明日にひかえた日のことでした。親友で、クラスも同じ、席も前から三番目の隣どうしに坐っている小林みどりさんが、その生徒総会で生徒会長に立候補することになっていました。私は応援演説を頼まれて、その日は放課後、その打ち合わせをしました。

これはもうお分かりのように、トイレに行ったのはアストラル体なのである。肉体の欲求と強い感情によって記憶が鮮明に残っているのです、いつもの夢とは別な印象が残ったわけである。もう一つは、熱があつてやむを得ず床についていたものの、クラスメイトとの約束が気にかかって、じつとふとんの中に寝ていられないような気分のあるときに起こったものである。東京・板橋区に住む庄司洋子さんという女高生の体験だ。

夜眠っていて、おしっこをしたくなかった。面倒なのでしばらくふとんの中でガマンしていたのだけれど、もう体中が寒くなってきた、これ以上はガマンできない。限界状態だ。そこでやっとふとんから出て、トイレに行った。トイレに入って、やれやれとおしっこをした途端、目がさめて、ふとんの中にいるのに気づいた。——と、何か釈然としない、だまされたような感じが残った。



ウィリアム・ブレイク「不思議な夢」

すると、お風呂の中でも、さっきと同じ声が、
「みどり、みどり」
と、また呼んだ。
次の朝、待ちかねて学校へ行くと、庄司さんは休んでいる。何かあったのかと、とても心配になって、休み時間に電話してみた。電話口にてた母親から、洋子さんが急に発熱したことを聞いた。もうだいたいいいのですが、といっている間に、本人がで

「みどり、みどり」

と呼ぶ声が、何回か聞こえた。確かに庄司さんの声で、もう五年以上も同じ学校に通っているし、高校生になってからはクラスもずっと同じなので、まちがえるわけがない。そら耳かとも思ったが、そう思うとまた聞こえる、という風なので、おかしいなと思った。電話をして本人に確かめるには遅すぎる時間だったので、気になりつつもそのままにして、お風呂に入った。

ちょうどそのころ、当の小林みどりさんは自室で、明日の立候補演説の原稿を読み直したり、演説の練習をしたりしていた。
そのとき、部屋の中で、

小林さんは朝霞(埼玉県)に住んでいて、私とは電車が反対方向です。駅のホームで別れたのですが、その時にも、必ずカッコいい演説をするからね、と念を押して約束しました。
ところが家に帰ってしばらくして、私は急に発熱してしまったのです。少し風邪気味だったのですが、たいしたことはないと思っていたのが、そういうことになったのです。体中に悪感が走って、ガタガタするので、応援演説のことが気にかかりながらも、ふとんの中に入っていました。
少し眠れば熱はさがるだろう、そう思っていました。一方、明日のことが気にかかってたまりません。もしかしたら学校に行けないかもしれない、とも思い、みどりに(私たちは互いに名前を呼びすてにしていました)電話でひとこと知らせておきたかったのですが、体がいうことをきかないのです。だるくてだるくて起きられないのです。その一方で、電話をかけなければ、と置いていたので、何だか眠っているのか起きているのかわからないような状態でした。

てきて、

「みどり、ごめんね。すっごく気になっていたんだけど、電話できなくて——」

と、本当にすまなそうに謝ったのだという。

すなわち、昨夜小林さんが聞いた声は、庄司さんのアストラル体が小林さんのところに行ったのだ。そして病気のことを伝えようとしたのである。

声が聞こえた、ということだが、これはたぶん小林みどりさんにだけ聞こえたのだと思う。他の人には聞こえなかっただろう。

まず、昨夜見た夢を覚えておく

以上、二つの体験談を読んで、あなたは思うわれたであろうか。たぶん誰にでも、思いあたるフシはあるはずである。

このように、眠りに入るとアストラル体は肉体の外に出るのである。どこから出るか。それは頭のとっぺんからである。松果腺（体）というところからアストラル体は外に出る。そこが異次元への出入口になっているわけだ。

松果腺というのは、間脳の上部に位置する松の実の形をした器官である。現在の生理学では、そのはっきりした機能はまだ分かっていない。ただごく一般に知られていることは、性的発育

を抑制する働きをするということだ。だから何らかの障害で子供の松果腺が破壊されると、病的な性的早熟が起こる。また松果腺は七歳から八歳にかけてもっともよく発達するが、この点、胸腺とよく似ている。また松果腺を中心としたあたりに重要なチャクラ（光の輪、霊的力の中心）があることは、よく知られている。

こうしてアストラル体は肉体をあとにするわけだが、といって完全に離れてしまうのではない。この二つの体はつねに一本の紐でしっかりと繋がっている。チャベットではこの紐を「銀色の糸」と呼んでいるが、これはゴムのように弾力があり、何千万キロにも伸びるし、かと思うと一瞬のうちに縮んで肉体に戻ることもできる。そして私たちが生きている間は、決して切れることはない。

この紐が切られるときに、すなわち私たちの死ぬときである。言いかえれば、アストラル体は私たちの肉体に生命を与え、行動させる、という働きをする体とも言えるのである。

アストラル体が体外に出ると、私たちは「夢」というかたちでその活動を認識する。夢をまったく覚えていない人、少しだけ覚えている人、よく覚えている人とさまざまであるが、覚えていようといまいと、それが私たちが実際に体験したことであるのに変わりはない。

ではなぜ覚えていないのか、と疑問を持つ方には、こういう質問をしてみたい。

「あなたは母親の胎内にいたときのことを覚えていますか」

「生まれてから、お母さんのおっぱいをのんでいたときのことを覚えていますか」

「そんな昔のことでもなくても、たとえば一年前の今ごろ、あなたは何をしていましたか。あるいは一カ月前の今ごろ、一日前の今ごろ、そして一時間前、あなたは何をしていましたか」

はつきり記憶しておられる方は、それほどおられないのではないだろうか。現実の三次元のことにしてからがそうなのだから、異次元でのことを鮮明に覚えているほうがおかしいわけだ。よほどの強い意志と「意識の目覚め」がないかぎりむずかしいのである。しかもアストラル・トリップについて何も知らないのであれば、なおさらのことだ（だから記憶している夢というのは、相当強い印象を受けたものだと考えていい）。

夢を覚えていない人は、昼間たいへん忙しく働いており、自分自身を省みる機会が少ない人に多いようだ。反対に夢をよく記憶し、それをいかしている人は、思想家や作家、芸術家などの、自分や人間というものについて内省している人に多い。昔から、偉大な予言者や芸術家たちが夢によって貴重な啓示を与えられたのは、有名な話である。

たとえば、スウェーデンの神秘思想家スウェーデンボルグは、夢によって霊界旅行を開始したし、「我思う、ゆえに我あり」で知られる近世哲学の父・デカルトは、その思想のアイデアを夢から得たという。またニュートンが、昼間どうしても解けなかった問題を夢の中で解いたということは、よく知られている。

スチーブンソンの「ジキル博士とハイド氏」も、ストーリーを夢で見て書いた本だし、タルティエニの「悪魔のソナタ」も、夢の中で悪魔がタルティエニのバイオリンを使って弾いた曲を、目が覚めてから必死に譜面に写したものだ（だから、この曲はあまりお勧めできないが）。夢は自分の意志によって、覚えておこうと思えば覚えておけるものなのだ。あなたも異次元と交信する第一ステップとして、夢を大いに生かしてほしい。

すなわち、眠る前に、

「夢を絶対に覚えておくぞ！」

と、何回か自分に言いきかせて眠るのである。そして目覚めるとすぐ、夢について考え、覚えていれば、忘れないうちにメモをとる。忘れていれば、思い出すよう努力する。

記憶力増進のマントラを唱えつつ、動かないで静かに横たわっていると、夢の記憶が遠くからよみがえってきて、しだいにはつきりしてくるから、すかさずメモをとるのである。あとでメモをしようなどと甘いことを考えていると、いつの間にか忘れてしまっているから、注意が肝心だ。

また目が覚めてすぐ起きあがると、脳の中の成分が混ざってしまい、夢を思い出しにくくさせることもつけ加えておこう。だからといって、いつまでも寝床でぐずぐずしていて、学校や会社で遅刻しても困りものであるが……。

アストラル界Ⅱすばらしい夜の飛翔世界

夢について、もう少し詳しく説明しよう。

夢には二つの種類がある。

一つは機械的^{メカニカル}な夢である。夢の中で学校に行ったり、仕事をしたり、昼間していたことと同じことをしている、日常生活の繰り返し^{メカニカル}の夢だ。夢について何の知識ももっていない人の夢は、こうした日中起るできごとの繰り返しにすぎない。

しかし時に、空を飛んだり、未来を見たりする夢をみることもある。そうしたものは、アストラル界での実際の体験であるが、それをただ単なる夢として思い出すだけの場合と、夢を見ながら、これは夢であるという意識がある場合がある。そして夢の重要性を理解し、その機能について知識をもっているならば、意識的にそうした夢を導くことができる。このようにすれば、夢は単なる夢から、アストラル界での真の体験となり、その体験を私たちの生活に大いに生かすことができるのだ。

そうなるともう「眠り」はなくなり、昼間は三次元の世界で、夜は四次元の世界で、一日二十四時間をかけての新たな人生が始まることになる。そのすばらしい時間を進化のための習得と研究・調査に使えば、まったく無駄のない、徹底的な人生を生きることができるのだ。

あなたにこんな経験はないだろうか。

夢をみていながら、

「しかしおかしい。今は夜だし、ふとんの中で眠っているのだから、学校にいるはずがない」

そう自分で考えているのである。

それが夢の中で意識を持つということなのだ。そしてそれがアストラル・トリップへの第一歩である。

今度夢の中でそういうことがあったら、夢に出ている人々や自分の足もとを見てみるとよい。夢の中だとみんなの足が浮いている。引力の法則に拘束されていないからだ。

しかもおもしろいことに、夢の中ではみんな浮いていながら、それに気づいていない。だから街を歩いていくという夢をみるとき、やはり三次元と同じように足で歩いている。しかし本当は、夢の中では歩く必要はないのである。ただそこへ行こうと考えるだけで、行くことができる。

飛びたいと思ったら、小鳥のように飛ぶこともできるし、海の中にもぐることもできる。アストラル体は水中でも平気だからである。

また自分の体が病気であるかどうかを調べることもできる。そして病気だったときは、治療することもできる。その病気が肉体に表出される前の段階で直してしまうのである。それには

アストラル界にいる高次の霊に助けを求めることだ。私たちが心の底から乞い願うとき、高次の霊は必ずやってきて援助の手をさしのべてくれる。

「ただよ、さらば開かれん」

という言葉があるが、これは単なる言葉ではない。私たちと高次の存在との間の約束なのである。だから何か困難に陥ったときには、彼らに助けを求めることだ。そうすれば必ず援助がある。

またそこでは、前生を再現して、自分の現在の人生の意味を知ることでもできるし、シンボルを通して、自分が現在抱えている問題の解答を得ることもできる。また遠くエジプトのファラオの時代に旅して、疑問に思っていることを調べたりもできるのである。

どうだろう。

すばらしいとは思わないだろうか。

これがアストラル・トリップなのである。

朝、目が覚めるとき、アストラル体は肉体に戻る。出ていったときと同様に頭から入るので、その勢いがあまりに強いときなど、思わずヒザがガクッと伸びることがある。目覚めるときにそんな体験をしたことがある人も多いに違いない。

忘れた夢を思い出す法

しかしこのような夢のコントロールができない間は、私たちの夢は、時代や人・場所などがごちゃごちゃに混ざりあったメンタル・イメージの投影にすぎない。

だがそれでも、夢は、すべての夢は私たちにとって重要である。だから夢を忘れずに思い出し、一冊のノートに書きとめておくか、あるいは録音するなどして記録しておくのは大切なことなのだ。なぜなら、そのとき理解できなかったことでも、時がたってから明快に理解することが多いからである。目覚めたときに思い出せなくてもあきらめずに、日中に瞑想して、記憶の逆行を試みよう。

ここで一つ、プラクティスをお教えしよう。

〈前生を思い出すためのプラクティス〉である。記憶を活性化させるので、夢を思い出す際にも役立つものだ。

① 鏡を用いる方法

用意するもの——鏡・白いローソク一本
方法

- ①他のものがあまり目に入らない場所に、鏡とその横に一本のローソクを置き、火をつける。
- ②その鏡の前に坐り、なるべくまばたきしないように注意しながら、自分の目を凝視する。
- ③ハートに意識を集中し、自分の内なる母に前生を見る許可を願う。
- ④マントラ「イース」を数分間唱える。このマントラのSの音は、歯の間から息を吐きつつ発音するSの音である。

- ⑤リラックスして、鏡の中の眉間に集中する。
- ⑥リラックスした姿勢で鏡をみつめる。

〈注意点〉いつも自分のハートに前生を見る許可を願うこと。

② コップの水を使う方法

- ①テーブルの上に、水をいれたコップを置く。このコップはできれば銅製のものを扱い、底に鏡をおき、水銀をいれておく。その上に水をそそぐ。銅製コップが用意できない場合には、普通のものでもよい。
- ②コップからおよそ六〇センチ離れたところに坐る。
- ③先ほどのマントラ「イース」を数分間唱える。
- ④水の表面を見る。

〈注意点〉細かいやり方は鏡を使ったときと同じである。この方法はノストラダムスが予言をするときに行なったのと同じものだ。

夢のメッセージをどう読みとるか

しかし、こうして夢を記憶していったところで、その意味を理解できないなら、何の役にも立たない。夢のメッセージは、私たちが普通に生活しているときのコミュニケーションの手段とはまったく違う。多くのシンボルによって象徴的に表現されているのである。だからその夢が何を表わしているのかを知るためには、夢の言語Ⅱシンボルの意味を理解しておくことが不可欠である。と同時に、ただ単純にシンボルを解釈していくのではなく、直観を開発することが大切である。

たとえば夢の中に、亡くなったおばあちゃんが現われたとする。そのときそのおばあちゃんを、かつて生きていたおばあちゃんと同一視すると、解釈を誤る。おばあちゃんとあなたの関係を考えることが大切だ。あなたにとって「おばあちゃん」はどういう意味を表わしているか、ということである。「信頼」かもしれないし、「憎しみ」かもしれない。「口うるさい」ということなのかもしれない。

一方でそういうことを考えながら、それを他のシンボルの意味と組合せていくのである。シ

ンボルにはユニバーサルなものもあるし、あなたにだけ特別な意味を持つものもある。そういったことを、直観を働かせながら読みとっていくのである。

これは訓練をつむことで、より正確な意味をつかめるようになる。そして日常生活の中で、自由自在にいかしていくことができる。あなたがそれを実行していけば、夢のほうでもそれにこたえて、メカニカルな夢がアストラル・トリップへと、どんどん変わっていくのである。

シンボルの解釈については、本書の最後に付録として〈夢を解釈する鍵——シンボルとその意味〉にリスト・アップしておいた。それらのシンボルを状況に合わせて適用し、理性や論理よりも直観によって、あなた個人に向けられた大いなるメッセージの解釈に役立てていただきたい。しかし、鍵はあくまで鍵であって、そのものではない。その点を忘れないように。なに、ごとも狂信的になつては、かえってその効力を弱めるものである。

お風呂の縁がスーッと下がって……

私が日本で行なった講座の、熱心な参加者の一人であった井田タエさんが、学びはじめて半年後にこんな夢を見たと話してくれた。

私は診察室のベッドにあおむけに寝ていました。だれかが腹部を診察してくれ、私は右脇

腹に痛みを感じていました。診察してくれた人が、

「肝がゆがんでいます」

と、私に告げました。

すぐに場面が変わり、待ち合い室のようなところにいました。私にだれかが何かを手渡し、

「まだ、あります」

といって、いなくなりました。

待っている、長方形の、といつても縁は波のような曲線を描いてカーブしたものをくれました。それは透明なガラスのようなものでできていました。少し厚味があり、中には水が入っていて、小さな魚がヒラヒラと泳いでいました。赤・青・黄……色とりどりの元気のよい魚でした。私は、

「へえ、これが薬？　生きているのに飲むのだろうか。これは何だろう。しかしきれいだ」と、思いました。

そして、聞いてみようと思つてそのまま待っているうちに、目が覚めたのです。

そして井田さんは、それから一カ月後くらいに、その夢と関連したもう一つの夢を見たという。

私はお風呂場にいました。洗い場のところで、赤ちゃんを抱いて立っていました。湯船の中には、すでにだれかが赤ちゃんを抱いて入っていました。

私も入ろうとしましたが、お風呂の縁が少し高いのです。両手は赤ちゃんを抱いているのでふさがっていますし、だいたいようぶかしらと心配していると、お風呂の縁がスーッと下がったのです。まるで自動ドアのようにそこだけが下がり、しかもお湯はこぼれません。そこで私はお風呂に入りました。抱いた赤ちゃんとの肌のふれあい、実感としてありました。

この二つの夢は何を意味しているだろうか。井田さん個人に伝えられた、より深い、具体的な意味は、彼女を本当に理解していないと正確に解釈できない。私は彼女についてそれほど多くのことを知っているわけではないので、ユニバーサルなシンボルの意味から、この夢の概略的な解釈を試みた。

まず言えることは、この夢は性エネルギー昇華についての夢だということだ。

性エネルギーは人間がもつエネルギーの中でもっともパワーがあり、もっともすばらしいものである。性エネルギーはまた生命エネルギーでもあり、人間の生命力の根源である。

しかしそれだけパワフルなものだからこそ、使い方を誤るとたいへんなことになる。このエネルギーを昇華し、高めていくことによって、私たちは大きな偉大な仕事ができるのだ。

だが反対に、昇華しないで消耗していくならば、生命エネルギーを無駄使いしているのと同じことだから、病気になったり、精神的な問題を起こしたりするようになる。

性エネルギーを昇華し創造的な仕事に向けていくためには、いくつかのテクニクが必要だが、井田さんはすでに私の講座でそれを習っていたから、こういう象徴的な夢を見たのだろう。

夢の解釈で現実を変革する

井田さんが見た第一の夢では、肝がゆがんでいると言われている。そしてそれを直す薬は水の中を泳ぐ生きた魚であるという。

肝が意味するものは何だろうか。肝とは東洋医学という経絡^{けいよく}の一つである。経絡というのは人体内のいろいろなエネルギーの流れ道のことだ。その一つである肝経は、生殖器と大きなかわりを持っている。そうすると、肝がゆがんでいっていることは、性にかかわるエネルギーの流れにゆがみがある、と解釈できる。

水の中で魚が泳いでいるというのは、本書巻末付録にもあるように、性エネルギーをコントロールする必要性があるということである。水は生命の水、魚は性エネルギーの象徴である。

そうすると、この夢は性エネルギーを昇華させなければならない、ということを表わしているわけだ。井田さんが何らかの理由で、性エネルギー昇華のエクササイズを休んでいたのかも

しない。

そして第二の夢を見ると、井田さんがこのメッセージを正確に解釈し、生かしていることがわかる。

なぜなら、第二の夢にでてくる、井田さんの腕に抱かれた赤ちゃんは、性エネルギー昇華によって誕生する内的な子を表わしているからだ。

性エネルギーが母（仙骨に鎮座するクンダリーニ）をはらませ、父（ハート）に至ることによって、三位一体が形成される。その三位一体によって誕生する、本当に清らかな、霊的な子、それが錬金術という黄金の子である。それを胸に抱いているのである。

そしてお風呂は体を洗うところであり、お湯は水が熱せられたものだ。つまり、性エネルギーを昇華し、その純粋なエネルギーで心理を洗い清めよ、というメッセージを聞くことができる。縁が高くて入れるだろうかと思ったお風呂に入れたということは、困難に思える道も願うならば援助があり、性エネルギー（お湯）をこぼさずに歩いていけるということである。

このようにして夢を解釈していく。そして夢が表わしていることを理解したなら、それを即、実行にうつすわけだ。そうするとその結果も、こうして夢によって受けとることができる。

学校で習う勉強——すなわち三次元での習得の方法とはかなり異なるが、異次元での勉強・習得はこのようにしてなされ、そうしてこそ精神的進化を遂げることができるのである。

夢と親しく付き合い始めたら、あなたの前にはまったく別な世界が広がってくる。そして精神的な世界での多くのことを学ぶことができる。物質界で勉強し、精神的世界でも学ぶというすばらしい人生が始まるのである。そうすると、精神的世界と物質界との深い関連にも気づくことだろう。

そういった知識を現実社会で生かせば、あなたは、他の人々がやりとげることのむずかしい大きな仕事さえ、やりとげることができるのだ。

アストラル・トリップの敵は恐怖心と怠惰

だから重要なことは、アストラル・トリップすることである。あきらめることなく、アストラル・プロジェクトションを訓練することなのだ。すなわち、肉体からのアストラル体の離脱を行なうために、練習を重ねることである。

この現象は半分眠った状態の時に起きあがることで、誘発することができる。まったく深い眠りに落ちる前、しかし目覚めている状態でもない。それはちょうど酔っ払いながら、自分が酔っているという自覚があり、しかし自分の体をコントロールすることができず、それにもかかわらずいつもの道を歩くことはできるような感じである。このような通俗的な例をもって説明することを許していただきたい。この半覚醒の状態を理解することが重要なのである。

その正確な瞬間の感覚（振動）を体得し、その時に起きあがれば、体の分離が意識的になれる。これはあくまで「起きあがる」のであって、「起きあがると考える」のではない。肉体とアストラル体が離れるように、本当に起きあがらなければならない（酔った例をあげたからといって、酔ったままアストラル・プロジェクトを試みてはならない。何が起る自覚もなく、またアストラル体を意識的にコントロールすることもできないからである）。

そして夢やアストラル・トリップで重要なことは、できるだけ意識をもって実行することである。それは正しいテクニックと練習さえあれば、誰にでも可能になる。

読者の中には、誰に教えられるまでもなく、まったく自然にこのアストラル・トリップを毎晩行ない、他の人ができないのを不思議に思う人もいるはずだ。それほどこのテクニックは一般に可能なのである。

そして夢やアストラル・トリップは、私たちのノーマルな機能であることをくれぐれも忘れないことだ。だから「戻ってこれなくなるのでは」という心配や恐怖心は無用だ。

その証拠に、私たちは生まれた時から今まで、毎晩肉体の外に出ているのに、無事にここにいるではないか。

それから、私たちの最大の敵は「怠惰」であることも忘れないこと。初期の練習で思ったように効果があがらないと、この敵に負けてしまいがちだ。

恐怖心と怠惰、この二つが、私たちの勝利を妨害する強敵なのである。

“ファラオーン”のマントラで体が宙に浮いた

アストラル・プロジェクトには無数の手段とシステムがあるが、それを体得すれば、四次元、そしてさらに高い次元へと至るチャンスを手にし、時空を超越した真の自由世界に到達できる（Ⅶ章参照）。

やはり私の講座の参加者で、この中のテクニックの一つを試みた人がいる。山内ミツさんという女性である。

私は女性に年をきく習慣はもち合わせていないので、山内さんがおいくつなのか存じあげないが、昨年お嬢さんが結婚されたから、それくらいのお年の方とだけ申し上げておこう。

山内さんは熱心に練習された結果（ある時は三時間にもわたってマントラを唱え続けられたということだ）、次のような体験を持つことができた。

アストラル・プロジェクトといっても、私はまだ数回しか体験がありません。はつきりしているものだけをお話いたします。

私の場合、偶然に肉体から出ることができたという段階のみです。

その離脱の状態は毎回違いました。

「ファーストオーン」

と、マントラを何回も繰り返して、メンタルにも続け、体は静止の状態にしておきました。そうして三時間ほど経過したでしょうか、突然浮きあがった感じとすばらしい解放感を感じました。肉体の中にこんなにも締めつけられていたなんて、肉体の外に出てみなければ分からないことです。ほんとうに何ともいえない解放感でした。

そして次の瞬間、「空間にいる」と自覚したとき、左側で数人の合唱が聞こえました。また私のそばすれすれに、可愛らしい声を通り過ぎていきました。レコードの回転を速くしたような感じで、「タンネー」というような、ちょっと違うかもしれないませんが、そんな言葉のようでした。そして天井のほうから強い笛の音がして、その途端に肉体に戻っていました。でも、聞いた声ははっきりしていました。

次の体験は、自分で意識してやろうと思ったのではなく、半ば夢に近いような感じで始まりました。

部屋の隅のほうに白い衣服の人が坐っている、と思った瞬間、足先のほうから、ゆさぶられるような感じで、アストラル体がスーッと上体から頭部に移行し、肉体から脱け出しました。部屋の天井が近くなり、抵抗感なく通り抜けたようでした。

気がつくとき暗い空間にいて、たしかに自分が浮いているのが分かりました。そして右のほうから腰のあたりに風が吹きつけてきて、少しの間ですが横に押し流されました。

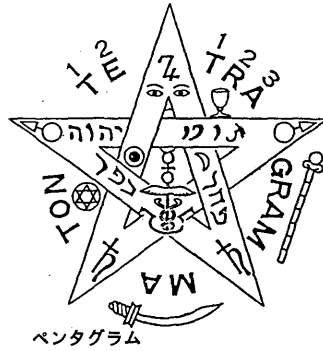
その時、前生に行ってみたいと思いました。暗い空間の向こうに、赤やピンクなどの濃淡で何かが見えました。ところが次の瞬間、もう目の前に壁がありました。そして、危ない、と思いました。やはりぶつかってしまい、肉体に戻ってしまいました。

その次の体験での脱け方は、特徴があるものでした。

マントラは続けていましたが、まったく予期しないのに、突然頭の上のほうで、強い回転が起きました。そして急激な解放感と同時に、スポンと勢いよく脱け出し、私は部屋の隅のタンスの前に立ったと思うと、次にはもう天井が目の前に見えだしてきて、ぶつかってしまいました。

これに似た離脱体験はもう一つあって、それは頭の上から、回転なしに、静止した状態からまったく突然にボーンと脱けだしたものです。びっくりしましたが、やはりすばらしい解放感がありました。

山内さんは練習を積むことで、もっとうまくいこうと思う。壁にぶつかる、と思ったらぶつかって普通の体に戻ってしまったというが、このようにアストラル・トリップでは意識の



クリム クリスナヤ ゴビンダーヤ
ゴビハナー バヤ バヤ スワーツ

金縛り防御法

I章で紹介した西田君のところへも、金縛りにあって恐いのだが、どうすればいいでしょう、といって相談にくる女生徒が多いという。その中の一人、片田晴子さんの話をここに紹介しよう。

といっても、片田さんご本人のことではなく、彼女の友達のことである。高校が違うので、西田君に直接相談に来られなかったのだ。

持ち方がすぐに影響してくるのである。意識のコントロールが、アストラル・トリップでの体験を豊かにしていくのだ。

ペンタグラムで金縛りを解く

アストラル・トリップの体験者には、金縛りになりやすい人が多いようだ。私のところにもよく、どうすればいいかという質問が寄せられるので、その防御法について書いておこう。読者の中にも実際に金縛りになって、恐い思いをしたことがある人もおられるだろう。

金縛りにあうと、文字通り体をまったく動かすことができない。指一本さえ動かせない。しゃべることもできないし、この状態がいつまで続くのか、もとに戻ることもできるかどうかさえわからない。絶望的な状態である。

でもその時、たった一つだけできることがある。それは、「考える」ということだ。そこで、「私はペンタグラムである」

と考える。そしてペンタグラムの形（星型）をかたちづくるのである。体は動かせないのだから、想像力でそれを行なう。ペンタグラムはポジティブなエネルギーで充滿しているので、そのことも想像しながら行なえば、金縛りの状態はおさまる。

あるいは何か信仰をもっている人であれば、宗教的な言葉を考えてもよい。

「キリストの名において、私をはなせ」

「ブッダの名において、私をはなせ」

そう命令する。そうすると、すぐに金縛りは終わるのである。またマントラを唱えてもよい。口は動かさないから、声をださないでメンタリー（心の中）で唱えればよいのである。

ペンタグラムのマントラは次のように言う。

その子によく金縛りにあうらしいのです。一週間に数回、一回ってことはないっていました。

ところが最近、金縛りにあうと、ただ体が動かなくなるだけではなくて、へんな男の姿が見えるようになったというのです。いつも自分の前に立っていて、いつも同じ男だということとです。

彼女も最初は幻覚だと思っていたのですが、何回もその男を見ているうちに、それが幻覚ではないことが分かるようになったそうです。なぜかという、とても意識がはっきりしていて、起きているときと同じ状態であっても、その男はやっぱり彼女の前に立っていたからです――。

ところが最近になって、その男が幻覚でないことがもつとはっきりと分かるようになった。というのは、その男がただ立っているだけでなくて、首を締めるようになったからだ。実際に締められるので、息が苦しくなる。もちろん、とても怖い。それがたび重なって、どうしていいか困っているときに、片田さんに会い、そういう話をするようになったのだそうだ。

片田さんはその話をきっそく西田君に伝え、相談した。そして前述のペンタグラムの防御法を教わった。

ちょうど教わったその日、彼女はまた金縛りにあった。そしていつものように男が現われ、彼女のほうに寄ってきたので、すぐにメンタリーにペンタグラムを形づくった。するとその男は近寄ってこれられなくなり、彼女のまわりをグルグルとまわり始めた。

しかし、彼女は、ペンタグラムをすぐに思い描いたものの、恐怖で動揺していて集中できず、また教わったばかりで練習（思い描くための練習。たとえばペンタグラムを前に置いて瞑想するなど）していなかったから、正確に、完全なペンタグラムを思い描くことができなかった。星型の右側が少し欠けているような感じになっていた。

そうするとその男は、そこに近づいて、そこから手をニョロツ（彼女の表現のまま）とさしこんできて、彼女の腕をつかまえた。

そこでおもわず、

「神さま、助けてください！」

と叫ぶと、男の姿も消え、金縛りも解けていたという。

テレビなどで超常現象の特集を組むとき、女優さんや歌手のかた（だいたい女性）がゲストとして招かれ、自分の金縛り体験を語ることがある。たいてい、怖い、怖い、で終わっていて、どうすればいいかということは語られていなかったと記憶している。

金縛りというのはほんとうに体験者が多く、女性なら誰でも、必ず一度くらいは経験してい

るものだ。だから、あなたの周囲の女性たちにも、ぜひこの防御法を教えてあげていただきたい。

そして彼女たちを、無益な恐怖から救ってあげてほしい。

より充実した人生のためにアストラル界へ

では本章の最後として、アストラル界について説明しておこう。

アストラル・トリップしても、行った先について何も知らなければ、学ぶことも体験することも貧しいものになってしまう。何があるかも知らずに、まったく未知の土地へ行ったようなものだ。行きあたりばったりにそこそこの体験はできるだろうが、知っていればもっと充実しやすことができるし、危険にもあわなくてもすむ。

アストラル界にも危険なところはたくさんあるから、そのためにもこうした知識は役に立つものだ。

アストラル界は、この物質界よりもずっと広大な世界である。それは私たちの住む世界と平行した次元であり、地球上と同じく多くの活動があり、住人がいる。

アストラル界では、食べる必要もなければ引力もない。時間もこの世とは異なる。だからアストラル界で太陽に行くには、たったの七分しか必要としない。

アストラル界では話す必要もない。考えるだけでメッセージが伝わる。だから外国人とも、他の惑星の住人とも意志の疎通ができるのである。

またこうしたアストラル界での体験を通して、ユニバーサルな医学を学び、病人を治したりすることもできる。

世界の真の歴史を調査することもできる。アカシック・レコードにすべてが記録されているから、アトランティスやムー大陸、日本の前史時代を見ることが出来る。

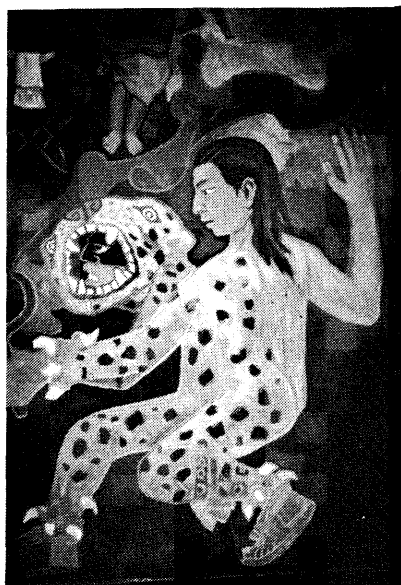
また、さらに上の次元で、これから地上に生まれようとする子供たちの魂に会うこともできる。五次元に行くには、アストラル界にいながら上を見上げ、天井のようなものが見えたら入口を捜すのである。

もし見つからなかったら、

「開け、ゴマ」

と叫ぶ。この単純な呪文は、壁などに突き当たって通れないと思ったときなどにも使える（アストラル界では壁も屋根も自由に通り抜けられる。ひょっとすると、おへそのあたりにくすぐったい感じがあるかもしれないが、ほかにはほとんど何の抵抗も感じずに通り抜けられるだろう）。

さらに、地球の低い次元を訪れることもできる。そこはいわゆる地獄だが、地上で罪を犯し



ナーワリズム・メキシコの壁画

た人たちが苦しんでいる。自殺をした人、裏切り行為をした人、その他もろもろの罪人がいる。そして彼らに、肉体の死後、地獄で苦しめないようにするには、今何をすべきかを問うこともできるし、どのようにして他人の役に立てるかも聞くことができる。

こうした低次元に降りて行くときには、しだいに圧力が高くなっていくのを感じる。反対に高次元に行けば行くほど、軽く自由な感じがする。

しかしここで重要なのは、こうした体験は宇宙と自分自身を知り、そこに秘められた神秘と、私たちのこの地上における役割を理解するためだということである。

わたしたち人間は、宇宙についても自分自身についても、よく分かっていると思っているかもしれないが、しかしそれはほんの表面のことだけである。その奥には無限の世界が広がっている。そしてふつうの人は、自分が知らないということさえ、知らないのである。

しかし、一度でもアストラル・トリップを体験すれば、いかに今まで自分が知らなかったかを悟ることだろう。

日々、意識を持って肉体から離脱するということは、また「死ぬこと」を習っているのと同じである。すなわち死とは、人生の卒業のようなもので、肉体が死んだとしても、自分は存在し続けるのである。そのことを理解すれば、死に対する恐怖もなくなるだろう。

さらにまた、これは夢遊の体験のある人に起こりうることだが、アストラル界には肉体を伴

っても入ることができる。半覚醒のときにアストラル体だけが起きあがるのではなく、肉体もいっしょに起きあがってしまうのだ。そんなときは何も驚かずに、空中に浮くつもりでジャンプする。そのまま浮いているようだったら、肉体ごとアストラル界へ入ったということである。これがナーワリズムの現象である。カルロス・カスターナダの著書にある呪術師ドン・ファンもこのテクニクを習得し、姿を消すことができるようになったのである。アストラル・プロジェクションといいナーワリズムといっても、その根本は非常に近いのである。

ともあれアストラル界での行動範囲は、あまりにも広大である。それは同時に、私たち人間の行動範囲も無限に広い、ということの意味している。そうした世界を見ることによって、私たちの現在の人生を、より充実して生きていくことができるのである。

Ⅲ

死後の世界は
どうなっているか





銀色の糸が描かれた中国の版画

銀色の糸が、肉体とアストラル体をしっかり繋いでいるならば、アストラル・トリップをしたあとのアストラル体は私たちの肉体に戻る事ができる。三次元での生活が続けることができる。

しかし銀色の糸が断ち切られると、アストラル体はもう肉体に戻ることにはできない。そしてアストラル体を失った肉体は、ただの物質と化してしまう。それが「死ぬ」ということ

い。

本書をここまで読みすすめてきた読者ならば、死後、私たちにどのようなことが起こるか、少しは推測できるだろう。

外見上「死」と「眠り」とは、たいへんよく似たものだが、そのただ一つの違いは、銀色の糸が繋がっているか否か、である。

「銀色の糸」が切れたとき

私たちの死後には、いったいどのような事が起こるのだろうか。

このことに興味を示さない人はいないだろう。

この章では、死後私たちに起こることを順を追って見ていきながら、今生をどうすごせばよいかを考えていこう。

さて、世間一般ではいまだに、

「人間は死んだらそれでおしまい。何もかもなくなってしまおう」という説が信じられている。

しかし、死んですべてが終わりになるのなら、何のために生まれ、何のために人生の苦勞を味わうのだろうか。この秩序正しく、何ひとつとして無駄なもののない宇宙において、ただ一つ人間の人生だけが無意味などということは、あり得ないことだ。

あなた自身、あなたが今、生きて努力したり感動したりしていることが、まったく意味のないことなどという考え方を、受け入れることができるのだろうか。

「肉体の終わり＝自分の終わり」という考え方は、魂の存在を忘れ、肉眼で見えることのみを信じるという、片寄った思考に陥った現代人の、傲慢な心から生まれてきたものにほかならない。

だ。

だから「死」とは、私たちがふつうに考えているほど恐いものではなく、宇宙のプロセスの中での状態の変化にすぎないのだ。

それは次のような例で、もう少し分かり易く理解できるだろう。すなわち、死と眠りの相似性である。

昼間起きていて活動したならば、夜は眠る。同様に、今生を生きて活動した後は、死の段階に入るのである。目が覚めたら次の日が始まるように、死後のプロセスを終えたら、また次の人生が始まるのである。

そしてまた、今日を精いっぱい生きたなら、すばらしい明日がくるように、今生なすべきことをなして精いっぱい生きるならば、次の転生はさらに有意義なものになる。そうやって転生を繰り返しながら、人類は進化していくのだ。

むろん進化する人ばかりではない。退化してゆく人もいる。

そこで、進化するためのポイントは、

「肉体が与えられている間に、どれくらいのことを習得できるか」

ということにある。そして肉体の死後、何が起るかを知っていれば、その習得はよりたやすくなる。

そうした死後のための準備は、生きて肉体を持っているときにしかできないものだ。すなわち死について学ぶことは、生について学ぶことでもあるわけである。死を学ぶもつとも有効な方法、それがアストラル・トリップなのだ。

さあ、ではこれから、私とともにアストラル・トリップして、死後のプロセスを見ていこう。

人は死ぬと軽くなる

人間が死ぬと、ふつう、その肉体は火葬、または土葬にされる。火葬は仏教信仰の国で、土葬はキリスト教信仰の国で行われている死体の処理方法である。そのほかに鳥葬といって、死体を野に置き去りにして鳥たちに食わせる方法もある。これはインドとチベットの一部分で行なわれている。

肉体はそれで終わりである。

では、その時、目に見えない次元では何が起こっているのだろうか。

肉体が最後に吐く息を通して、霊魂は体の外に出る。これは生まれる時とちょうど反対で、生まれる時には受精した瞬間の母親の吸う息とともに、魂は肉体に宿る。

霊魂が肉体から出ていった瞬間から、肉体はその機能を失って、肉体が属するところの土（地球）に戻る。しかし霊魂は、高次元に向かって上昇する。四次元へ、さらに五次元へと向

かうのだ。

死の直後、肉体から脱けたアストラル体は、よく天井あたりにとどまって、そこで起こっていることを見ている。ちょうどアストラル・トリップで肉体を脱けた時と同じだ。見おろすと、ふとんの中で眠っている自分が見えたように、そのときには死んだ自分が見える。

そして自分の死体のまわりで、家族や親しい人々が泣いたり話したりしている様子が見え、また葬式の打ち合わせやその費用のこと、遺産相続のことなど、話している内容もわかる。聞こえるわけではなく、分かるのである。さらに、集まっている人たちが何を考えているかも、分かっている。肉体の束縛を離れ、三次元の法則に拘束されなくなったからだ。

しかしこのとき、人間が死んだらそれでおしまいだと考えていた人たちは、その状況が何を意味しているのか理解できない。死んだら無だと思っていたのが、死んでも意識があるため、その状態を死だと認識できないのだ。自分が死んだということが、分からないのである。だから自分は生きていると思い、死んだ時の苦しみをそのまま持ち続けてさまようことになる。

死ぬ間際の体重と、最後の息が出たあとの体重を測って、比較してみるという試みは何度かなされている。その結果は、死んだ後、すなわちアストラル体が外に出た後は、何グラムか軽くなっている。実験者によって重さの違いはあるけれども、軽くなるという点においては一致している。肉体と霊魂（アストラル体）が分離することを証明する、興味深い事実だ。

たぶん眠っているときにも、同じ結果を見ることができるよう。

人生のプログラムは変更可能

肉体が死ぬということは、肉体と生命体をつないでいた「銀色の糸」が切られるということだ。この銀色の糸は光線のようなもので、生きている間は決して壊れることはなく、死が訪れてはじめて切られるものだ。

誰が切るのかというと、死の天使（死神）が切るのである。骸骨のような姿をし、大きなかまを持っている。よく絵画などで、死が近づいている人のそばに描かれているあの姿である。目に見えない次元に確かにいる存在なので、超視覚を開発すればあなたも見ることが出来る。

というのは、死の天使は私たちが死ぬ時にだけ現われるのではなく、いつも私たちの左側にいて、死ぬのを待っているからだ。というとなんだか悪者みたいだが、そうではなくて、死んだ後の私たちを援助するためにいるのである。

死の天使は骸骨の制服（ユニフォーム）を着ている。しかしその服の中にはいるのは天使で、人間を助ける役目を受け持っている。彼らもかつては人間であったが、その修行を終え、さらに上の次元でこのような仕事を持って、私たちを援助してくれるのだ。そしてあなたも、人間としての修行を終えたなら、天使の段階にまで上昇することもできる。たいへんなワークを続けなければならな



い困難な道ではあるが、不可能ではない。

死の天使が銀色の糸を切らないかぎり、私たちは死ぬことはない。たとえ植物人間の状態であろうと、この糸は繋がっている。しかしこの糸を切るか切らないかを決定するのは、死の天使ではない。それはもっと高い次元でなされる仕事である。

だからといって、人間の死の時期が絶対的なものとして決まっているかという点、そんなことではない。もちろんある程度の目安はある。私たちは「運命」というものをもって生まれてくるのだから、だいたいこの人生のプログラムは決まっている。しかしそれは決定ではない。変えることができる。

そのままの人生をおくるならば、プログラム通りにすすむが、意識の目覚めと進化への意志があるならば、運命は変えられる。死の時期だって変えられる。そのための方法があるのである。

反対に死ぬ時期が来ないのに、葬られることもある。すなわち銀色の糸がまだ繋がっているのに、火葬にされるのである。そうするとその人はたいへん苦しむことになる。

死の判定は眼球を押して

まだ完全に死んでいないのに、葬られてしまうことは、まああることである。だから火葬す

る前に、肉体が完全に死んでいるかどうかを十分に調べたほうがいい。

肉体的に見ると完全に死んでいるようであっても、周囲に起こっていることはすべて分かっているのに、自分からは何も伝えることのできない状態なのかもしれない。

たとえ心臓の鼓動が聞こえなくても、脈がなくなっているとしても、生きている場合もある。息をしているかどうか確かめるために、鼻に鏡をあてる方法があるが、その鏡が曇らなくても生きている場合がある。

アストラル・トリップして調べれば、その人の生死はすぐに分かることだが、それができない場合でも調べる方法がある。

それは、眼球を押してみることだ。

押すと眼球は変形するが、それがそのままに戻らないようであれば、完全に死んでいる。しかしもう一度丸い形に戻ったならば、まだ死んではいないのだ。いかに死んでいるように見えたとしても、決して葬ってはならない。

銀色の糸が死の天使の大ガマで切られると、次には光に満たされた筒のようなもの、シリンドラーのようなものの中を、スピードをあげて上昇していく感じがある。

このシリンドラーは何かという、神々のエネルギーと私たちのエネルギーを関連させているものである。

そして感覚的には、たいへんな勢いで上昇していったようだが、上昇が終わると、肉体の真上に浮いている。

アストラル・トリップのときにも、これと同じ現象が起こることもある。だから生きているうちにアストラル・トリップの練習をし、肉体の外にいたときに意識をもつ訓練を積んでおけば、死んだときにこういう状態になっても驚くことはない。ちょうど宇宙飛行士たちが、何度も何度も、宇宙空間にでたときのシュミレーションを繰り返し返してから、本当の宇宙への旅に出かけていくように、アストラル・トリップを死のシュミレーションとして練習するのだ。そうすることによって、彼らが命綱なしで宇宙空間に出て、冷静に役目を果たしたように、死に際しても目覚めた意識で冷静に行動できる。

だが、死に対する予備知識なしにこういう状態になると、眼下に見える自分の死体を他人だと思ってしまう。自分の死を自覚できないからだ。

ではこれが、自殺をした人だと、どうだろうか。

自殺をする人は、死ねばすべてが終わると思って、命を断つ。しかしいざ決行してみると、確かに死ねたと思ったのに、意識は持続している。そして下方には、無残に破壊された自分の肉体が見える。そのときになって、バカなことをしたと後悔しても、もう肉体に戻ることはできない。

また、自殺した人のほとんどは、本当に死にたいと思ってはいなかったことが、自殺未遂者のその後を見ているとよく分かる。自殺は発作的な感情の高まりや、催眠状態になって何かにあやつられているような状態のときに起こるものなのだ。

さてこのとき、まだ寿命が残っていて、銀色の糸が切られていなければ、もっと悲惨なことになる。

たとえ肉体の中に戻ったとしても、肉体は破壊されているのだから、話すことも動くこともできない。まだ生きているのだということ、どうやって知らせることができるだろうか。

やがて葬式が始まり、火葬にされる。このとき、どれくらい苦しむか想像できるだろうか。生きながら焼かれているのと同じことなのである。

そしてさらに悲惨なことに、自殺をした人は低次へ、すなわち地獄へと下降することになる。この世でどんな地位にあり、世間から尊敬される立派な人（のように見える）であろうとも、同じである。

今、三島由紀夫の霊界通信ということが世間を騒がせているようだが、彼は自殺をしたので、その魂は低次のふさわしい段階にとどまって洗淨の過程にある。通信を送ってきているのは、彼のパーソナリティーである。すなわち幽霊だ。あまりにも強いパーソナリティーを持っているので、そのエネルギーがまだ残っていて、そういうことをやっているのである（パーソナリ

ティーについてはV章参照）。

偉大なる発光体の質問

このようにして肉体から離れた靈魂（アストラル体）は、肉眼では見えなくても、確かに存在し続ける。そして次には、すばらしく光輝く発光体と出会う。

ニア・デス（Near Death 近似死―臨床医学的に肉体が死んだ状態）体験者のあるユダヤ人は、「私はユダヤ人なのに、イエス・キリストに会いました」と語っている。

また、ニア・デス経験をした人の中の無神論者たちも、同じような発言をしている。

なぜなら、キリストとは宇宙的なエネルギーだからである。すなわちキリストとはキリスト教成立以前から存在しているし、さらにはクリシュナの起源以前から存在している。この場合のキリストとはむしろ、イエスという個人を指すのではない。イエス・キリストはすばらしいイニシエイトであり、クリスティックなエネルギーを体現した人なのである。

さてこの愛と光に満ちた発光体の前に立たされると、私たちはすばらしい心の安らぎ、すなわち安心を得る。

そしてここでは、言葉は不要である。思考の伝達で意志の疎通ができ、またシンボルも用い

られる。夢やアストラル・トリップで用いられるものと同じシンボルである。

やがて、偉大なる発光体が、

「人生において何をしてきたのか」

という質問をしていることを感じる。

「この高い次元のために、何か役に立つものを持ってきたのか」

と、その瞬間、自分は何も持ってきていないことに気づく。手の中には何も持っていない。

誰一人として他人を助けることはしなかった。

誰のためにも献身しなかった。

そして黄金の霊体をつくらなかったので、まったく裸同然のボロをまとっているだけである（黄金の霊体とは魂の衣である霊を浄化し、創造エネルギーである性エネルギーを昇華することによって、霊体が黄金へと変容することという。そのとき魂は、輝くばかりの黄金色に包まれるのである。黄金の霊体は高次層の乗り物であり、これを形成することができた人は、死後、高次層へと導かれるばかりではなく、生きているときにも自由自在に次元を超えて行動することが出来る）。

何度も何度も生まれ変わりながら、物質的な仕事ばかりしてきた、気をまぎらわせることばかりで時間をすごし、現実を見つめるのを避けていた、せっかく授けられた進化のためのチャ

ンスを、その目的のために生かすことをしないで、無駄にすごしてしまった、ということに気づくのである。

こうして自己審判が始まるが、これはたいてい三日から三日半かかる。

この時には、高次の霊や天使たちも来ている。そしてその中の一人の天使が、私たちが人生で行なったすべての行動、考えたすべてのこと、望んだすべてのこと、をアカシック・レコード (Akashic Record) の中から映し出す。まるで映画のスクリーンを見るように映し出すのである。これが日本でいう、閻魔大王の浄玻璃じようはりの鏡にあたるものである。

よく事故などで死にかけた瞬間に、一生のできごとを走馬灯のように回想するということがあるというが、それと同じである。

アカシック・レコードは日本語では「アカシヤ年代記」ともいわれる。アカシックの語源はサンスクリット語の「アーカーシヤ」からきており、その意味は自然界の第五の要素（四大要素は火・水・土・空気）としてのエーテルを表わす。すなわちアカシック・レコードとはエーテル状の全記録媒体ということができる。

それには地球はもちろんのこと、全宇宙のすべての現象が刻印されている。異次元に存在しているため肉眼で見ることができないが、超常感覚機能や霊視能力、そしてアストラル・トリップによって、その記録を生きた書物として読むことができる。

溺れかかった時や、事故に遭って瀕死の重傷を負ったとき、この世の時間にしてみればほんの数秒ほどの間に、自分の一生が脳裏に映し出されたという体験は、多くの人が持っている。現在からさかのぼって、母親の胎内にいたときのことまで思い出すのである。これは反射エーテルが私たちの記録を活動させて、一生の記憶を呼び起こすことによるものだ。

先に紹介した「前生を思い出すためのプラクティス」も、この反射エーテルの活動を活発化させて行なうものである。

すなわち、それが私たちの「自己審判」である。

そのスクリーンには、自分が行なったすべてのことだけではなく、行動に移すまでには至らなかったが、頭の中でそうしたいと想像したことも映しだされる。

つまり、ある人に性的欲望をもったことや、殺したいほど憎んだことなど、どんな些細な悪事も、そしてもちろん、善い行ないも映しだされる。あるいはまた、自分では気づいていなくても、自分の行為が他人に何らかの結果をひき起こしたことも映し出されるのである。

自分では気づかぬ他人への冷たさ

一つ例をあげてみよう。

あなたがアルバイトで本屋の店員をやっていたとしよう。

レジでの販売だから割と単調な仕事だが、ずっと立っているので足が痛くなる。とくにその日は、朝から気分がわるくて、イライラしていた。誰かに八つ当たりの一つもしたい気分だった。

そこへ一人のおじいさんがやってきた。かなりの年配で、足もともあぶなっかしい。そしてあなたに、

「お経について書いた本はありますか」

と聞いた。それも言葉がそれほどはつきりしていないから、聞き返さなくてはならなかった。あなたはその人の風体を見て、どうして自分がこんなおじいさんに親切にしてやらなければならないのだろう、と腹立たしく思った。そこでつつけんどんに、ただ指さして、

「あちらのほうです」

といった。

おじいさんはその指先の示すほうを見たが、なにしろ広い書店なので、指さされたくらいでは見当がつかない。もう少し具体的に説明してほしい、とあなたのほうを見たが、もう自分の仕事は終わりましたとばかりに知らん顔をしているので、取りつくしまもない。しかたなく、不自由な足をひきずって、指さされた方向へ歩いて行った。

あなたはその後姿を見ながら、年寄りとはなんとみじめで陰気くさいのだろう、とうんざり

していた。

ところでそのおじいさんは、つい先日、伴侶に先立たれたところだった。子どもはなく二人つきりで暮らしていたし、頼れる親戚もないので、おじいさん一人で妻の野辺送りをすませた。そしてこれから一人で暮らす日々を妻にお経をあげてすごそうと思い、自分でも読める経典をさがしにやってきたのだった。

大きな字で、あまり漢字を使わないで、できれば読み方の説明がついているようなお経の本が欲しかったのだ。カセット・テープがついていればなおよい、と思っていた。書店の店員さんに聞けばすぐわかるだろうと思って、やってきたのだった。

妻に先立たれたショックと淋しさと精神的に相当落ちこんでいたおじいさんは、あなたの針のような冷たさに、よけい落ちこんでしまった。生きていく勇気が必要なきに、それをうばいとられたようだった。

そして次の日、おじいさんは突然、心臓発作で倒れ、四、五日のあいだ生死の境をさまよったが、結局は死んでしまった――。

あなたはたぶん、そのおじいさんのことなどすぐ忘れてしまっただろう。イライラした気分も、夕方ごろになると晴れてきたかもしれない。いつもの機嫌に戻って友だちとおしゃべりでもしていたころ、そのおじいさんは心臓発作に苦しんでいたのだ。

これはもちろん、あなただけの責任ではない。いろいろな要素が集まって、そうなったわけだが、しかしあなたが親切にお経の本を探してあげていたら、そうはならなかったかもしれない。同じ死ぬにしても、もう少し気持がちがっていたかもしれないのだ。

以上は一つの例にすぎないが、自分では気づかないで他人に影響を及ぼしたことは、こういったことなのだ。自分の行動において意識をもっていれば、こういうことは起こらない。完璧にいつもそうあることはむずかしいにしても、できるだけ意識をもって生活したいものである。

さて、そういったことがアカシック・レコードから取り出されて、私たちの目の前に映し出される。これは、I章で紹介したメキシコの婦人が見せてもらった「人生の書」と、同じものである。すなわち、生きているときでもアストラル・トリップすることによって、自分の人生のすべてを振り返ることができるということだ。

そして自分の行なった善い行ないと悪い行ないを、それぞれ合計して、差引き、その結果がその後の運命を決めるものとなる。人間の社会のように、誤魔化しや嘘、わいろなどは通用しない。なにしろこの世界にはお金も権力もないのだから。

そして、誰一人としてだますことなどできない。なぜなら、まわりにいるのは高次の存在なのだから、すべてお見通しなのである。

死後にたどる三つの道

さて、その自己審判の結果によって、靈魂のそれからの行き先が決定される。それにはふつう三つの道がある。

最初の道はもっとも一般的なもので、もう一度肉体をもってこの世に生まれ変わるという道である。その目的は、その前の人生で習得できなかったことを、次の人生で学ぶためである。それが転生だ。

二つ目の道は、高次においてしばらく休暇が与えられるというものである。

ちょうど一生懸命仕事をし、功績を積んだときに、休暇が与えられるのと同じである。人類のために献身してきたけれども、まだ完全にはその過程を終えていないとき、高次での休暇が与えられる。

ここでは魂は、本当に真実の幸せを味わいながら暮らす。なぜなら、エゴ（私たちの心に巢食う、怒りやねたみ、利己心、怠惰、肉欲などの欠点のこと）に押しこめられないで、自由にいられるからである。

そうして休暇が終わったなら、さらに高い次元に上昇するために、もう一度人間の肉体をもって生まれてきて、習得の道を歩み、進化を続けるのである。

三つ目の道、それはすでに転生のチャンスを使い果たしてしまった人の道である。

私たちには合計三十二万四千回の転生のチャンスが与えられている。

すなわち、百八回を一サイクルとして、三千サイクルの転生である。日本では除夜の鐘を百八回つくが、なぜ百八回という数なのだろうか。それは百八回の転生を表わしているのだ。だから一人が一回鐘をつき、また別の人が一回だけつく。そうやって百八人の人が鐘をつくことで、百八回の転生を表現している。また仏教で使う数珠も、百八個の珠を持つものがあるが、これも転生を表わしたものだ。

私たちは百八回、生まれ変わり死に変わりした後、それらの人生で行ってきたことを収支決算する。そしてその後、また新しく百八回の転生を始めるのである。それが三千サイクルあるので、合計三十二万四千回というわけだ。これほど多くの人生を生きながら、何も習得することなくすごし、それどころか罪ばかり犯してきた場合には、もう二度と人間の体は与えられない。しかし魂は不滅のものだから、なくなるわけではなく、動物の中に宿ることになるのである。そして次には植物の中に、さらには鉱物の中へと落ちていく。

それは、エゴで充満し、汚れきった^{サイキス}霊を洗浄するためだ。エゴはたいへん汚染する成分なので、放っておくことはできない。そしてまたエゴは、それを培^{つちか}ってきた人物のみに属するものであるから、生きて肉体をもっているときに、自発的にその汚れを落とさないのなら、死後、

強制的に洗淨するために地獄ですごすことになる。

地獄とは、こういった浄化の機能を持つ宇宙の一部である。だから、よく本などにでくる地獄の絵は、あながち嘘とばかりは言えないのである。

以上、私たちの死後行くべき三つの道をあげた。たぶん誰でも、地獄にだけは行きたくないと思うだろう。しかし、私たちが、自分の今まで生きてきた道を、謙虚な気持ちで振り返るとき、自分は大丈夫、地獄なんかには行かない、と胸を張って言える人が、どれくらいいるだろう。私たちはみんな、罪深い存在である。

ただそれを自覚して、つねに高次の存在に援助を願いながら生きていくのと、漫然と日々を送るのでは、死後、大きな差がでるということなのだ。

新しい生命への生まれ変わり

自己審判を終えて、第二の道へ進んだ靈魂（アストラル体）は、高次の世界でどんな生活をするのだろうか。

彼らがすごすその世界は、天国といわれる世界である。そこで生活していると、万物が同じ神から生まれたものだということを、実感するだろう。

そこでは物質的なものを食べたり飲んだりする必要がない。肉体をもっていないからだ。し

たがってトイレもない。ということとは、食べ物や飲み物はあくまで肉体のための栄養にすぎないということだ。だから、いくら食物を洗練したところで、魂の栄養とはならない。肉体は健康になるだろうが、魂が美しくなるというものではないわけだ。だから、あまり食物に対して狂信的にならないよう、調和を保つことが大切である。

ではそこで栄養になるものは何かというと、愛である。そして叡知であり、創造である。無限のものである叡知は、ここではよりいっそう大切なものとして求められる。たしかに高次の霊たちが叡知を求め、学ぼうとする姿勢は、地上の人間とは比較にならぬくらい熱心なものだ。

また、美しい音楽も、彼らの栄養である。美しい音楽は、創造と調和するものだからだ。生きている間に美しいクラシック音楽をきいて、そのバイブレーションで自分を満たしておくことは、高次の段階へ一つ接近していることになる。

本書の読者はたぶんロックやフォークなどを好む人々が多いだろう。しかし一度努力して、クラシック音楽を聞いてみてほしい。ロックやフォーク、歌謡曲になれた耳は、はじめのうちはクラシックのバイブレーションになじめないかもしれない。眠くなったり、退屈だと思ふ人がほとんどだろう。

しかし、努力して聞いているうちに、クラシック音楽が私たちの心に呼び起こす感情のす

ばらしきに気づくはずだ。それは気高く、崇高な感情である。

ロックやフォークは私たちを活動的にさせたり、感傷的な涙を誘ったり、傷ついた心をなぐさめてくれたりする。しかしそれらは一時的なものであり、表面的なものだ。それは曲目の移り変わりの早さからも、推測できるだろう。

そしてまた最近では、それらの音楽はさらに性的に、さらに退廃的になっていきつつある。情欲を呼び起こしたり、気だるい倦怠の中に私たちを誘いこもうとしているかのようだ。

クラシック音楽でまず聞いてほしいのは、ベートーベンの「第九交響曲」である。コーラスで「歓びの歌」が入っている曲だ。これなら耳慣れていると思うし、この交響曲全体もすばらしいもので、ぜひお勧めしたい。この曲には人間を力づけ、生きる勇気を与えてくれるすばらしいメッセージがこめられている。

さてまた、マントラのバイブレーションも栄養となる。

たとえば私たちがマントラ「AOM」を発音しているとき、それは高次にまで届いている。また、

万物が幸福でありますように

万物が幸運でありますように

万物が平和でありますように

と、祈るときも同じである。これによって高次の霊たちはたいへん幸福になる。これが彼らの栄養となるからである。

ここで何か仕事をするときは、全員一緒に協力して行なう。

仕事は、それをやり遂げることを通して、何かを習得するために行なうものである。一つの天体の形成を習うこともあるし、植物学や医学、建築を習う場合もある。そうして習得したものは、ふたたび肉体を与えられたときに、自分のものとして持つていくことができる。生まれながらの才能として、次の転生で生かすことができるのである。四歳にして作曲をしたという音楽の天才モーツァルトなどは、その典型的な例といえる。

高次での休暇が終わり、生まれ変わるときには、川に流される。「生命の川」と呼ばれる川である。この川が新しい誕生を準備するために、その人を運んでいくのである。

あなたの現実の前生で培ったもの

さて、第三の道は地獄、すなわち鉱物界へと落ちる道だ。そこは凝縮した世界である。地獄まで行ったメキシコの婦人が、重苦しくて息がつまりそうだったと述べていたが、まさしくそういう世界である。

ここには何千万、何億もの霊が住み、心理的な浄化を受けている。

この鉱物界に入る前に、その前段階として、動物に似た肉体をもって地上に生まれることもある。時折、新聞や週刊誌に紹介される尻尾を持って生まれた赤ちゃんや、異常に毛深い狼のような子どもなどがそれである。

つい先日『週刊女性』（昭和五九年二月二八日発行）にも、マレーシアにハセンチの尻尾を持った赤ちゃんが生まれた記事が載っていた。また中国にも狼人間が実在している。狼人間に生まれ変わるといふのは、何度かにわたる転生で、多くの人々を搾取した結果である。そして次の生まれ変わりでは、本当の狼となるのだ。さらには植物界、鉱物界へと落ちていく。

猿に近い体を持って生まれる人もいる。そういう人は、前生で、動物的な性を実践した可能性が強い。性的にたいへん退廃していたため、このような肉体をもって生まれ変わったのである。また犬のように八つの乳房を持って生まれる女性もいるが、これも同じ理由によるものだ。そのすべての乳房から、おっぱいがでる。

このように生まれ変わりのときには、前生で培ってきた最も強い性質というものが、大きく影響する。その性質にいちばん近い動物のかたちとなって生まれ変わるのだ。人間として転生するときも、それは同じである。つまり、次の生まれ変わりの肉体や境遇・環境は、今、生きている私たち自身が作っているということになる。

それはまた、現在の私たちの肉体や境遇・環境も、私たち自身が作ってきたものだということ

とにはかならない。あなたは、自分の容姿や性格、家族や家庭環境に少なからず不平不満を抱いていることだろう。しかしそれは、あなたにふさわしいものなのだ。そしてそれをうまく生かすことで、大きく飛躍できるのである。

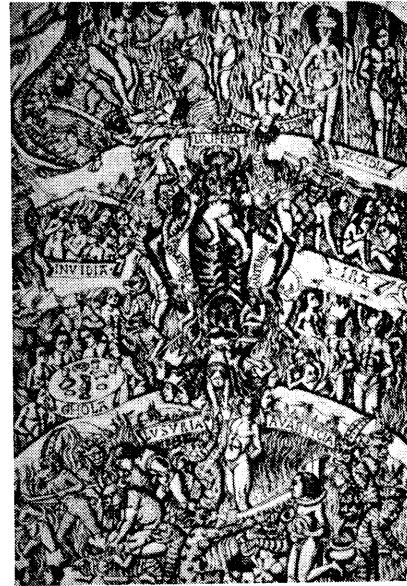
「あの人はあんなにお金持で、きれいで、勉強もできるのに、私はどうだろう。勉強は頑張っているつもりなのに、いつでも中の上くらいだし、顔はちっとも可愛くないし、スタイルもよくないし、親は粗野だし……」

多かれ少なかれ、誰でもそんな不満を持っているだろう。だが、そんな不満を持つ前に、自分について瞑想してみることだ。自分がいったいどれほどの人間なのか、を正直に見つめてみるのだ。そこが出発点である。それと、美人で金持で勉強ができることが、必ずしもプラスになるとは限らないことも理解していたほうがよいだろう。

地獄で救われるためのマントラ

さて地獄に入っていこう。

入るとすぐ、下に降りて行く道がついている。その道を歩いてたどりつく所は、個人個人によって違う。たとえば夫婦や親子であっても、同じではない。自分の心理状態にもっともふさわしい段階に行き着くからである。現世では、高い境界にある人も退廃しきっている人も、同じ



ダンテの地獄

肉欲に溺れている人々もいる。そこでのセックスは吐き気を催すほどの感覚があり、後にはたいへんな苦しみが襲う。

高次の世界に上昇するための知識を学んでいるが、それを実行しなかった人は、地獄においてその苦しみがさらに増すことになる。下へ下へ下降を続ける永遠の苦しみがある。

しかし、このような地獄にあっても、救われる方法はある。

世界で生きているが、死後の世界ではまったく変わってくるわけだ。

人間には、人々にけんかをふっかけるのが好きな人もいるし、戦争をするのが好きな人もいる。死後の世界にあっては、そういった自分の本性を隠す必要はない。自分がつくって、栄養を与えて育ててきたエゴと直面するのである。けんかをして殺されても、また立ち上がる。そこには死は存在しないからだ。

生きている間に、光であるノース（GOSIS）を受けとった人は、その真暗闇の地獄にありながら、光を求めることができる。

光を求め、助けを求めることによって、地獄からはいだすことが可能なのである。

それには、高次の存在を呼ぶマントラを唱えればよい。そうすれば彼らがあなたの前に現われ、援助してくれる。

そのマントラとは、

アンティヤーダー ウナ サスタッサ

というものである。たいへんなパワーを秘めたマントラである。

このマントラはまた、この世界において私たちが困難に陥ったときに、助けを求めるのにも使うことができる。マントラとはそういうふうな役に立つものなのだ。

また助けを求めるもう一つの方法として、

キリストの名において 私を助けたまえ

と祈ってもよい。それによって、クリスティックなエネルギーとともに、天使がそこに降りてくる。

しかし、生きているときにこの光を受けとったことのない人は、真暗闇の中にさしこんでいるこの光に気づくこともない。

これらの霊たちが洗淨を終えて、純粹になって地獄から出てきたなら、宇宙の中の一つの原子として、その場を占めることになる。

だがこれらの霊魂には、再び上昇のチャンスが与えられることはない。人間の肉体はもう与えられないのである。それらの魂たちは空氣の精や水の精、火の精や花の精として、幸福に存在しつづけることになる。

男性は女性的アストラル体を持つ

今までにあげた三つの道が、死後、一般に起こることである。

だがもう一つ、精神的進化を達成した魂には、次のようなすばらしい道が待っている。ここに至る人間はたいへん数が少ないとはいえ、これこそが私たちの氣高い魂が望む、至高の道である。

「精神的進化を達成する」とは、エゴを根絶して魂を自由に解き放ち、意識を完全に目覚めさせることである。

生きている間に、魂の衣である霊（心理）を淨化し、そしてまた、創造エネルギーである性エネルギーを昇華して、靈体を黄金へと変容させる。そのとき魂は、輝くばかりの黄金に包まれるのだ。これが錬金術の秘密である。

性エネルギー昇華を完成した人は、アンドロギヌス（男女）となることができる。

人間は誰でも、肉体が男性（女性）であれば、アストラル体は女性的（男性的）である。アンドロギヌスとなるのは一人の中で行なわれる結合であり、数字11で象徴される「反対の結合」、私たち自身の中で統一が行なわれ、完全な存在を造るのである。

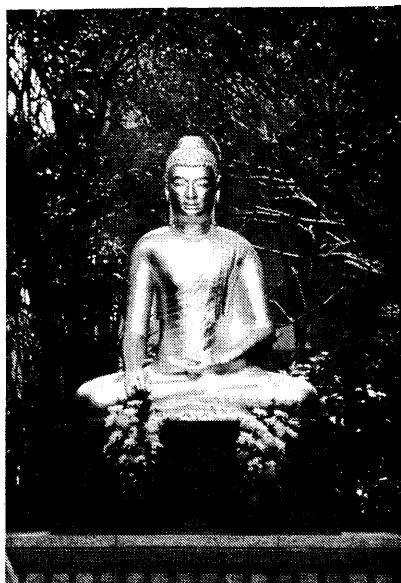
そうすると、男でも女でもあるという、天使の段階にまで達することになる。それが最高のイニシエーションである。

それが実現できたときには、五次元（ここに生命の起源がある）以上、六次元（ここは永遠の次元である）にまで上昇する。またさらに、永遠を超える七次元にまでも上昇することができる。

性エネルギーの昇華によって高次元の世界へ

私たちが今、生きているのは、三次元であることはご存知だろう。この世界に存在するには、この世界における乗り物を持っていなければ無理である。肉体がそれにあたる。

これまでは読者にわかりやすいようにと考えて、肉体とアストラル体という二つの分けかたで述べてきた。この中に、霊も魂も含んで「アストラル体」としてきたのである。しかしここでもう少し詳しく、私たちが持つ肉体以外の体について説明しておこう。



川崎大師にある金色のブツダ

人のみが神聖霊の層まで至ることができるのだ。
さらに上昇すると、ブディック（仏陀的）、正覚を得た霊を持った層となる。ここまで上昇を果たした人は「ブツダ」となる。そしてすべての層を上昇したり下降したり、自由に、目覚めた意識を持って、行動することができる。すでにエゴを根絶し終わり、黄金の霊体を形成したからである。

そして今まで述べたすべての段階に、私たちは上昇する可能性をもっている。肉体をもつて修行することによって、行きつくことができるのである。こうした目に見えない次元は、目に見える三次元とは比較にならないほど広大で、深遠である。ここでもっとも重要なのは、私たち自身が、ほかでもない私たち自身が、これらの層にまで至る可能性を持つ存在だということを、しっかりと認

まずメンタル体である。これは誰もが持っているとは限らない。性エネルギーを昇華することによって、作らなければならないものだからだ。メンタル体を持つということは、アストラル界を超えるメンタル界（マインドの世界）の乗り物を持つということである。
さらに上にはコーザル界がある。

これはコーズ（cause）、原因という意味の言葉から由来する名前で、自然界のすべての原因があるところである。

アストラル界では、幽霊であるとか、死んでしまった先祖であるとか、その他いろいろなアストラル界の住民を見ることができるようになる。このコーザル界ではすべての物事の原因を見、識ることができる。

上昇すればするほど、光輝く叡知と平和と、深い愛がある層である。

さらに上の段階は、神聖霊の層である。

一般に私たちは人間的な霊を持っているが、それは月の属性を持つ霊という意味である。人間と天体とはいへん深い関係にあつて、肉体は地球に属するもの、霊（心理）は月に属するもの、そして私たちの心に宿る魂は太陽に属するものだ。

誰でも生まれたときには月に属する霊を持っているのだが、神聖霊は性エネルギー昇華を行なったのみ、つくっていくことができる。だからこの霊を太陽霊ともいい、神聖霊を完成した

識することなのだ。それをいつも胸において、生きてほしいと思う。

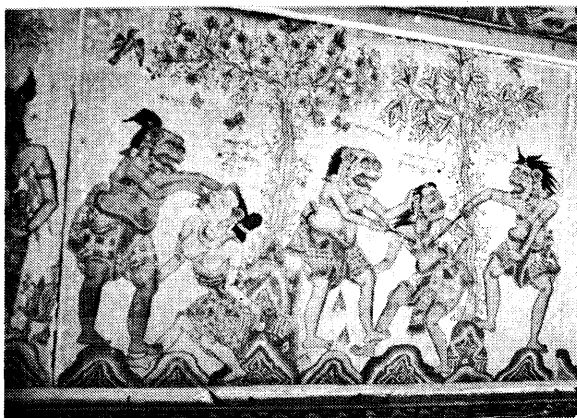
このような高次元に参加するためには、生きているうちに準備しておかなければならない。なぜなら、黄金の霊体を形成するための性エネルギー昇華を行なうには、肉体がなければならぬからだ。肉体なしでは、マントラの発音ひとつできないのである。

そしてまた、いつも注意を払わなければならないのが、エゴに対してである。精神的進化が進めば進むほど、ますます謙虚にならなければならない。内的進化を示すことのできる唯一のパロメーターが、謙虚さである。いつも自分の心理状態を観察して、謙虚の徳を育てていくことが大切だ。

IV

地獄の世界は
どうなっているか





ヒンズー教の地獄図

地獄は世界各地に存在する

あなたは、地獄の存在を信じているだろうか。子どもだましだと思っていたり、単なる脅しにすぎないと思っている人がほとんどだと思う。にもかかわらず、人はなぜ「地獄」というものを想像するのだろうか。

あなたにも、地獄とはどういう雰囲気のものか、だいたい見当がつくと思うが、それは、決して楽しいというイメージではないだろう。そして地獄は、たとえば実際にあるにしても、できれば行きたくないところだと思っているだろう。

地獄という観念はキリスト教や仏教などの宗教はもちろんのこと、エジプトや古代アステカ、チベットなど、世界各地で見ることができ。

すなわち、人間がいるところには、地獄という観念が生まれているわけだ。それは、私たちが悪いことをした時に罪の意識を感じることと無関係ではない。良心と地獄は、切っても切れないものだ。なぜなら、良心とは、私たちの持つ清らかな魂の表現だからだ。

地獄は存在するのである。

私たちの目に見える次元に平行している「目に見えない次元」に、地獄は確かに存在している。

これからその地獄へ、あなたをご案内しよう。この旅の目的はただ一つ、

「そこに行かなくてすむには、どうすればよいのか」

を、学ぶためである。

『神曲』はダンテのアストラル界旅行記

地獄について詳しく書かれた本に、ダンテの『神曲』がある。この本に書かれていることは、すべて本当のことだ。ダンテはアストラル・トリップすることができた素晴らしい芸術家だからだ。

『神曲』の中の地獄篇は、ダンテが地獄に行き、彼が師と仰ぐヴィルジリオという高次の霊の案内によって、地獄の各段階を見て歩くものだ。

彼は地獄の門に行きつく。ここから地獄へ入るには川を渡らねばならない。門を入ったところには地

獄の玄関があり、その周辺では群衆が旗のあとを追いかけて走っている。苦しそうである。おびたらしい数のその群衆は、天国にも地獄にも受け入れられないで苦しんでいる。彼らは人生を傍観者としてすごした人々だ。いわば、生きていなかった人々である。ダンテの知り合いもその中にいる。

川のところまでくると、渡し守がいて、ダンテたちを渡すことはできないと拒む。まだここに来るべきではないからだ。しかし、ヴィルジリオの一喝にあって、渡し守は沈黙する。ヴィルジリオは高次の存在だからである。そしてダンテたちを船に乗せ、むこう岸へ渡してくれる。ここで注目してほしいのは、地獄には高次の存在は入れるけれども、天国には悪魔は入れないということだ。そして悪魔たちは高次の霊の命令にはそむけない。だからもしあなたが、地獄におちるようなことがあった場合は、高次の存在に助けを求めることができる。魂さえ悪魔に売り渡していなければ……だが。

ダンテはそれから、地獄の各段階を巡り歩く。そしてすでに死んでしまった友人や知人に出会い、彼らの生き方と落ちた地獄の段階について観察する。その人の生前の行ないによって、地獄の何段目にいるかが決まっている。

そして七段目にまで降りたとき、樹に封じこめられた自殺者の霊に出会う。

そこは深い森である。そして哀しげな声があちこちで聞こえる。しかし、その声を発する者

の姿は見えない。そこで師の勧めにしたがって、一つの樹の小枝を折ってみる。するとどうだろう、折り口から血が噴きでて、その樹は哀しそうに叫んだのだ。

「なぜ私を害するのですか。あなたは哀れみの心を持っていないのですか。私たちは今は樹に変えられています。もとは人間だったのです。もっと慈悲を持ってください。たとえ私たちの魂が蛇のようであったとしても」

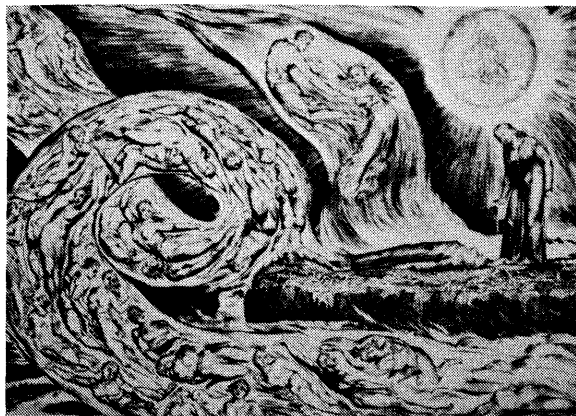
ダンテは思いがけないことだったので立ちすくんでいると、代わって師がその樹に語りかけた。

「どうか許してほしい。樹から血が噴き出すことは詩には語られているけれど、本当のことは彼には信じられなかったのだ。私がそそのかしたために、今となっては心の痛むことをさせてしまった。けれども、あなたの素性をダンテに教えてやってはくれまいか。彼はまた現世に戻るのだから、そこで多少の償いとして、あなたの傷つけられた名声を新たにとりもどすことができるかもしれないから」

樹はそのすすめにしたがって、自分の素性を語り始める。

地獄界の樹に封じこめられた自殺者の霊

その樹に封じこめられたのは、神聖ローマ皇帝・フリードリヒ二世にたいへん気に入られた



ウィリアム・ブレイク「好色者の循環」

獄の七段目に落ちてしまった。
その樹はこのように語った。その森は、自殺者の行く地獄の森だったのだ。そこにある樹々の一本一本に、自殺をして世を終えた人たちの靈魂が封じこめられている。むろんこの樹は植物界の樹（私たちの肉眼で見える樹）ではない。地獄界の樹である。自殺をする人は、それなりの理由を持っている。ピエルも同じだ。彼の話をきくと、自殺したのも無理はないという気がする。しかしよくよく考えてみれば、彼には何一つとして、自殺を正当化するほどの理由はないことがわかる。
なぜなら、ねたみを持ったのは、ピエルのバランスを欠いた行動が昂じてのことだったろうし、そうでなくとも苦しみは、何らかの理由があつて私たちに与えられる人生の試練だからだ。ピエルはこの境遇に勇敢に立ち向かい、克服すべきだった。そして

人の靈で、名をピエル・デルラ・ヴィーニャといった。
皇帝は彼にすっかり心をあずけており、いかなる秘密もすべてピエルの手中にあった。皇帝の心を自由にあやつることができたのだった。
しかしこのため、彼は多くの宮廷人たちにねたまれていた。いつか必ず失脚させてやろうと、誰もがその時をねらっていた。
そして、彼らはついに行動を起こした。皇帝に、ピエルが皇帝を裏切っています、と告げ口したのである。もちろん、嘘の情報である。
皇帝はそれを聞いて、自分がもつともかわいがっているピエルが、自分を裏切るとは信じられなかった。しかし、それがピエルをねたんでいる者たちが仕掛けた罠だということにも、気づかなかった。
そこで皇帝は怒り狂い、ピエルの目をくりぬいて牢獄に閉じこめてしまえ！ と、命令をくだした。気の毒なピエルは、盲目となって、獄舎で生活する身の上となった。
けれどもピエルは、何も悪いことをしていない自分が、何のためにこのような仕打ちに合わねばならないのが、理解できなかった。そしてその理不尽さに耐えられず、獄舎の壁に頭を打ちつけて自殺したのである。裏切り行為は何もしていない潔白な身なのに、正しくない行為——自殺によってその苦しみから逃れたのである。そのためピエルの靈魂は、肉体の死後、地



それを通して何かを学ぶことで、一段階上にのぼることができたのだ。
しかし彼は、無知ゆえに、せっかく与えられたそのチャンス逃した。もし彼がこの法則を知っていたならば、苦しみに耐えることができただろう。

ほとんどの人々は、人生の困難に遭遇したとき、ピエルと同じような反応をする。また平穩無事な日常生活を送っているときは、無意識状態でロボットのように行動している。何も考えず、意識が眠ったまま、感情の流れに流されている状態だ。そして自分で自分をだまし続けている。

しかし、人が何らかの原因で死と直面したとき、意識がハッと目覚める。そして死を受け入れたときには、はじめて冷静な目で物事を見ることができるようになる。心が澄み、感性がときすまされて、それまでは見ることがなかった「現実」を見る。もう逃げ道がないからである。自分をごまかすことができないからだ。

けれども私たちは、死がそこまで迫らないうちに、現実を見る必要がある。そして肉体があるうちに修行しなければならない。

そのために与えられるのが、人生の困難だ。大きな困難、ショックにあうとき、今まで眠っていた意識が目覚める。そのときを利用して、ジャンプするのだ。肉体がなくなってからでは、もうすべてが遅いのである。

第一の地獄——心理的地獄

さて、現実的には二つの地獄がある。

第一の地獄は、私たちの心理的な地獄である。今、生きているときに感じる、地獄の苦しみである。

私たちは心理の中にイメージをつくることができる。それはマインドの働きによるものだ。マインドは受動的なもので、私たちが毎日見ていること、考えていること、聞いていることなどを、すべて記憶する。保存期間は半永久的だ。

たとえばベートーベンの第九交響曲は、私たちのマインドにすばらしい振動を記録し、崇高な考えは、繊細な原料によるイメージを記録する。

ちょっと話はそれるが、広告が利用しているのはこの原理である。ある商品のイメージを毎日見て、聞いていると、買物に行ったときには無意識にそれに手が伸びる。そしてまた、テレビで放映されているコマーシャルや新聞広告などを見ればわかるように、ほとんどの場合、人間が商品とともに出演している。

時計の宣伝をするときでも、ただ時計だけを置いたりはいらない。それだけでは人の目を惹きつける磁気がないからである。宣伝する人間がいて、その人物が私たちの視線を集める役割を

果たしている。その人物がもし肌を露出していれば、さらに惹きつける力は強くなる。性エネルギーは、すべてのエネルギーの中でもっとも速く作用するからである。ジュースを売るためにも、電気器具を売るためにも、あるいは本を売るためでさえも性的イメージが多く使われるのは、その効果を利用しているわけだ。

多くの人々は、

「テレビのゴールデンタイムに、これだけの回数の宣伝をするということは、億単位のお金を使っているに違いない。それが全部商品にはねかえっているのだから、この商品の本当の値段は私たちが支払うお金の何分の一くらいだろう。パッケージの印刷代や紙代、人件費なんかも考えると、中身にかかったお金なんてほんとうにわずかに違いない」

などということは考えもしない。マインドに記録された情報にあやつられるように、行動しているからだ。

そうやって莫大な量の情報がマインドに記録されていく。心理はそれらの情報から大きな影響を受ける。そしてその心理の性格によって、私たちの周囲に引き寄せられるものが決まるのだ。引き寄せられるもの——すなわち環境である。

たとえばボルノグラフィックな情報を好んで集めて、肉欲的な考えやイメージによって出来あがった心理は、周囲に性的なトラブルを引き寄せる。また憎悪やねたみによって出来あがっ

た心理は、やはり同じ波長の憎悪やねたみを外部に引きつけるということである。これが心理的地獄である。

アルコールの臭いを好む怪物たち

そういうと、観念的なものにすぎないと感じる読者もいるかもしれない。だが、そうではないのである。その例としてアルコール中毒患者のことを話そう。

アルコール中毒患者が禁断症状を起こすと、幻覚を見ることがある。いろいろな動物や獣、昆虫などが自分を襲ってくるという幻覚だ。心理学者や精神科医はそれを「幻覚」として疑いもしないが、実はそうではない。

これらの幻覚（といわれているもの）に登場する怪物たちは、現実には存在している目に見えない次元の住人たちである。アルコールがきれ、禁断状態に陥っている患者は、感性が非常に敏感になっている。だからそれまでもずっと自分のそばにいた怪物たちが、そのとき初めて見えるのである。超視覚を開発した人にも見えるものだ。

その怪物たちはなぜ彼らのそばにいるのだろうか。それはアルコールの臭いに惹かれて、やってくるのである。

アルコール飲料を飲むと、体からたいへんな悪臭を発する。あなたも経験があると思うが、

夜遅くになって電車に乗ると、車内がこの臭いに満ちていることがある。乗っているほとんどの人がアルコール飲料を飲んでいるためだ。泥酔して我を忘れている人のそばにいくと、もつとひどい臭いがする。

この悪臭を怪物たちは好むのだ。するとその人のオーラは、集まってきた獣や怪物でいっぱいになってしまふ。ちょうど砂糖を庭に出しておくと、蟻が集まってくるのと同じである。彼らはアルコール中毒者が発する有毒成分を食べるために、集まるのである。

そしてそれは人間にだけいえることではない。街そのものもこういった臭いを持っていて、それに応じた目に見えない世界の住人が集まっている。七歳ぐらいの小さな子どもで、感性が敏感であれば、街の放つ臭いを感じることができる。

これが、心理的地獄に起こる一つの現象である。一人一人の人間は、自分の心理的地獄に住んでいる。だから自分の心理の中から地獄を洗浄することによって、平和がやってくるのである。

エゴと魂の戦い

一人一人の人間は自分の心理的地獄に住んでいる、と私はいった。この意味は、たぶんどんなもお分かりになるだろう。すぐに思いあたるフシがあるはずだ。



ブリュエール「憤怒」

しかしこの戦いは、自分自身でやらなければならないものだ。他の人に代わってもらうことはできない。ピアノがひけるようになりたければ、自分で練習しなければならぬのと同じである。エゴを退治して、心理的地獄を洗浄するための方法を教わることはできるが、戦いは自分自身でやらねばならないワークなのである。

い。彼らはよく、「自分との戦いです」という言葉を口にする。自分の中の何と何が戦うのだろうか。エゴと魂が戦うのである。恐怖のエゴ、虚栄のエゴ、貪欲のエゴ、大食のエゴ、肉欲のエゴ、嫉妬のエゴ、うぬぼれのエゴ……、エゴには数多くの種類がある。人によって各々のエゴの勢力の強弱は違うが、これらのエゴをつかまえてやっつけることで、心理的地獄から自由になれるのだ。

では心理的地獄の正体とは何か。それはエゴである。私たちの体に、まるで悪質なで、もののようにへばりついているものだ。そして一生を通じて私たちを支配し、病気や災難の第一因となるものである。寄生虫のようにとりついて、エネルギーを吸いとり、肥え太っていくものなのだ。エゴとは、簡単にいえば、欲望のエネルギーである。私たちを善から遠のけ、悪へと引っ張る強いエネルギーだ。あなたには、自分でもいやになるくらいの悪癖はないだろうか。あるいは本当にいやな性格はないだろうか。それはあなた自身ではない。それがエゴである。魂は多くの場合、エゴにがんじがらめにされて身動きがとれないでいる。だが清らかな音楽を聴いたりして意識が目覚めるとき、私たちは自分の魂の存在を実感する。そしてエゴをやっつけ、こっぱみじんにしてしまうことで、魂は自由になる。すなわち心理的地獄を洗浄したからである。

エゴはいつも私たちを誘惑して罪を犯させようとする。心理的地獄へと私たちを陥れようと、手ぐすねひいて待っている。このエゴに打ち勝ち、自分の中から除外していくことによって、私たちは成長していくのである。

だから私たちは、マイナスの力としてエゴを利用することができる。つまりエゴと戦い、打ち勝つことで、自分が伸びていくことだ。これはスポーツ選手を見ているとわかりやす

大気汚染と同じエゴの有害エネルギー

エゴはまた、自分にとって害であるのみならず、他人にとっても害となるものだ。そういうとたいへん難しく聞こえるかもしれないが、難しいことではない。単純なことだ。たとえばみんなが楽しく遊んでいるところへ、仏頂面をして「私が楽しくないのだから、みんなも楽しく権利はないわ」とでもいったげな友人が入ってくるとする。すると座は一瞬にしてシラケてしまい、もう遊ぶ気さえなくなってしまう。全員がエゴの悪いエネルギーに汚染されてしまったからだ。

あるいはまたこういうこともある。男性がたいへん肉欲的な眼差しである女性を見るとき、その女性のオーラまでも汚染してしまうことになる。これを逆にいえば、女性は男性の肉欲をあまり刺激するような格好はしないほうがよいことになる。自分のオーラを汚されることになるからだ。

このエゴの汚染は、ちょうど大気汚染と同じようなものだ。

一時は日本の大気汚染はまったく野放しでひどかった。有害な物質に何の規制もしないで、やりたい放題にさせていたからだ。しかしこれに対処するために、多くの規制を設け、公害除去のためのいろいろな対策を打ち出して実行してきた。汚染の根源をストップ、とまではいか

なくても、少なくし、同時に汚染を取り去る方法を実践した。その努力によって、今では一時期よりかなりきれいになったのだ。

このように、私たち一人一人が、自分のエゴによって他を汚染することを防がねばならない。そしてまた、その心理的汚染を洗浄する過程の体験が、重要なのである。

しかし肉体をもっている間は、この世の法律以外に私たちを縛るものはない。自分の心理的汚染を洗浄するよう強制するものは、何もないのである。

だが宇宙の法はこういつている。

「何でも好きなことを、自由にしてよろしい。しかし行なったことすべてに結果があり、責任を持つのはあなた自身なのだ」

自分のエゴを、肉体をもっているときにやつけないのであれば、その汚染するエネルギーは死後、強制的に洗浄される。これは宇宙にとっても有毒なエネルギーだからだ。それがもう一つの地獄、強制的洗浄の次元である。ダンテが高次の霊とともに訪れたのが、この地獄であった。

第二の地獄——強制的洗浄の次元

私たちは何度も何度も生まれ変わりながら今日にいたっているのだが、肉体の存在するとき

に自己の心理を洗浄しないならば、死後、強制的に洗浄させられる。なぜなら、他にまで汚染を及ぼすエゴのエネルギーは、天体にとつても、また目に見えない次元にとつても、有害無益なエネルギーだからだ。

死ねば肉体はもう用がすんだので、火葬あるいは土葬によって処理される。しかし靈魂は、洗浄されるために、地獄の階段を自分にふさわしい所まで降りて行く。自発的に洗浄を行なわなかったで、強制的に洗浄されるためだ。そして有毒なエゴのエネルギーがなくなるまで、そこにとどまる。これが第二の地獄なのである。

それは洋服の汚れを考えるとわかりやすい。あなたが新しいセーターを買ったとする。何度か着ているうちにだんだん汚れてきた。それを洗濯しないで、着続けていると、汚れはひどくなる一方だ。

洗濯すれば落ちる程度の汚れのうちはまだいい。あまりにも汚れすぎると、もう洗っても落ちない。燃やしてしまうしかなくなる。火はすべてをトランスフォーム（変換）するからである。

地獄の機能は、ちょうどこの燃やすというのと同じである。そのため地獄には硫黄が充満しているといわれている。

だから、死後、地獄へ行くのは、よくいわれるように罰を受けに行くのではない。洗っても

らいに行くのだ。そして自発的に自分で洗うのと、他から強制的に洗われるのではどちらが楽か、考えてみるまでもない。

自分で洗う場合は、自分が今どこまで辛抱できるかを問いながら、調整して進むことができる。コンディションのよい時には一気に進み、調子が悪いときには休憩もできる。しかし無理矢理に洗われる場合は、絶え間ない苦しみである。休みのない、たいへん痛みの多い洗浄となる。あなたはどちらを選ぶだろうか。

自分は大丈夫、何も悪いことはしていないから地獄へ落ちる心配はない、などと安心してはいけない。地獄へ行くのは、なにも悪いことをした人ばかりではないのだ。一見、善人に見え、何も悪い行ないをしていない人でも、心理的にたいへん汚い人がある。心がまっ黒に汚れているのだ。そんな人もやはり地獄へ行く。表面だけいい子ぶっていて通用するのは、この世だけのこと。そこでの判断基準は地獄の法によるのだ。

そしてまた、そうした誤ちは、無知ゆえに犯すものだ。自分が、今、行なっていることが、どういう結果を招くか知らない、という無知である。多くの犯罪や誤ちを犯す根本原因がこれである。

もし私たちが、あらかじめ、死後のプロセスや転生について知っていれば、誤ちを犯す回数はかなり少なくなるだろう。地獄に行きたがる人は、そうそうはいないはずだ。宇宙の法・地

獄の法を本当に理解していれば、犯罪を避けるよう努力し、がまんすることができ。無知の暗闇から出て、光を見いだした人は、まったく新しい価値観をもつことになるのである。

宇宙の法を体現した空海

地上の国々に秩序を保つための法律があるように、無限の宇宙にも「宇宙の法」がある。私たちの住む太陽系もその法にしたがっており、そこにあるそれぞれの天体が高次元と低次元をもっている。

私たちにとってもっとも身近な天体である月も、例外ではない。月にもかつては生命が存在していたが、現在は死にたえ、地獄だけが残っている。かつて月で生きていた人々の心理を浄化するために、地獄だけが機能しているのだ。その汚染のエネルギーが宇宙全体に浸透しないようにするためである。

地球でも、毎日毎日、何千人・何万人の霊が地獄に行く。そして鉱物の中に封じこめられて洗淨の過程に入る。

だから、一見死んでいるように見える鉱物も、実は生きているのである。岩や石の中に、退化したそれらの霊が入っているからだ。もし岩や石からこのような霊を取り出すことができれば、やわらかくなるに違いない。岩や石があんなに堅いのは、凝り固まった堅い霊、サイキス

のせいだからである。

地獄の階段を降りて行けば行くほど、心理的汚染の成分が凝縮されて、重い成分となっている。アストラル・トリップで地獄に行けば、鉱物界の中に地獄が存在し、各段階があることはつきりと確かめることができる。

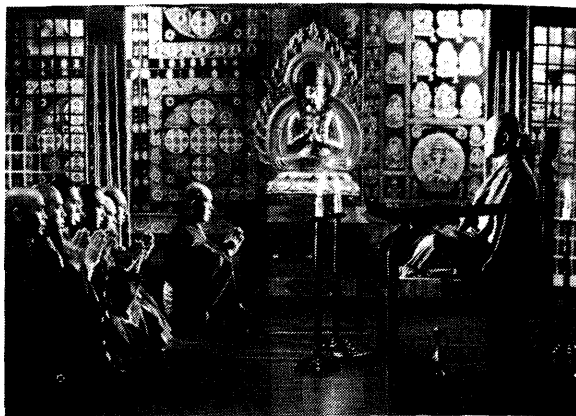
私たちが目に見える次元での思考方法から脱却しなければ、これらのことは想像することさえも困難である。しかしアストラル・トリップすることで、これがどういうことなのかすぐに理解できる。それはちょうど、一つのボールの中に封じこめられたもう一つのボールを、どうやって取り出してよいか想像できないのと同じことだ。四次元に行けば、そんなことは造作もない。

宇宙の法はまた、私たちを生かしている法則でもある。その法が要求することが分かれば、おのずと私たちがなぜ生きているかもわかる。

「人はなぜ生きるのだ」

という問いは、人間にとっての永遠の問いであるが、宇宙の法を知ることによって解答が与えられるのだ。

今年はずいぶん、弘法大師空海の入定一一五〇年御遠忌にあたり、それを記念して「空海」という映画が上映された。私も空海という方をたいへん尊敬している。日本の生んだ最高のイ



東映映画「空海」入定シーン

この世で宇宙の法にしたがって生きること
は、私たちが精神的進化を遂げ、内的クリエイショ
ンを成し遂げることである。
私たちが果たさなくてはならない役割は、仕事や
勉強・結婚・育児・病い・苦しみなどを通して学び、
精神的に進化していくことなのだ。出家したり、山

ニシエイトだと思っている。とくにこの映画には何か惹かれるものがあって、封切られてすぐ
観に行った。そして期待は裏切られなかった。

この映画の中に、やはり同じ問いかけがある。深山幽谷で過酷な修行を続けていた空海が、
ふともらす言葉だ。

「人はなぜ生きるのだ」

それを追究し、追究していった、空海はすべてを知る。

入定するときの言葉によって、彼の至った境地を知ることができる。

「別れの時は来た。この生命、もともと宇宙の根元、大日如来よりいただいたもの。これより
大日如来の元へ還る」

そういつて空海は、今生での肉体を捨て去る。そして高次元へと、絶対太陽（大日如来）の
もとへと還っていった。そしてまた、こうも言っている。

「私に会いたくば、遍照金剛と呼ぶがよい。必ずその人と共にあり、その人と共に生きよう」
これが宇宙の法を体現することなのだ。

この映画は多くのことを私たちに教えてくれる。人生の秘密をこれだけ完璧に表現した映画
を、私は観たことがない。まずシナリオがすばらしい。このシナリオを書かれたのは早坂暁氏
であるが、彼は高野山に籠りつきりで執筆したということだ。おそらく弘法大師空海に祈り、

その魂を高次元へと近づけてお書きになったことと
思う。それに応えて、高次の存在である空海が彼に
多くの援助を与えたのだろう。

機会があつたらぜひ観てほしい。メキシコ人であ
る私がこれだけ感動したのだから、日本人であれば
さらに多くの浸透してくるものがあるだろう。観た
後に、この映画について瞑想すれば、得るものもはも
っと多くなる。

日常生活の中に真理をさぐる

この世で宇宙の法にしたがって生きること
は、私たちが精神的進化を遂げ、内的クリエイショ
ンを成し遂げることである。

私たちが果たさなくてはならない役割は、仕事や
勉強・結婚・育児・病い・苦しみなどを通して学び、
精神的に進化していくことなのだ。出家したり、山

奥に籠ったりしても何もならない。今、自分がおかれている環境の中で自分の責任を果たし、多くを習得していくことだ。現世こそが修行の場なのである。そのために何度も生まれ変わるのだ。それが私たちの生命の目的である。

私たちは覚えていなくても、ある時は女性として、またある時は男性として、地球のあらゆる国に、異なった時代に、生まれてきた。そして生活して、死んでいった。

無知のまま生活しているうちは、この宇宙の法について知ることはない。それが表現されている神話や真の芸術について、好き勝手な意見を述べることも自由だ。

しかし現実には直面したとき、自分の言ったことが虚言妄語であったことを痛いほど悟らねばならない。厳然と存在する法則について、私たちがごさかしい意見を述べることなど、何の役にも立たない。それはエゴに支配されたインテレクトがやっていることだからだ。

現代人はインテレクトが発達しているので、本当のことが逆に見えるようになっていく。何でも知っていると思っているためだ。

けれども真理は、実際はいつでも手が届くところにある。求めさえすれば与えられるものだからだ。古代の遺跡も真理を表現したものの一つである。求める気持で対するならば、遺跡はさまざまなことを語ってくれる。ただ興味本位で見ているならば、何を見ても何も学ぶことはない。古代遺跡は、真理を求める人々にとっては、一種の教科書のようなものである。多くの

鍵が隠されている。もちろん地獄の存在についても、すでに語られている。

死後の行先を決定するアヌービス

たとえばエジプトを見てみよう。

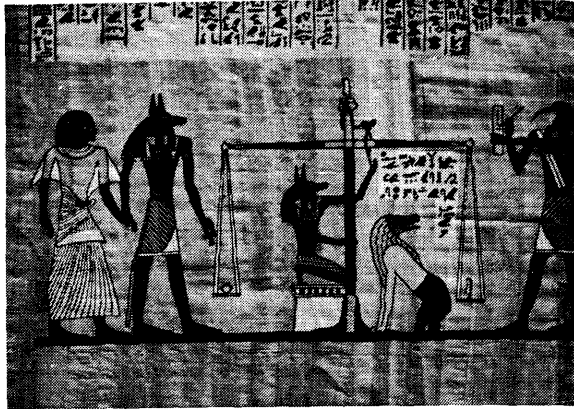
その壁画にきざまれているのは、法の審判・アヌービスである。地獄の法の審判で、死後の行先を決定する存在だ。

アヌービスはジャッカルという動物の顔を持っている。これはアヌービスの特徴を象徴的に表わしたもので、古代遺跡は往々にしてこういう表現方法をとる。

アヌービスがなぜジャッカルかというと、ジャッカルという動物は骨にかぶりついて、骨の髄まで達する牙をもっている。すなわち法の審判アヌービスの前に出たら、私たちは何も隠し立てはできないという意味である。心の底の底まで、すべてお見通しというわけだ。

一五ページの写真を見てほしい。左側に立っているのがアヌービス、彼は今、私たちのハートと、真実の羽を、天秤にかけているところだ。そして天秤の右下には鰐がいて、鰐は地獄行きが決まった人を呑みこむために待機している。

古代エジプトの人々は、死後の世界の存在を信じていた。そのため弔いの儀式は、非常に重要な意味をもっていた。それは肉体から離れた魂と霊を助けるのに、その儀式が役に立つもの



法の審判・アヌービス

この壁画では、肉体の死が訪れると、靈魂は死の川を渡っている。その川にはアーチ型の橋がかかっているのだが、無事に渡りきれるかどうかはその人の内面生活のいかんによる。エゴをたくさん抱えている場合は、たやすく川に落ちてしまうのだ。そして地獄界へと連れ去られてしまう。

なかには橋を渡りきらないうちに、高次の存在が迎えにきている人もいるし、反対に無事渡りきっても、向こう岸でもう一度、正義の天秤にかけられている人もいる。

だったからだ。

肉体の死後、霊と魂を助けてくれるのは、叡知の光と神聖な正義である。現在行なわれているような、生き残った人々をなぐさめるのが目的の葬式ではない。世の中が物質主義に傾くにしたがって、古来より伝わった神聖なものが形骸化していく。

弔いの儀式はまた、アステカ文明の時代にも行なわれていた。そこでは、大地の母がすべての霊を呑みこむために、死人を呑みこむ、といわれていた。地獄はミットランと呼ばれ、その機能は同様に、心理的な浄化を目的としたものだ。

ミットランの入口には審判がいて、死ぬとその前に立たされた。そこで高次へ上昇する人と、反対に地獄へと下降していく人とは分けられた。これが先ほど出てきた、エジプトのアヌービスの仕事を描いた壁画と同じ意味あいを持つものだ。

アステカ文明ではこの高次の力（神）をケツツアルコアトルと呼び、羽のある蛇で象徴している。また低次へと引きずりおろすのはテスカトリポカという、黒い顔をし、煙に巻かれた鏡を持っている人物である。

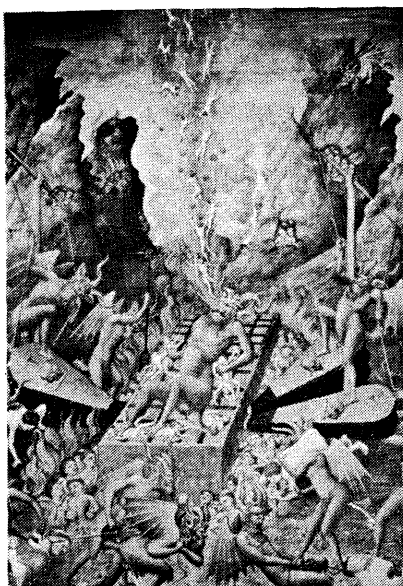
この二つの力、高次へと引き上げようとする力（私たちを助けようとする力）と、低次へと引きずりおろそうとする力は、実は死後の世界にのみ働いているものではない。生きている間も、私たちはこの二つの力のちょうど中間に立たされている。どちらへいくかは、私たち一人

一人の意志の力による。

カトリックの僧院の壁画にも、地獄および死後の世界について描かれている。十三世紀に建てられたイタリアのサンタ・マリア教会には、上の部分に高次が、下の部分に低次が描かれたフレスコ画が残っている。

この壁画では、肉体の死が訪れると、靈魂は死の川を渡っている。その川にはアーチ型の橋がかかっているのだが、無事に渡りきれるかどうかはその人の内面生活のいかんによる。エゴをたくさん抱えている場合は、たやすく川に落ちてしまうのだ。そして地獄界へと連れ去られてしまう。

なかには橋を渡りきらないうちに、高次の存在が迎えにきている人もいるし、反対に無事渡りきっても、向こう岸でもう一度、正義の天秤にかけられている人もいる。



地獄の審判

さてブッダの教義も、正覚を得るためには欲望を殺せ、^{エゴ}といっている。欲望が少しでもあるということは、罪を犯させる原因があることだからだ。そして仏教に極楽と地獄の観念があるのは、読者もご存知のとおりである。日本にある極楽と地獄の思想は、仏教から発したものだ。日本では、肉体の死後、閻魔大王の前に立たされ、裁かれるといわれている。閻魔大王がエジプトでのアヌビスに相応するわけだ。そしてそこでは、私たちは鏡の中に自分の姿を見せられる。浄玻璃の鏡といわれるもので、この鏡に、自分が生前してきたすべてのことが映し出される。もうお分かりのように、これが例の「人生の書」に当たる。この鏡に映る自分は、いつも見慣

般若は鏡に映ったエゴの姿

次頁の絵はキリスト教の地獄を描いたもので、一五世紀、フランスのものである。この絵でたいへん興味深いのは、下に引きずりおろされているのが、司祭であるということだ。営利主義に陥りながら、ネコかぶりして善人面をしていた司祭たちの罪は、一般の人より重い。宗教を教えるべき地位にあったということで、より大きな責任が問われるからである。チベットの遺されているものは、もっと具体的にいろいろなことを語っている。それらは、エゴがあるうちは、人間はエゴの奴隷にすぎない、ということを教える。自分は自分で生きていると考えていても、実際はそうではない。エゴという心理的付着物に使役されているのだ。そしてさらに興味深いのは、このエゴをやっつけることができるエネルギーについて語っているものが、数多く遺されていることだ。エゴは欲望のエネルギーである。たいへんパワフルなエネルギーだ。しかしそれに勝るエネルギーを、私たちは持っているというのだ。それは何か。性エネルギーである。

この何よりも強いエネルギーを上昇・昇華させることによって、エゴをやっつけることができる。これがタントラの秘密である。神々の交合図が現わし、伝えているのは、性エネルギーの昇華についてなのだ。



般若

自分の^{サイキス}霊のランクにふさわしいところへたどりつく。ここには無実の罪^{えんざい}も冤罪も存在しない。自分の培^{つちか}ってきた心理状態にピッタリの段階^{ラング}に落ち着く。この段階は、九つに分かれている。私たちの心理^{サイキス}が低いものであればあるほど、低いところへ降りていくし、汚れがひどければひどいほど、長くとどまっていることになる。そして下へ降りれば降りるほど、多くの法則に縛られた不自由な世界となる。地獄の第一段階に落ちるのは、悪意はなかったけれども間違っていた人たちである。「悪気はなかったんだ、勘弁してよ」なんていう調子のいいことをいってもだめである。そんな甘えは通用しない。行なったことすべては、自分で責任をとらなければならない。行なったこと「私は口は悪いけど、心の中はきれいきっぱりしたものよ。腹にためとかなない主義なの」などという人もよくいるが、こういう人は、言葉がどれほどのパワー^{パワー}を持つかわからないで、人を傷つけている。悪意のある棘^{トゲ}をもった一言が、人を死に追いやることだってあるのだ。また、悪口^{アク}というものは、悪意なしに心に生まれるものではないから、この人は自分をだまして

れている自分ではない。生きている間はエゴが私たちをだましているの、真実の自分の（醜い）姿を見ることはほとんどないからである。浄玻璃の鏡に映しだされる自分は、あるがままの自分の姿なのである。その姿は、般若^{はんや}の面に象徴されている。角^{つう}をはやし牙をむきだしにしたあの顔が、私たちの本当の姿なのである。般若^{はんや}は一つの現実として、私たちの内に存在しているのだ。しかし般若とはまた、叡知^{えいち}という意味でもある。それは、私たちは自分の叡知をみがかなければならないということだ。般若があのように醜い顔をしているのは、私たちの内に潜む有害成分のためである。憎悪や肉欲、嫉妬などが般若を醜くしている。私たちが般若（叡知）をみがくとき、それはすばらしく美しい天使になるのである。以上見てきたように、エジプトやアステカ、チベット、日本、そして仏教にもキリスト教にも、地獄^{ジグ}が表現されている。このように遠く隔てられた地で発達した文明に、同じことが描かれているのは、たいへん興味深いことだ。しかし、なぜそういうことが起こりうるかについては、あなたはもうお分かりのことと思う。

地獄の階段は九段階^{ラング}

法の審判が終わり、地獄の入口を通過すると、いよいよ地獄の中である。それぞれの靈魂は、

いることになる。口から出る言葉にも行為と同様の注意を払うことが大切である。

善人であるが、進化のための努力をしなかった人も、地獄の一段目に落ちる。現在の状態にとどまったまま停滞していることは、すなわち退化なのである。進化するか、退化するか、どちらかしかなく、中間はあり得ない。現状維持は退化にはならない。

彼らはふつうに見れば、誰にも迷惑はかけていないし、悪いこともしていない。本人たちも、自分は天国に行けると思っているだろうが、上昇するために何の努力もしなかったのなら、そうはいかないのである。

寺や宗教団体に多額の寄進をした人もこの中に入る。お金を払ったからといって安心して、努力しなかった人たちである。お金をいくらたくさん支払っても天国にはいけない。お金は物質にすぎないから、目に見えない次元では何の価値も持っていない。

肉欲に溺れた男は二段目に

では二段目に行ってみよう。

ここは、肉欲に溺れ、好色な人生をおくった人が落ちる。

「オレには肉欲なんてそんな汚いものはない。オレが彼女を抱きしめたいと思うのは、愛しているからだ。愛は美しいものだ」

そう思っている人がほとんどだろう。何度も妻を捨て別の女性と結婚することを繰り返している人でも、妾を何人もかこっている人でも、愛しているからだ、というだろう。

しかし、愛とはそんなに短い期間しか続かないものでもないし、何人もの女性に分散できるものでもない。そしてまた、愛は努力によって自分の内に育てていくものだから、誰でもが持っているものでもないのだ。愛の種はみんな持っているけれども、それは育てなければいつまでも種のままである。

彼らが愛と呼んでいるのは、情欲である。だから満たしてしまうと、飽きてしまう。そして別の女性へと走るのだ。

愛と情欲とはたいへん混同しやすいものである。だから、たとえば彼女にキスをしたいと思ったら、

「これは愛だろうか、情欲だろうか」

と、魂にたずねてみるくらいの用心深さが必要である。

女性も同様で、彼があなたに甘いキスをしたからといって、それが愛そのものであるなどと勘違いしてはいけない。また彼があなたに手をふれないからといって、愛していないからだと思いうのも早急である。その前に、彼のそんな行為を求めている自分の心を、しっかりと見つめてみるのだ。そうすれば、自分の中にある情欲を発見することができる。

またタレントや俳優などで、性的な誘惑を行ない、自分自身も誘惑に負けて退廃してしまった人々もここにいます。日本のタレントや女優さんは、雑誌やTVで簡単に裸になっているが、そうやって不特定多数の男性に性的誘惑を与えることで、自分のオーラがどんなに汚れていくかを知らないでいる。知らず知らずのうちに、自分が汚れていっているのだ。

三段目・六段目——大食漢・浪費家・おこりん坊・狂信者

大食のエゴを育ててきた人が行くのは、三段目である。ここではおいしいものが目の前に並べられているのに、食べることができない。肉体がないからである。それは彼らにはたいへんな苦しみだ。

減量するために、食べたいものをガマンしたことがある人には、彼らの苦しみがどんなものか察することができると思う。しかし生きている時には、減量し終わったら食べることができた。だが、強制的洗浄を受けている彼らは、そういうわけにはいかない。ずっと、信じられぬくらい長い間を、ガマンしつづけていなければならぬ。

また官能的快楽やぜいたくに身をゆだねた人も、この三段目に落ちる。

洋服やアクセサリー、住居や調度品などはこの世で生活している以上、ある程度は必要である。しかし精神的なものをなおざりにして、物質的なものを追いかけるのに、人生のほとんど

すべての時間を費やしてしまうなら、その靈魂は地獄へ行かざるを得ない。その心理は欲で凝り固まっているからだ。

第四段目に落ちる人は、浪費家であったり、逆にケチであった人である。どちらにしても欲が深く、他人をうらやんでばかりいる。いつも不平不満を内にかこめて、満足するということがない。

さらに下降して五段目に降りれば、いつも怒ってばかりいた人がいるところである。生きている時、いつも腹を立てて怒ってばかりいた。そしてけんかもしょっちゅうしていたので、霊（サイキス）がその状態にすっかりなれてしまつて肉体がなくなつても怒り続けている。怒る相手が見つからない場合は、自分に対して怒っているのだ。

皮肉ばかり言っていた人、冷淡であった人、自意識過剰であった人なども、この段階に落ちる。自己中心のエゴイストで、心がねじまがったようになって生きていた人々である。

第六段目に行くのは、狂信者たちである。自分が救われたいために信仰に入つたが、その宗教を信じるあまり、他の常識が見えなくなるわけだ。もちろんこれは宗教に限らない。思想にしてもそうだし、占いや運命学、最近では自然食運動にもその傾向が見られる。本来よいことをやり始めながら、あまりにも頼りすぎて、バランスを失った状態になるのである。

その反対に、何でも疑ってかかる人も同じ段階である。信じるにしても疑うにしても、その

根本は同じだからだ。物事を冷静に判断する力を身につけることで、そこに落ちるのを防ぐことができる。いつも自分を見失わないことである。

また自分の責任を回避しつづけて一生を終えた人も、六段目に落ちる。

七段目／九段目——無理強い・ウソつき・裏切者

さて次は七段目である。

現代人はこの段階に落ちる人がさぞ多いことだろう。

七段目に落ちる人は、自然に反する罪を犯した人々である。これは少し考えるだけで、いくらでもあげることができる。

たとえば食品公害がそれだ。農薬や添加物、その他本来は食べるものではないものを食品として開発した人々。あるいはふつうの状態ならとくに腐っているものが、腐らないでいるようにした人々。それら偽りの食品を発明した科学者や、それを売って儲けた人々である。

また、肉体を材料として生体実験をした医者たちもそうだし、人工授精もこの中に入る。逆に中絶した人もそうである。さらに自分を自分で殺した人、すなわち自殺者や他人を殺した人、女性や配偶者に対し無理矢理に性行為を強制した人も七段目に落ちる。ちょっと新聞をひろげてみるだけで、七段目に落ちる人を容易に見つけることができるだろう。

かのヒットラーも、あまりにも多くのユダヤ人を殺した行為により、自然に反する罪ということで、この段階にいて洗淨を受けている。

八段目にいるのは、人を騙して搾取した宗教者やお金をとって占いを行なっていた人、あるいは霊がついていると嘘を言ってお金を儲けた霊媒たちである。

なぜなら、正直な仕事をしてお金を得、物質的な生活を維持するのは正しいことであるが、精神的機能、あるいは超常感覚機能をお金儲けのために使ってはいけないのである。それらの特殊な能力は、霊的進化のため、また人々に献身し役に立つために与えられたものだからだ。自分の欲のために使うと、ここに落ちるのである。

精神的なもの、あるいは宗教などは、人間の魂に関するものだから、とくに気をつけなければならぬわけだ。

ブラック・タントラを実践した人や偽りの予言者なども、同じ理由でここにいる。また売春もこの段階である。

さて次はいよいよ最後の段階、九段目である。この段階に至ると、もう地獄の底の底、あまりの息苦しさで圧力ががんじがらめになり、少しの身動きさえもできない状態だ。

ここに落ちるのは、裏切者である。そしてまた魂をお金で売る行為をしてしまった人である。悪魔と契約を結んで、太いにお金を儲け、権力をもち、人生を退廃的な喜びにゆだねた人は、

九段目に落ちる。地上で楽しんでいた分を、ここで苦しまねばならない。たかだか百年にも満たない現世の人生を楽しんだ代償として、何千年にもわたって苦しむのである。

これが第二の地獄である。だがこれは罰ではない。自分の心理状態にピッタリ合ったところに行くだけだ。といっても、自分で自分の心理がどういった段階にあるかを正確にとらえている人は少ないだろう。多かれ少なかれ、自分は美しい心をもっていると思っているのが人間というものだ。

だが地獄では、自分自身の真の姿に直面させられるのである。生きている間は避けてきた現実、否応なしに対峙させられる。

けれどもその前に、生きている間に、勇気をふるいおこして、私たちは般若のような自分の姿と対決しようではないか。自分の欲求不満や抱えている問題を、言いわけしないで見つめてみようではないか。そして自分の現実である醜い姿を、なんとかして美しくするよう努力していこう。その道は困難な道であるが、得られる喜びはどんなものよりすばらしいのである。

こうして低い次元で長い長い洗淨の時をすごした魂は、やがて清らかな魂のエッセンスとなって、そこから出てくる。そして転生のサイクルがまだ残っていれば、もう一度人間の肉体を与えられ、習得のために地上に送り出されるのである。

閻魔大王にも慈悲がある

さて、地獄への旅はいかがだったろうか。

ゲツソリした方もおられるだろうし、今までの人生を振り返って恐怖を感じている方もいるかもしれない。

しかし肉体があるうちは、すべてが可能である。絶望する必要はまったくない。

ここで一つ、重要なことをお話しておこう。

それは、閻魔大王やアヌービスなど法の審判を受け持っている存在は、残虐な、機械的な存在ではないということである。

彼らは法に従うけれども、慈悲を持っている。高次の存在だから、愛を持っている。それは犠牲の愛である。だから、私たちを許すことを知っているのだ。

法の一つに、こういうものがある。

「すべての扉は閉ざされている。しかし、たった一つだけ残された扉がある。それが『後悔の扉』である」

すなわち、心の底から後悔するとき、許されるのである。

心の底から後悔するとは、気持の上のことだけをさすのではない。もう決して、同じ誤ちを

に献身する、ということである。自発的に他人のために献身することは、自分の心理の汚染されたエネルギーを変換していくのに、たいへん効果的な方法だ。もちろん、表面的にやるのでは効果はない。心理が重要なのである。

病氣や困難にも冷静に対処

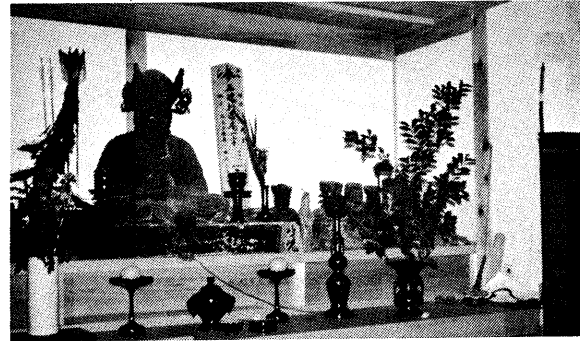
こうした原因と結果の法則は、目に見えない次元にだけ機能しているものではない。今、生きている私たちをも拘束している法則である。分かりやすくいえば、借り（カルマⅡ業）とほろび（ダルマⅡ法）の法則ともいえる。

この法則は単純なものだが、これを応用して自分の周囲や自分自身を観察するなら、多くのことが見えてくる。自分がどうしてこういう状況におかれているのかも分かるし、何か問題が起きたとき、どう対処すればよいかも分かる。落ち着いて、冷静に考えさえすれば、どんな難題でも解決できるのだ。

たとえば、病氣になった時のことを考えてみよう。

病氣になった時、まず病院に行く。そして肉体の治療に専念する。それが一般に人が行なうことである。

しかしもう一つ、その時に考えなければならないことがある。それは、



円覚寺にある閻魔大王像

犯さないということである。あなたがこれ以後の人生で、それを実行できれば、許されると確信してよい。

たとえ実行するのが困難なことであっても、彼らがいつでも私たちを援助してくれるということを、忘れてはならない。私たちがしなければならぬのは、援助を求めることだけだ。

また、法の審判にかけあって、信用、とりひきにしてもらうこともできる。

地獄も原因と結果の法則で機能しているので、無知ゆえに犯したカルマが山積しても、それを請求される前に支払うということ、彼らと相談できる。そして、その借り（Ⅱ犯したカルマ）を支払うために、寿命を少し延ばしてもらうことも可能だ。

彼らと話し合う方法についてはお分かりだと思うが、では、借りを返すにはどうすればよいだろうか。

その方法の一つで、たいへん有効なものが、人類のため

「なぜ、自分はこの病氣にかかったのだろうか」
ということである。

そして瞑想する。

「何を習得するために、この病氣が与えられたのか」
について、一人で静かに瞑想するのである。

もちろん、肉体的な治療も大切である。しかし、その病氣について精神的な面から理解していくことで、回復はもっと容易になる。痛みや不安に翻弄されることなく、冷静に自分と病氣の関係をみつめるのである。

私たちの人生は無秩序ではない。そして罰でも快楽でもない。人生は勉強・習得の過程なのである。だから病氣という困難が与えられたときは、それによって何かを学ぶ必要があるときなのである。大病をして人生観が変わり、それまでとはまったく違う人生を歩み始めた人を、あなたはたぶんご存知だろう。それが、習得したということなのだ。

いたずらに苦しんだり、自暴自棄になったりしてはならない。どんなときにも、冷静さを失わぬことだ。そして自分がやらねばならないことをしっかりと擲^ぶんで、実行していくことである。

V

前生の世界は
どうなっているか



人生は氷山の一角にすぎない

本書をここまで読みすすめてきた読者ならば、この人生は“学びの場”であり、実は氷山の一角のようなものにすぎないことがお分かりになったと思う。

水面上に出たちっぽけな氷の丘は、水面下にある巨大な氷塊によって支えられている。動きも水面下のほうが活発だ。しかし目には見えない。私たちの人生と目に見えない次元も、それと同じような関係にある。

私たちはすでに、何万回もの転生を生き、今生に至っている。それらの転生で行なってきたすべてのことと、一回ごとの人生を終えて死後のプロセスを経してきたことが、水面下に隠れた巨大な氷塊のように私たちを支えているのだ。あるいは支配していると言いかえてもよい。

だから、自分の数多くの転生を知ることとは、自分を支配し、動かしているものの正体を知ることでもある。それによって自分の人生がなぜこのようなものであるかを理解することができるのだ。そうするともう、人生のもつ畏にははまらない。もっと賢く生きることができ

る。

しかし焦^{あせ}ってはいけない。準備に時間をかけることが、何を行なうにしても成功の秘訣だ。準備が整わないうちに、すべてのことを知ってしまうならば、その人は発狂してしまうだろう。

あるいは自分をだますことに専念してしまうかもしれない。

これらの転生で精神的・心理的進化のための努力を続けてきた人は進化していつているだろうし、欲望^{エゴ}のおもむくままに気ままな人生を送ってきた人は退化している。転生を繰り返していくうちに自然に人は進化する、と考えている人がいるかもしれないが、まちがいである。自覚と努力なしに精神的進化はありえない。

しかし、もし今、それらの転生を目の前に見せられたならば、私たちは絶望のあまり、生きていく気力さえ萎^なえてしまいうに違いない。それだけのカルマを返すだけの力が、とても自分の中に潜んでいるとは思えないからだ。

そのため、それらの転生は、私たちの心の準備がととのってから、少しずつ提示されていく。何度も心理的危機を経て、もっと強くなり、もっと意識が目覚めるにつれて、さらに多くのことが明らかにされていく。あなたの心の容量があまりにも小さいとき、新しいシビアな情報をそそぎこむことはできないからだ。

アストラル・トリップすることで、あなたは自分の前生を見ることだろう。それがどれくらい鮮明に見えるかは、あなたの精神的進化の段階と深く関わっているのだ。それはアストラル・トリップによって、自分の進化の度合がどの程度のものかを計りながら進むことができるということでもある。

では二つの実例をひいて、今生と目に見えない次元の関係についてみていこう。

里子に出された長男

これはブラジルであったことだ。リカルドとスサンナという夫婦に起こったことである。

リカルドは有望な法律家であり、スサンナはおとなしい、家庭的な女性だった。

結婚して二人がまず望んだのは、かわいい子どもを授けたいということだった。そして望みどおり、スサンナは妊娠した。若い夫婦はとても喜び、生まれてくる子どもの未来についてあれこれ夢を描いていた。そしてもう妊娠九カ月目となると、その子どもの未来のプログラムはすっかり出来あがっていた。

リカルドは父親になる喜びと晴れがましさにいっぱいだった。

「男の子がいい」

彼は思った。

「そして医者になろう。私は法律家になったが、子どもは医者がいい。そして病院を開業するのだ。設備の整った、しゃれた病院だ。いかにも病院という感じがする設計じゃないほうがいいな、うん、ちょっと高級なホテルのような病院がいい。そのほうが入院する患者も、気が楽だろう……」

リカルドはもうすっかり男の子が生まれることに決めて、なんと病院を開業するための広い土地まで買ってしまった。

実際、親というものは、多かれ少なかれこういう傾向を持っている。子どもの人生を自分の思いどおりにできると考えるのだ。しかしそうはいかない。子どもは親の所有物ではないし、彼なりの役目を持ってこの世に生まれるからだ。

さて一方、スサンナのほうは、女の子がほしいと思っていた。そして出産を前にした多くの母親と同じく、健康で素直に育ってくればそれで充分だと考えていた。

リカルドは、そうやって、スサンナの妊娠期間中、ずっと子どもの未来についての計画をたてていた。だから、いざ出産というときには、とてもいらいらしていた。産室の前を落ち着かない様子で歩き回っていた。

やがて産声が聞こえた。リカルドは期待と不安でじりじりしながら、産室から知らせにきてくれるのを待った。だがなかなか来なかった。ようやく医者が出てきたとき、もう待ちきれなくなっていたリカルドは、すぐに尋ねた。

「男の子ですか」

「はい、男の子です」

「健康ですか。スサンナは大丈夫ですか」

「二人ともとても元気です」

そこまで聞いて、リカルドはおかしいと思った。医者がちつとも嬉しそうでなく、反対に沈痛な表情をしていたからだ。望みどおり男の子が生まれ、母子ともに健康だというのに、他に何の心配があるのだろうか。

リカルドはだまって、医者のでかたを待った。彼には、何があったのか想像もつかなかったからだ。

医者は言った。

「男の赤ちゃんは元気ですけれども、腕がありません」

ちようどサリドマイド被害で生まれた子どものように、手はあるけれども腕のない体をもって、その子は生まれてきたのである。

リカルドは愕然とした。

「どうしてだろう。私はこれだけ健康で、自分でいうのも何だが、頭もよくていい職業についているというのに。どうして自然は、私にこんな仕打ちをするのだろうか」

リカルドには理解できなかった。そしてその子を、自分の子どもとして受けいれたくないと思った。

そこで彼は医者に頼んだ。

「スサンナはもうこの子を見たのですか」

「いいえ、まだです。ショックを与えないほうがいいと考えまして。もう少し落ち着いてからのほうがよいでしょう」

「ああ、それなら、どうかこのことはスサンナに言わないでください。死産だったと伝えてください。私はこの子を育てたくありません。誰か育ててくれる人を探しますから、どうかそれまでお願いいたします」

医者は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに頭を振って、無理もないとつぶやいた。リカルドは赤ちゃんを見ようともせず、すぐに里親を探すために病院から出ていった。

里親はウルグワイの人に決まった。すでに子どもを何人か育てた、貧しいけれども気持のやさしい夫婦である。リカルドはその夫婦に十分な養育費をわたし、教育も最高教育まできちんと受けられるよう準備を整えた。腕はないけれども、美しい瞳を持ち、利発そうな顔をしたその赤ん坊は、こうしてウルグワイへともらわれていった。

甘やかして育てた次男の本性

月日はながれ、スサンナはふたたび妊娠した。そして今度は五体満足な、望みどおりの男の子が生まれた。ジェラルドと名付けられ、両親に可愛いがられ、甘やかされて育った。



しかしジェラルドは、乱暴な子どもであった。往々にして男の子の中には粗野な子がいるが、ジェラルドはもつとたちが悪かった。子どもらしくない悪意が、その行動の中に見えかくれていた。元気がよくてつい乱暴をするというのではなく、自分で意識的に暴力をふるうのである。親の言うことには耳をかさず、とても気まぐれで、手がつけれなかった。そんな性格は、大きくなるにつれてますますエスカレートしていった。青年に達したころは、もういっぱしの不良だった。ドラッグを飲み、不良仲間を引きつれては乱暴をはたらいた。父親が法律家だったので、事件を起こすたびに何とかもみけして、刑務所には入らないですんでいた。

しかし両親は、そんな子どもにもまだ希望を託していた。その子がどんな人間であるかを、正確に掴んではいなかったからだ。トラブルをあちこちで起こしているにもかかわらず、ねだられると最新式のスポーツカーを買ってやりたりした。

いい気になって乗り回していたジェラルドは、すぐに事故を起こした。女の子を二人、ひき殺してしまったのだ。親がこの子の性格や行動を正確に知っていれば、防げた事故であった。冷静さを要する職業についている父親でさえも、息子の本当の姿を見ていなかった。いや、見ようとしなかったのだろう。

このように、ジェラルドのおかげで、リカルドとスサンナの生活は耐え難いものとなった。

とくにこの交通事故に衝撃をうけた二人は、ジェラルドを更正させるために、特別の病院に入院させることを決意した。

そして一年——。ジェラルドはすっかり心を改めた。少なくとも見た目にはそのようだった。今までの行ないを、涙を流して謝るジェラルドを前にして、両親は、今度こそ大丈夫、と思った。そして退院させることにした。

だがジェラルドがおとなしかったのは少しの間だけだった。一カ月もすると、しだいにその本性を表わし始めた。

ある日、夕食までには帰るといって外出したジェラルドが、十時になっても十二時になっても帰って来なかった。何の連絡のないまま一時、二時となっていくにつれて、両親はジェラルドが更正したふりをしていたにすぎないことに気づかねばならなかった。

へあの子はまたもとのように、問題の多い生活をするのだろうか。

そう思っただけ息をついているところに、警察から電話がかかってきた。リカルドもサンナも、もう事件については聞き取らなくなった。ジェラルドについても何も知りたくなかった。

「刑務所にとじこめてくれ」

警察からの問い合わせに、リカルドはそう答えた。

足の指でピアノを弾く長男の演奏のすばらしさ

リカルドもサンナも、その頃はもういい年だった。人生に疲れを感じ始めていた。とくにジェラルドが生まれてからは、この二人には気の安まる時がなかった。

ジェラルドが刑務所に入ってから、二人は旅に出ることになった。家屋敷や家財道具をすべて売り払い、長い長い旅に出たのだ。それまでの出来事をすべて忘れ、新規一転してこれからの生活を送りたいと思ったからである。

そして彼らはウルグワイまでやってきた。

ウルグワイは彼らの最初の子どもが育ったところである。その子はマヌエリートと名付けられていた。

リカルドとサンナがウルグワイの街を歩いていると、ある音楽会のポスターが目に入った。リカルドはそれになりたいへん興味を持った。なぜなら、その音楽会の主演をつとめる人物が腕のない男性だったからである。彼は「人間百科事典」と呼ばれていた。

リカルドにはその男性が自分の息子であることがすぐにわかった。そしてどうしてもその音楽会を見たいと思い、その夜早速、サンナを連れて行った。

その音楽会はとても美しいものであった。音楽だけではなくクラシックバレエなどもやり、

音楽会全体の構成やアイデアに工夫が凝らされていた。演出がよくできていたのだ。

中心的なステージはマヌエリートが出演するステージだった。マヌエリートに腕はないが、それを誰も意識していなかった。彼は足の指でピアノを弾いた、オルガンも弾いた。それはまったく普通のことのようなだった。彼の音楽は、人々の魂を呼び起こした。すばらしい演奏だった。

そればかりか、その音楽会のプロデューサーおよびディレクションは彼の手によるものだった。おどろくべき才能を持っていたのだ。彼はこのようにして、物質に勝る魂の力というものを示した。

その音楽会が終わったとき、感動の嵐に包まれていた観客たちは、われんばかりの拍手をした。そしてその拍手の中でスポットライトに映しだされたのは、マヌエリートの奥さんと子どもたちだった。

リカルドはそれを見て、感動した。スサンナのほうを見ると、彼女は泣いていた。リカルドはそこで、スサンナにも直観的にマヌエリートが息子であることがわかったのかと思って、きいてみた。

「どうしたのだ。いったい何をそんなに涙を流す」

「私はあのような心の曲がったジェラルドのかわりに、たとえ腕がなくても、どうして神はこ

のような子どもを私にくださったのか、と思ったのです」

次男にあらわれた母親の前生の罪

年月がたち、スサンナはこの秘密を知らないまま死んでいった。

肉体が終わると、スサンナの靈魂は四次元へのぼっていった。スサンナは、どうしてこの人生で多くの苦しみを与えられたのか、その理由を知りたいと思った。そうすると、終わったばかりの人生の説明が、それより前の転生を見ながら行なわれた。それはこういうものだった。

スサンナは前生、ポルトガルで生まれた。やがて結婚し、子どもの母となったが、家庭生活に満足できなかった。

満たされないものを抱えながら、主婦としての平凡な日々を送っていたスサンナの前に、ある日一人の男性が現われた。スサンナは一目で彼に惹かれた。その青年は、スサンナの住む町にやってきたサーカスの一員であった。

二人はすぐに相思相愛となった。そしてサーカスの興行が行なわれている間、毎日デートを重ねていた。だがやがて、その町での興行が終わる日がやってきた。もうすっかり彼に心を奪われていたスサンナは、迷うこともなく夫と子どもを裏切って、彼と駆け落ちした。

この青年が、彼女の二番目の息子ジェラルドである。次の転生でもう一度巡りあったわけだ

が、そこでは恋人としてではなく、息子としてだった。子供を苦しめた前生に対して、今度は子供に苦しめられる状況が与えられたわけだ。それは今回の人生で習得しなければならぬものを示している。苦しみを乗り越えることで習得するのである。

このように私たちに与えられる苦痛・苦悩は、乗り越えねばならないハードルのようなものだ。それは何を習得しなければならぬかを知ることによって、比較的容易に乗り越えることができる。

「それでは、マヌエリートが与えられた目的は何だったのでしょうか」
とスサンナはたずねた。

「マヌエリートは、どのようなカルマを償^{つぐな}わなければならなかったのでしょうか」
「いいえ、マヌエリートはカルマを償う必要はありませんでした」

と、高次の存在は答えた。
「マヌエリートはたいへん洗練された魂を宿した人物です。彼自身が腕のない子どもとして生まれることを望んだのです。その肉体によって多くの苦悩が与えられますが、その代わりに精神的に活発な、集中的な人生を送ることができます。つねに意識を目覚めさせておかずにはいられないような状態にあるのですからね。彼はそういう体に生まれることによって、魂の進化に専念することを望んだのです。自分であのような肉体を選んだのです」

しかしだからといって、マヌエリートが赤ん坊のころからそのことを知っているわけではない。徐々に思い出していくわけだから、幼いころの心の苦悩はたいへんなものである。

「なぜぼくは、こんな体をもって生まれてきたんだろう」

と、問い続けながら成長していくのである。その心理的な苦しみと、「なぜ」と問い続けることが、彼の魂を解答への探求へと促すのだ。

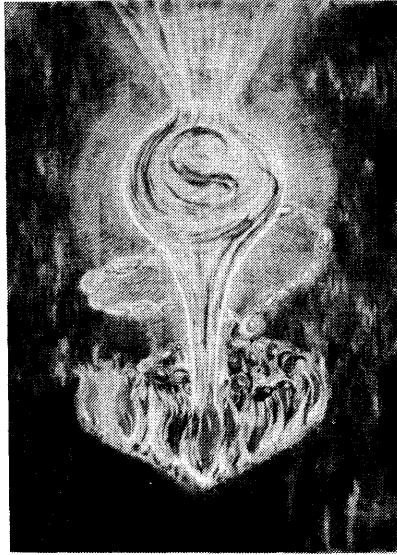
したがって、健康で均整のとれた肉体を持っている人が、必ずしもよい前生を送った人とは限らない。恵まれた環境に生まれた人が、必ずしも前生でよいことをした人とは限らないのだ。反対に逆境に生まれた人が、前生で悪いことをしてきたとも限らないわけだ。

「オレはどうしてこうなんだ！」

と、天を仰いで嘆いている人のほうが、気楽な日々を送っている人よりも進化の度合が進んでいるかもしれない。転生の法は数学的といえるほど正確で、一人一人のケースによって千差万別の状況と環境が与えられる。

高次の存在はさらに続けた。

「マヌエリートの魂が、そのような奇型の体を持って生まれるたいと望んだとき、はじめのうちは許しませんでした。でも彼は、何度も何度も許しを願い出しました。そして、彼ならばそんな体をもって生まれても耐えられる、上昇することができるということを示したので、よう



モーツァルトの音楽のバイブレーション

この「死」は、肉体的な死と同時に、神秘的な死をも指している。神秘的な死とは、欲望を根こそぎ退治してしまうことだ。彼はすでに一五歳の時に、自分の魂を縛るエゴの存在に気づいており、それをやっつけるためのワークを始めていた。彼は肉体があるうちにエゴを根絶しなければならないことを、はっきりと知っていた。そして勇敢に戦って勝利をおさめた。だからベートーベンの音楽は、私たちがエゴをやっつけるための戦いを行なうとき、たいへん勇気を与えてくれる。自分の悪癖を正そうと努力しながらも、時折くじけてしまうとき、ベートーベンの音楽は、もう一度立ち上がるための気力をよみがえらせてくれるのだ。ベートーベンは耳が聞こえなくなっても作曲していた。なぜそんなことができたのだろうか。音の記憶にもとづ

という言葉である。

「死ぬことを知らない人間の中に、尊さはない」

よく許しを与えられたのです」
すなわち、すでに相当上にまで昇っている魂でも、再び地上に出て肉体を持つときには、失敗する可能性があるということだ。決して油断はできないのである。
そしてまた、あなたが今、どんな環境におかれていようと、悲観することはない。この世で多くの苦しみを与えられたからといって悲しむより、まだそれを払うチャンスがあることを喜ぼうではないか。自発的に試練を受けることで、請求される前に払うこともできる。
音楽の聖人・ベートーベンもそんな一人である。彼の苦しみの多かった人生について少しふれておこう。
耳の聞こえないベートーベンは天の音楽を聞いていた
ベートーベンは生涯、結婚することがなかった。前生から引き継いできた多くの汚れを洗浄しなければならず、彼はそれを自覚していたからだ。
だから若いころから、この世の楽しみは自分とは関係がないことを知っていた。人生の目的を見定めていたからである。それは一五歳の時に書いたという、次の言葉からも知ることができる。それは、
「死ぬことを知らない人間の中に、尊さはない」

いて作曲したのでは、とてもあれほどの曲はできまい。なぜだろう。

理由は簡単だ。

彼は音楽を聞いていたのである。どこの音楽か。天上の音楽である。アストラル・トリップすれば肉体には拘束されない。肉体の耳が聞こえなくても、四次元での音楽は聞こえるのである。彼はその音楽を譜面にうつしたのだ。

だからこそ、ベートーベンの音楽はあれほどすばらしく、また一つ一つのシンフォニーがユニバーサルなメッセージを持っているのである。

音楽はそのバイブレーションによって、特定の色と光、そして香りまでも発散させる。また味も持っている。高次音楽のそれらはすばらしいもので、私たちの進化を助ける力を持っている。反対に低次音楽の場合は、私たちをメランコリックにさせたり、妙に自分を甘やかして感傷的な涙をさそったり、逆に情欲的にさせたりする。

ベートーベンの音楽が発するバイブレーションは、たいへんすばらしいものである。たとえば「月のソナタ」という曲が演奏されると、銀色のバイブレーションが発されてあたり一面を包む。銀色という色は、まさしく月のバイブレーションの色だからだ。

また「英雄」というシンフォニーは、赤い色を発している。この曲はナポレオンに捧げるために作曲されたものだ。ナポレオンは精神的進化がかなり進んだ人物であつたし、イニシエ

トに近い段階にまで上昇していたからである。

しかしナポレオンは、途中で転落した。人類のために献身するかわりに、虚栄心に負けてしまったからである。彼が皇帝としての王冠を受け、権力の座についた時、進化は終わり、退化が始まった。高い段階にまで昇りつめた人ほど、受ける誘惑も魅力的なものだし、またそれに負けた時、転落する段階も低次のものとなる。

ベートーベンは、ナポレオンが王冠を受けたことを知った時、「英雄」という曲の解説が書かれた楽譜の表紙から彼の名前を消してしまった。そして、ナポレオンもふつうの人物と同じだ、と言い捨てたのだ。

その瞬間からナポレオンの下降が始まった。彼のパワーはなくなり、セント・ヘレナ島へ送られた。そこで彼は毒殺されたといわれている。虚栄のエゴに命を与えてしまったため、進化は一挙に退化へと変じたのである。

イニシエイト・ベートーベンが肉体をあとにした情景というのは、たいへん象徴的なものだ。自然界が、この宇宙的な出来事を嵐として表現した。すなわち、ベートーベンが死の床についているとき、外は嵐が吹きすさんでおり、彼が息を引き取った瞬間に雷が落ちた。

ベートーベンの魂は、そのあと、高次へと昇っていった。そして高次の世界での音楽のコーンに入っていた。そこには音楽的に洗練された霊ばかりが集まっており、「エメラルドの

館」と呼ばれている。彼はこの館の門番としての役割を与えられ、今でも一人のイニシエイトとして、私たちを援助するためにそこに存在しているのである。

ポピュラー歌手になった混血児

ではさらに転生について理解するために、もう一つ実例をあげよう。やはりブラジルであった話である。

ある貧しい村に、一人の男の子が生まれた。スペイン人と原住民の混血の子供で、名をロセリーノ・サンパヨといった。

ロセリーノは宗教的なことが大好きで、幼い頃から教会へ行って、司祭の手伝いをしたり掃除を手伝ったりしてすごしていた。身なりは貧しくとも、ロセリーノの心は神にあこがれる気持でいっぱいだった。

あるとき、その教会で聖歌隊をつくることになった。そこで何名かの少年が選ばれて練習を始めた。ロセリーノも音楽が大好きだったけれども、そのグループには入れてもらえなかった。でも合唱の練習をしているのを、あるときは庭を掃きながら、あるときは廊下ふきをしながら聞いて、自分で覚えていった。そしてグループが練習していた曲は全部歌えるようになった。

村の記念日が近づいていた。聖歌隊はその日にデビューを飾ることになっていて、練習には

さらに熱がこもった。ソロを歌う子供が一人選ばれ、特別の練習を始めていた。

ところが記念日を間近に控えて、ソロを歌う予定だった子供が肺炎になってしまった。いそいで代わりの子供を探したが、その子ほど上手に歌える子はいない。神父さまや関係者の人々は頭を抱えてしまった。

そのとき、きれいな歌声が聞こえてきた。音程もしっかりしていた。これだ、と思って、誰が歌っているのかを見に行くと、裏庭を掃除しながらロセリーノが歌っているのだった。神父さまたちは驚きながらしばらく聞きいつていたが、やがてロセリーノを呼び、尋ねた。

「誰に歌を教わったんだい、ロセリーノ」

「ぼくはみんなが練習するのを聞きながら、覚えたのです。神父さま」

「歌える曲は今のだけかい。それともほかにも歌えるのがあるの」

「よく、全部歌えます！ 全部覚えてます！」

ロセリーノはソリストに抜擢された。その日から記念日まで、練習期間は少ししかなかったが、ロセリーノは一生懸命練習した。そして晴れの舞台ではたいへんな好評を得ることができた。

そんなロセリーノは、大きくなるとポピュラー歌手になった。曲を自分で選び、できるだけよい音楽、人々によいバイブレーションを与える音楽を歌うよう努力した。決して社会を毒す

るような、人間の低い次元に属する感情を刺激する歌は歌わなかった。音楽の持つ力を知っていたからだ。

だからお金を払って聞きにくる人のためだけではなく、貧しい人々のためにも歌った。チャリティコンサートを開いたり、牢獄に閉じこめられている囚人たちのために歌ったりした。善い心を持ち続け、有意義な音楽活動を行っていた。

高次元の世界で白ロジのマスターに会う

しかし私生活は必ずしも幸福ではなかった。結婚したが、その結婚生活はうまくいかず、結局は離婚してしまった。

それから二年後、夫に先立たれて二人の子供を育てている女性と巡り会えた。やさしいが芯の強い女性で、ロセリーノは彼女と再婚した。そして今度は幸せな家庭を築いた。仕事も順調で、ようやく落ち着いていた幸せな日々を送れるようになった。

ロセリーノは苦労してきただけあって、強い心を持った人物だった。しかしたった一つだけ恐いものがあつた。その恐がりかたは、異常といつていいほど激しかった。

彼は火を恐れたのだ。本物の火はいうに及ばず、映画の中に火がでてきただけでも冷や汗をかき、心臓は恐怖のあまり高鳴るのだった。

二度目の妻はそれをととても心配した。そして何とか治したいと思った。ふつうの医者に診てもらっても分からないだろうから、霊媒に聞きにいったらどうかと、ロセリーノに強く勧めた。彼はそれに従った。

けれども霊媒にみてもらった結果に、彼は納得できなかった。それは前生で宗教裁判を受けて、火あぶりの刑に処せられたからだ、というものだった。自分は小さい頃から宗教に惹かれ、宗教的なことが大好きなのに、異端者となって火あぶりになったなんておかしい、とロセリーノは思った。結局、はっきりしたことは分からなかった。

ロセリーノは自動車事故で死んだ。

チャリティショーを開いて、貧しい人々を助けるために無料で歌った後、自分で車を運転して帰路についた。その途中、事故に遇ったのである。あれほど火を恐れた彼が、車ごと炎に包まれて死んでしまった。

ロセリーノは、死後、高次へと導かれた。

けれども肉体が死んだ後も、まだ自分の体が燃えているような感じがして、目をあけるのが恐かった。そのときロセリーノのまわりには、まっ白の衣を着た人が何人か集まっていた。そのうちの一人が、ロセリーノの体のまわりを手で治療してくれたので、燃えている体がさめていくような快い感覚があつた。しばらくして、もう大丈夫だと思ったロセリーノは、おそろお

そる目をあけてみた。そしてたずねた。

「ここはどこですか。私は自動車事故に遇って、全身火だるまになって死んだはずなのに」

「たしかにそうですね。それはもう終わりました」

白い衣を着た人の一人が答えた。

「じゃあ、私はもう死んでいるのですね」

そう自分で言った瞬間、ロセリーノはマインドがとてもクリアーになっていて、物事を明快に考えられるようになっていくことに気づいた。今、自分に起こっていることを、はっきり認識することができたのだ。そして自分の周囲にいる人々が何者なのかも分かった。

「みなさんは白ロツジのかたですね」

「そうです。あなたを援助するために、ここにいます」

彼らは喜ばしげな表情で答えた。ロセリーノは言った。

「私は以前、みなさまにお会いしたことがあるような気がします」

このような記憶のよみがえりは、死後、往々にして起こることである。私たちを押しこめていた肉体がないので、霊性のチャクラが活発に活動しはじめ、すべてを繊細に明快にキャッチするようになるからだ。

火を恐れた理由

ロセリーノは、自分の転生について彼らと話し合い、前生に起こったいろいろなことについても話をきいた。

「どうして私は、いつもあんなに火を恐れていたのでしょうか。そしてついには、火に包まれて死ななければならなかったのでしょうか」

「宗教裁判のあったころ、あなたがスペインで生きていた時代を思い出しなさい。」

その転生では、あなたはポルケマードという名前の司祭でした。とても狂信的で、残虐で、多くの無罪の人々を火あぶりにしました。そのために、その後の何回もの転生で、あなたは火によって死ななければならなかったのです」

結婚についても、前生からの関係でみていった。

すぐ前の前生で、彼は二度目に妻となった女性と結婚していた。しかし他に愛人をつくり、彼女を捨てて家出した。そのときにお金もすべて持って出たので、彼女は無一文で取り残されてしまった。

けれどもそのとき持って出たお金は、途中で強盗にあってすっかり盗まれてしまった。それどころか、強盗は彼をなぐったり蹴ったりして乱暴をはたらいたあげく、やけどまで負わせて

崖下につき落とした。

しかしロセリーノは、二度目の妻に今回はすべての財産を残してきた。前生で彼女から奪い取ったものを、何倍にもして返したのである。また彼女の二人の子どもも、ロセリーノのおかげでよい教育を受けることができるし、生活に困ることもない。

そしてまたこの転生で、多くの貧しい人々のために奉仕し、献身的な仕事をしてきたので、カルマの借りは返すことができた。

そんな説明が終わった後、ロセリーノを取り囲んでいた高次の存在は言った。

「では、あなたがこれから暮らす館に案内しましょう。空高く飛びあがりますから、あなたの想念を自然と調和させてください」

そう言われて、彼はまた、そういうことは以前に確かにしたことがある、と思い出した。

そうして彼が案内されたところは、美しい館だった。「エメラルドの館」である。ロセリーノがそこに着いた時、幼いころ歌を教えてくれた神父さまが出迎えてくれた。

「ロセリーノ、歓迎しますよ」

そこでは美しい音楽が流れていた。彼がすでに知っている曲だったが、肉体をもっている時とは比べものにならないほど美しく聞こえた。そのあまりの美しさに聞きはれてみると、神父さまが言った。

「これからあなたは、この館で正式の歓迎を受けるのです」

歓迎の席では美しいコーラスが歌われたが、それはベートーベンの「第九交響曲」であった。エメラルドの館にやってくる魂を受け入れる時に歌われるのが、この曲なのだ。そしてその歌が聞こえている間、美しい青い色と金色の光線があたりを包んでいた。

あなたにもある三十二万四千回の転生のチャンス

この二つの実例、ロセリーノとスサンナの人生は『ラマティス』(RAMATIS:SEMBRANDO Y RECOGIENDO)という本で紹介されているものだ。この本は、ラマティスという高次の霊との通信によって伝えられた内容をまとめたものである。どちらもブラジルでのことなので、日本の読者には少しなじみがうすいかもしれないが、転生というもののあらましはお分かりいただけたと思う。

また転生での有名な話に、先日来日された第一四世タライ・ラマ猊下の例がある。テレビに出演された猊下は、例の気さくな調子でこう語っておられた。

「小さいころ、私は前生のことをよく覚えていたらしい。『ここには住まず、ラサに住む』と皆に言っていた。そして家まで訪ねてきた使節の方々のこともよく知っていた。前生のことを覚えている人は、私にかぎらず大勢います」



チベット・天国と地獄の輪廻図

事実、チベットでは多くの僧侶が前生を覚えていて。また僧侶の修行の一つにボワというものがあるが、これはアストラル・トリップするための技術である。最近で活躍中の中沢新一氏も、その著書『チベットのモーツァルト』の中に、ボワ修行中に肉体から離脱した体験を書いている。古来より伝えられた叢知とは、このようなテクニクさえ持っているのだ。だからこそパワフルな、生

きた知識なのである。

しかし、私たちは永遠に転生を繰り返すわけではない。ある一定のワクというものを持っている。それは誰にでも平等なものだ。

すなわち私たちは、百八回の転生を一サイクルとして、三千サイクルの転生を持っている。合計三十二万四千回、肉体を与えられるわけだ。これがすべての人に平等なワクである。

一サイクルとはどういう意味かというと、そこを一区切として、それまでの転生を取支決算するということだ。

つまり百八回の間は、前生との関係においてストレートに肉体を与えられ、生まれ変わっていく。そして百八回を終えた時点で、それまでに培ってきたネガティブな価値とポジティブな価値を差し引いて、どこへ行くかが決定されるわけだ。

ネガティブな価値を増やしてきた人は低次へと下降し、強制的な洗浄を受ける。洗浄が終わると、純粋なエッセンスとなって出てきて、もう一度肉体を与えられ百八回の転生を繰り返すのだ。それを三千サイクル行なった後に、また低次へと落ちるようであれば、もう人間の肉体は与えられない。そこで進化のチャンスは終わったわけである。

ではポジティブな価値を増やしてきた人はどうかというと、百八回の転生が終わると彼は高次へと導かれる。そしてそこで長い休暇をすごした後、また肉体を与えられる。それはさらに洗練を重ね、さらに進化の段階をあがっていくためである。

転生の目的は進化すること

三十二万四千回の転生——、その目的はただ一つ、進化することである。そして弘法大師空海が宇宙の根元に還っていったように、私たちも絶対太陽Ⅱ大日如来のもとへ還らねばならな

い。それが生まれてきた目的なのだ。

多くの人々は、動物や植物が自然に進化していくのを見て、人間もそんな風に進化するものだと思っている。しかし実際はそうではない。自然に行なわれる進化は人間になるまでであって、いったん人間の体を与えられたからには、みずからの意志をもって進化していかねばならない。

もし人間が自然に進化していくのならば、社会はこんなに問題を抱えてはいないだろう。

確かに生活は便利になったが、その分、不安の要素も強くなっている。ほとんどの食品に何らかの添加物が含まれているし、野菜や果物も安心して食べられるものではない。ゴミや廃棄物の問題もある。また性風俗は乱れ、さらにエスカレートしていく一方だし、かつては仁術であつた医療は、今では人間を材料とした生体実験に励んでいる。

これらの現実を見ていくとき、物質的進歩はあるとは言え、退化していく傾向のほうが強いと言わざるを得ないのではないだろうか。

私たちは努力することで進化していく。

人間の肉体を与えられながら何の進化もできないのであれば、退化していくしかない。そこで足踏みして停滞しているのならば、進化するかわりに退化していくのだ。どちらかしかないわけである。

世界中の宗教は、必ず何らかのかたちで天国と地獄の存在を表現しているが、それは進化か退化のどちらかしかない、ということをお私たちに教えているのである。

そうして何回もの転生を繰り返して、自分に与えられた三十二万四千回の転生を使い果たしてしまった場合は、もう二度と人間の体を与えられることはない。長い長い洗浄を終えたその魂のエッセンスは、無限の宇宙の中で、水の一部として、植物の精として、あるいは風として、幸福に存在しつづける。しかしもう、それ以上の段階に進化することはできないのである。

また反対に、ごくまれであるが、三十二万四千回の転生を終える前に自由になる人もいる。人間としての肉体を持って修行する必要がなくなったからだ。人類のために献身し、生命エネルギーである性エネルギーを昇華してエゴを完全にやつつけてしまった人は、もう肉体をもつての習得の段階は終えたことになる。彼らはイニシエイトとして高次に存在し、私たちの進化を援助するために手をさしのべてくれる。

だから欲望にどうしても負けてしまうとき、彼らに援助を求めるのだ。自分の力だけでやっていけると思ふのはうぬぼれでしかない。高次の存在はいつでもそこにいるのだから、彼らとコミュニケーションをもって助けを願うのである。もちろん彼らを見ることもできる。

私は一度、病気の友人の治療を願うためにベーターベンを呼んだことがある。彼は指揮棒を持って降りてきて、治療も指揮棒でしてくれた。よくある彼の肖像画のように、多い髪をぐし

やぐしゃにしているのではなく、髪はいく分少なく額のところがはげあがっていた。不思議に思っていたが、後にサントリ―美術館でベートーベンについての展示があった時、私にはその謎がとけた。晩年近くになった彼は、髪が少しはげあがって額が広くなっていたからだ。

そんなふうには彼らは存在している。私たちも今、肉体をもっているのだから、今生での習得の度合によって彼らの段階にまで昇ることが可能なのである。

まず、ちっぽけな自分の枠を打ち破れ

さて、進化しなければならぬことはもう痛いほどお分かりいただけたと思う。そこでこれから、どうやって進化していくか、そのポイントをお話していこう。また「進化」と莫然といわれても、具体的にどのようなものかは掴みにくいと思うので、それも説明したいと思う。

私たちは社会の中で生きていて、学校へ行ったり勤めに出たり、自分の趣味を楽しんだり友人との付き合いがあったり、という生活をしている。人間として生活していく以上、それらは当然のことだ。しかし忘れてはならないことは、私たちはもっと多元的な存在であるということだ。日常の枠の中に自分をはめこんでしまうと、そんな自分が見えなくなってしまう。ちっぽけな自分におのずからなっていくのである。

それはたとえば、こういうことだ。

あなたがなんとなく莫然と作家になりたいと思っていたとする。でもそれはまるで夢のようなことだし、作家という人種も雲の上の人だ。

〈自分にはとつてもムリだけど、憧れるなあ〉

そんな気持を抱きながらすごしていたが、そのうち学校は忙しくなるし、友達との付き合いやおしゃれ、趣味などに使う時間も多くなる。将来の進路も決めなくてはならない。そんなこんなで、いつしかそんな夢は忘れてしまった。

やがて社会に出てそれなりの職業についた。家庭も持ち、もうだいたい自分の行きつく先も見えている。時折暇になると昔の夢を思い出すこともあるが、まあまあ自分はこんなものだろうと一種あきらめに似た心境で、日々をすごしている。

しかし、もしあなたが作家になるという夢を現実を追いかけていたら、まったく別な心境を持つていただろう。たとえ作家にはなれなくても、小説を書くという体験をしているし、それを雑誌に投稿しているだろうし、また社会や生活を見る目も作家としての観察眼をもってするだろう。ちっぽけな枠に自分をはめこんでいないからである。

自分の精神的な部分を活性化するというのは、そういうことである。外見からみるとふつうの人と変わらない。しかしその内側で体験していることは、まったく違う。別の次元を生きているからだ。

現代人の多くは、自分の持つエネルギーの九九パーセントを、社会的なことや日常のこと、すなわち目に見える次元に関することに費やしている。そして精神的なもののためには、わずかにパーセントのエネルギーしか残していない。しかし、充実した精神生活があつてはじめて、魂の尊厳を保って生きていけるのだ。この非常にアンバランスな配分は、魂をエゴの中に押しこめてしまっただけでなく、その人の肉体や精神にも影響を与えずにはおかぬ。病氣や精神異常に陥る危険があるのである。

したがってまずはじめなければならないのは、内的生活の充実ということだ。それはアストラル・トリップを毎日あきらめることなく練習することによって可能になる。

それと同時に、自分の心理、心をきれいにしていかなければならない。心がきれいなればなるほど、アストラル・トリップで行ける世界もすばらしいものになるからだ。

そのためには五つのポイントがある。

ポイント1——魂を活性化しよう

内的生活を充実させ、自分を進化へと導くためには、五つのポイントがある。この五つのポイントは、肉体を与えられた人間が、なすべき仕事を実現するために持っているものだ。

その第一のポイントが魂である。私たちにとってもっとも価値があり、もっともすばらしい

ものだ。なぜなら魂は永遠の存在であり、神聖な起源を持つものだからである。

魂からは真実の愛が生まれる。進化をしたいという意志も、献身への決意も、そこから生まれる。崇高な感情や自由を求める想いも魂からのものである。

けれども魂が何でできているのかは誰も知らない。なぜならこれは、絶対神から来た神聖な火花だからである。絶対神とは宇宙の根元といいかえてもよいし、絶対太陽、大日如来といいかえてもよい。私たちが進化を遂げて還っていくところである。

その司令室にあたるものは心臓の左心室に位置しているが、魂のエネルギーは私たちの細胞のすべてに存在していて、太陽を通して精神エネルギーとして表現される。

その表現には二つのものがある。
愛と知性である。

愛とは犠牲的な愛をさす。情欲的な愛ではない。その人のためなら、自分の血の最後の一滴までも捧げることのできる愛である。自然に対する愛も、魂の表現である。これらの愛は人間の心臓に直接作用してくるものだから、自分をしっかりと観ていけば見分けられる。

もう一つの表現は知性である。この「知性」とは、学校や本で習わなくても物事を理解し、悟るもので、知識の量や学歴とは関係を持たない。理性とも違う。理性は第二のポイントである霊に属するものだ。

知性は魂に属するもので、私たちが開発していかねばならないものだ。それゆえすべての人が知性を持っているとは限らない。ちょうど「平和」が一つの考えや言葉ではなく、開発すべきものであるのと同じことである。

多くの人が平和を口にし、それを求めているがほとんど実現していないのは、自分でそれを開発しなかったからである。つまり平和とは社会ではなく、私たちの意識の状態だから、自分で開発しなければならぬのだ。社会の形態を変更するのではなく、私たち一人一人のエゴをやっつけることで実現していくのである。

知性もそれと同じで、自分で開発していくものだ。

光を探し求め、進化を希求する魂を私たちは持っている。そして求めるものには必ず与えられるということを、忘れてはならない。

ポイント2——霊（心理）の洗練

二番目のポイントは霊である。月に属するもので、私たちの心理がこれにあたる。

ちょうど魂と肉体の媒介をするもので、私たちはこの両者の摩擦で苦しんだり、退廃によって汚れたりするが、魂の衣として洗練しなければならないものだ。その管理局は松果腺に属しており、同時に体中にも存在している。

たとえば何らかの事故で腕を切り落とした場合、切り落とした後にもその腕に痛みを感じることもある。すでに腕が痛むという感覚があるわけだ。そこに霊のエネルギーが残っているからで、これはキルリアン写真でも撮ることができる。

また霊は四種類のエーテルによって構成されている。エーテルとは、日本語に直すと「霊気」という言葉になるだろう。霊の気、霊のエネルギーである。そしてまた生命体とも言われることから分かるように、これが私たちの肉体に生命を与えるものだ。

四種類のエーテルとは、化学エーテル・生命エーテル・発光エーテル・反射エーテルである。化学エーテルと生命エーテルは私たちの有機体の維持、すなわち生理機能や生殖機能を担当している。発光エーテルと反射エーテルは超常感覚機能を担当している。II章でもふれたように、私たちの記憶をよみがえらせるのが反射エーテルの役割である。そしてこの四つのエーテルは、はっきり分かれているのではなく、互いに浸透しあっているものだ。

ポイント3——肉体は進化のための実験室

三番目のポイントは肉体である。これが私たちに与えられた実験室であり、これがなければ進化のためのワークを行なうことができない。

肉体は物質の中でも最も凝縮した物質でできている。進化のためのワークとは、この凝縮し

た物質を洗練し、さらに洗練して、螺旋状に上昇していくことである。

そしてまた肉体は、地球に属しているものだ。いずれ土に帰してしまふ。しかし肉眼でよく見えるものだから、私たちは肉体の世話をよくするし、あまりにも注意を払いすぎる傾向にある。その分、魂と霊がないがしろにされている。

この三つ、魂と霊と肉体の関係を簡単にいえば、肉体は霊の衣であり、霊は魂の衣の役目を果たしている。そして肉体の洗練と霊の洗練は二人三脚のようにともに進んでいかねばならないものである。これが成し遂げられれば魂は自由に解き放たれる。だから私たちは、目に見えない霊と魂にこそもう少し注意を払う必要があるのだ。

ポイント4——アストラル・トリップで運命を変えよ

四番目のポイントは運命である。

これは私たちの人生のプログラムのようなものだ。

私たち一人一人は、ある一定の運命を持って生まれてくる。手相で未来が予測できたり、占星術があたりたりするのはその証である。この運命の中に、カルマ（業）という私たちが払わなければならない借り、と、ダルマ（法）という私たちが受け取るべきものがある。

だが運命は絶対ではない。私たちにはそれを変えることができる一定量の自由がある。この

自由、このわずかな可能性を最大限に生かすことによって、まったく運命を変えてしまうこともできる。大きく飛躍して、高次へまで上昇することができるのだ。

その一つの方法がアストラル・トリップである。それによって自分の運命を、まず知ることができる。知ることができれば、変えることはそれほど困難ではない。まっ暗闇の中を手きぐりで歩いていくのと、行く手を照らす一条の光に導かれて歩くのではまったく違うのである。アストラル・トリップによって、あなたはその光を手に入れることができる。そしてその方法を教えるのが、光の知識である叡知なのだ。

たとえば、この本をあなたが読まない可能性もあったと思う。というのは、アストラル・トリップといっても信じられない人もいるだろうし、書店には他にも雑誌やコミック、小説など面白そうな本がたくさん並んでいるからだ。

だからこの本が置いてあるのを見ても、手にとろうとしない人もいる。手にとったとしても、パラパラと見て、すぐ元に戻してしまふ人もいるだろう。けれどもあなたは今、この本を手にして読んでいる。そしてこの一冊の本で、あなたの人生がまるつきり違ったものになるのだ。それが、わずかにある自由を生かした、ということである。

アストラル・トリップを練習し、洗練していくことによって、その自由はもっともっとと拡大されていく。さらに性エネルギーを昇華して、そのパワフルなエネルギーを内的創造やエゴ

の絶滅に向けていくならば、その自由は無限に広がっていくのである。それが運命を変えろということだ。反対にそういった働きかけがなく、ただ日常生活に流されていくだけならば、私たちはつねに運命の犠牲者である。

ポイント5——魂を侵すエゴを追放せよ

そして五番目に私たちに与えられるもの、これがエゴである。たいへん強いエネルギーを持つもので、一生を通じて私たちが起こす問題の根源がこれである。そしてまた、何度転生を繰り返しても問題となるものなのだ。

エゴは魂に属するものではない。だから神聖な創造物ではない。では誰が創造したのかというと、とりもなおさず私たち自身が創ったものだ。そればかりではなく、大事に育て栄養を与え続けているのだ。何回もの転生の間中、そうやって育ててきたエゴは、今となってはたいへん強大な力を持つようになっている。

このエゴにはたくさん種類がある。そしてこれら各々のエゴが、われがちに自己主張をしているのが、実は私たちの状態だ。そしてある時は、たくさんあるうちのひとつのエゴが全体を支配することもある。

たとえばパチンコ好きのエゴがその人を支配すると、毎日毎日パチンコに行つて、他のこと

は何もしなくなる。頭の中はパチンコの打ちかたや玉のよく出る店のことでいっぱいだ。それがその人にとって、たいへん強いエネルギーだからである。

しかしパチンコをやっている、隣の台に美人が坐ると、パッチリと目が開く。肉欲のエゴがパチンコのエゴにとって代わったからで、その瞬間から肉欲のエゴが彼を支配しはじめる。パチンコより隣の美女に心を奪われるわけだ。そして美女がパチンコをやめて出ていくと、そのあとを追いかけていく。

何とかしてお茶にでも誘おうと、頭はかつてないほどまぐるしく回転している。ところが美女に気をとられていたものだから、自転車が来るのに気がつかずぶつかってしまった。すると今度は、あまりの痛さに、怒りのエゴが体中を支配して肉欲のエゴを追い出してしまふ。あれほど頭にあった美女のことなどすっかり忘れて、怒り狂って自転車に乗っていた人とけんかを始めた。

と、こんなふうに、私たちは人生の「瞬間瞬間」をエゴの奴隷として生きているのである。そしてこの「パチンコのエゴ」や「肉欲のエゴ」「怒りのエゴ」などを、自分自身だと勘違いしているのである。

たとえばこんなこともあるだろう。

あなたがテレビ大好き人間だとする。歌番組やドラマ、クイズなど次々に展開される画面を



欲望の攻撃の中でも冷静にいるブッダ(川崎大師)

だがある日、そのボーイフレンドが他の女の子と親し気に話しながら歩いているのを目撃する。するとあなたは、今までのウキウキした気分から一転して、奈落の底へ転落したような衝撃をうける。もうその二人の姿が目にはやきついて離れず、心は嵐のようだ。肉欲のエゴが嫉妬のエゴにとって代わったからだ。

私ってこんなに嫉妬深かったのかしら、とそのあまりの激情に驚き、とまどいながらも、心は地獄のような苦しみを受けている。

これがエゴである。

あなたはたぶん、エゴを自分自身であることと取り違えて苦しんだことがあると思う。しかし本当のあなたは、純粋なエッセンスをもった魂なのである。その魂がエゴにがんじがらめにされているのだ。だから、あなたがやらねばならないことは、エゴをやっ

見ていると楽しいし、心が安まる気さえする。そしてマッチや聖子ちゃんがまるで友だちみたいに感じられる。すなわちテレビ好きのエゴがあなたを支配しているのだ。そしてあなた自身も、

「私はテレビが大好きな女の子なんだわ」

と、思っている。エゴと自分を同一視しているわけである。

しかしある日、あなたにボーイフレンドができた。憧れていた男子生徒に、突然交際を申しこまれたのである。するとあなたの頭の中は彼のことでいっぱいになり、もうテレビを見てもちっとも面白く思わない。あんなのガキが見るものだわ、などという気持ちさえ起こる。

そして今までテレビの前ですごした時間を、今度は自分の部屋で、ボーイフレンドのことをあれこれ考えながらすごすようになる。すなわちテレビ好きのエゴがひっこみ、肉欲のエゴがそれにとって代わったのである。

「こんどのデートには何を着ていこうかしら」

「突然キスされたらどうしよう」

などと、あれこれ考えたり、空想したりして、

「私って意外と女の子らしいのね。だんなさまにつくすタイプかしら」

と、またも肉欲のエゴと自分自身を同一人物だと思いこんでいる。

つけて魂を自由に解き放ち、本当の自由を手に入れることである。

パーソナリティーのエネルギーは死後「幽霊」となる

テレビ好きのエゴをやったのなら、もうテレビに誘惑されることはない。自分の魂の栄養となる、よい番組だけを選んで見るだろう。肉欲のエゴをやったければ、ボーイフレンドだけに心を占領されることはない。自分を磨きながら、彼との間に本当の愛を育てることが出来る。また嫉妬のエゴをやったければ、彼が他の女の子と話をしても何とも思わなくなる。彼を自分の所有物としてみる狭い心から解放されるのである。

こんなふうに、エゴを一つやっつければ、その分だけあなたは自由になれる。そしてその自由を多くすればするほど、あなたの心は軽くなり、高次へと昇っていきけるのである。それが進化することだ。

そしてまた、これらの例から、あなたにはエゴがどのように表現されるかもお分かりになっただろう。エゴはパーソナリティーを通して表面化するのである。逆から見れば、パーソナリティーを通して表面化する欲望の源泉がエゴなのである。あなたが、私はこんな性格なんだわ、と思っているその性格が、実はエゴの表現なのだ。

パーソナリティーも、だから一つのエネルギーである。私たちが生まれたときから形成され

はじめる。環境や家族、学校などの影響で形づくられ、人間のもっとも表面的な行動や雰囲気をつかさどる。いわば私たちが着ているいちばん外側のカラのようなものだ。

これは年月がたつうちに強くなっていくエネルギーで、七年間で一つのパーソナリティーを形成する。自分の住んでいる環境の中で、一瞬一瞬の経験によって形づくられていくものだから、よい環境を選ぶことが大切だ。

パーソナリティーを通して、私たちの好みや欲望が表現されていく。そして欲望は、それぞれ習慣をつくっていく。むろんよい習慣もあるし、悪い習慣もある。病院にボランティアに行くという習慣を持つこともできるし、ディスコへ踊りに行くという習慣を持つこともできる。

そして、パーソナリティーを形成するこれらのものは、一つのエネルギーとして体のようなものを形づくっている。このエネルギーが、肉体の死後、いわゆる「幽霊」となるものである。肉体を火葬にした後にも、すぐには消えないで残っているもので、その人の開発したパーソナリティーの強さによって、残る期間が異なる。少しづつ宇宙の土ぼこりとなって消え去っていくものだが、この世への執着や未練の強さゆえに、かなり長く残っているものもある。幽霊の中に三百年前に死んだ人もいるし、千年前に死んだ人もいるのはそのためだ。

また霊媒たちが呼びだすのも、往々にしてこのパーソナリティーのエネルギーである幽霊なのだ。

エゴはあなたの内部の最大の敵

エゴは手強い敵である。そしてとてもずるがしこい。

エゴはさまざまな大義名文や言いわけをもって、私たちを支配しようとする。欲望を正義と言いくるめることなど、エゴにとってはたやすいことだ。

「正義のために戦うぞ！」

といって、人を殺す。

「この主義こそ正しいのだ。人類全員がこの主義に従うことで、世界は平和になる！」

といって戦争をし、人を殺す。

どんな大義名文をもとうが、人殺しは人殺しである。やった行為に言いわけなど成り立つものではない。

人類が抱えるすべての問題の根源は、このエゴにある。

人々は外的には多くの戦いをする。仕事場で、学校や塾で、それらの戦いは繰りひろげられる。あるいは家庭の中にも、ひっきりなしの小さな戦いがあるだろう。

しかし本当の戦いは、私たちの内で行なわなければならないものだ。自分のエゴとの内的な戦いを勇敢に行なうことこそ重要なのである。それを実行すれば、外的な戦いはなくなる。も

しあったとしても、取るに足らぬものとなる。夫婦は円満になり、職場も働きやすく、人々は助けあって生活し、社会はよい方向へと向かい始める。

しかしエゴが存在している間は、誰も幸福であるとはいえない。エゴは私たちのエネルギーを吸収して生きている寄生虫だからだ。

このエゴのエネルギーは、肉体が火葬された後も残り続ける。パーソナリティーのエネルギーのように消え去ってしまうものではない。複数化したエゴ、一つ一つが「私自身」というこの怪物は、霊と磁氣的に結びついて、もう一度肉体が与えられるまで四次元で待つのである。そして死後のプロセスを終え、また肉体をもって生まれてきた私たちの中に入りこむのだ。

今、私たちがもっている多くのエゴは、そうやってずっといっしょに転生しつづけてきたものだ。だからとても強くなっている。私たちが自分自身とエゴを同一人物だと思ってしまうのも、無理はないのである。

けれどもエゴは永遠の存在ではない。私たちが創ってきたものだから、私たちの手で葬り去ることができる。

力強く光を求めている日本人

毎年二月に日本で行なわれる豆まきは、このエゴの絶滅を象徴した行事である。



魔衆の攻撃・ラホール博物館蔵・田中学而撮影

か
し
い
こ
と
だ
と
言
わ
ね
ば
な
ら
な
い。
こ
う
し
た
エ
ゴ
に
つ
い
て
表
現
し
伝
え
て
い
る
も
の
は、
先
に
あ
げ
た
も
の
以
外
に
も
見
つ
け
る
こ
と
が
で
き
る。
イ
ニ
シ
エ
イ
ト
ち
は、
光
を
求
め
る
人
々
に
伝
え
る
た
め
に、
象
徴
的
な
方
法
で
そ
の
こ
と
を
表
わ
し、
遺
し
て
い

エゴは私たちがどうなろうと斟酌^{しんさく}しない。大食のエゴは、私たちの胃が悪くなろうと太りすぎて心臓に負担がかかろうと、おかまいなしである。酒好きのエゴは、アル中になって廃人同様になろうが、知らん顔で酒を飲み続ける。
そして、死後、法の審判の前に立たされたとき、私たちが生きている間にやってきたことを言いたて、並べあげるのは、このエゴたちなのだ。言いなりになっているのはまったく言わね

また先日、東京・池袋の西武美術館で行なわれた「パキスタン・ガンダーラ美術展」にも、エゴを表現したレリーフが展示されていた。「魔衆の攻撃」と題されていたが、これは釈尊の修行中に多くの悪魔たちが攻撃をしかけた様子を表現したものである。釈尊の伝記の中では「降魔成道」といわれているシーンだ。
次頁のレリーフは二世紀ごろに彫られたもので、降魔成道を表現したもの的一部分である。写真を見ればお分かりのように、いずれも醜い。そして手に武器を持っている。これがエゴである。私たちに、これらの醜い怪物どもがベッタリと付着しているのである。そして絶え間なくサイキスに向かって、
「罪を犯せ！ 罪を犯せ！ 罪を犯せ！」
と、けしかけている。
私たちの弱点を知りぬいているから、いろいろな手を使って誘惑しようとする。
そしてたいへん残念なことに、人々はこの怪物の言いなりになっているのだ。しかもその存在にさえも気づかないで、エネルギーを吸いとられていく。

家中に豆をまいて、エゴの象徴である鬼を追い出そうとする。しかし、鬼は、いつこうに家から出て行くとうとしない。そこが彼らの住み家だからだ。鬼は私たちの内に住んでいるのである。

るからだ。

光を求め、人生の意味を問い続けている人は、たいへん注意深い。自分の内にいつも「なぜ? なぜ?」と問いを発し続けているからだ。だから答を見つけることができる。ふつうの人なら何の気なしに見て、そのまま通りすぎてしまうところを、彼らは立ちどまって、その表現が自分の問いに対する何らかのヒントになるのではないかと考えるからである。

前に、古代の遺跡や仏像などは教科書のようなものだと言ったが、それはこういうことなのだ。そして同じ仏像を見るにしても、自分の段階があるにつれて、さらに多くの神祕を読みとることができるようになるのである。

日本には今、世界中からさまざまな古代の文化遺産が集まってきている。エジプトから、インドから、中国から……、そしてどの展覧会も盛況だ。私はそんな日本の人々を見ると、たいへん力強く思う。人々が光を求めていると感じるからである。

進化のプロセスの三要素

五つのポイントについてお分かりいただけただろうか。魂・霊（心理）・肉体・運命・エゴ、の五つである。これらの関係をもっと分かりやすくいうと、こういうことだ。
私たちの肉体を一つの箱のようなものと仮定する。

するとまず最初に、その箱の中にスピリット（魂）が与えられた。
次に心理が与えられた。
さらに運命が与えられた。

最後にエゴが与えられて、この箱（つまり肉体）は私たち個人となった。

こうして生まれた私たちの人生は、どんな国の、どんな環境に、どんなふうに生まれていようと、進化を遂げるという目標に変わりはない。たとえ支配階級に生まれようと、庶民に生まれようと、すべての人の目標は精神的進化にある。この肉体を持ったチャンスを最大限に生かして、精神的進化のための道を着実に歩んでいくことだ。

精神的進化のプロセスは、これまでにみてきたことをまとめると、三つの要素にしばらくすることができる。

すなわち、

性エネルギーの昇華

エゴの根絶

人類のための献身

この三つである。

そしてこれらは、各々が独立してあるのではなく、互いに深く関連しあっている。

アストラル・トリップはこの三つのワークを成し遂げるための大きな助けとなる。というのは、そのための具体的な方法は、アストラル・トリップによって、より明確に示されるからだ。また、どちらの道が自分を進化に導くだろうと迷うときにも、アストラル・トリップによって解答を得ることができる。キーを示して、私たちの行く手を指示してくれるのだ。

大切なのは、アストラル・プロジェクトションをあきらめることなく訓練することである。そして広大なアストラル界に出て、多くのことを学び、実生活に役立てていくのだ。そうすることで、あなたの運命はまったく変わっていくだろう。

しかしつねに、進化のためのアストラル・トリップだということを忘れてはならない。そうでないと、大きな誤りを犯す危険がある。アストラル・トリップでお金儲けもできるし、きれいな女性を誘惑することもできる。明日行なわれる予定の試験問題を知ることでもできるからだ。あくまでも精神的進化に役立てるためのアストラル・トリップということを、決して忘れてはならない。

いま人類は転生のラストチャンスにいる

さてここで、私はたいへん重要なことをお伝えしなければならない。

それは、現在地上に生きている人たちは、全員、最後か、または最後から二番目の転生を生

きているということだ。三十二万四千回あった転生の、いちばん最後か、または最後から二番目の人生である。あなたも私も、そしてあなたの周囲の人々もすべて、そうなのだ。

だからすでに、多くの人々が退化の過程を下降し始めている。

生まれたときから尻尾のある子供、毛むくじゃらで生まれる子供、乳房が六つもある女性……、彼らの肉体は、すぐに現代医学の手術によって矯正されてしまうが、しかしその現象は、あきらかに動物界に入るための一つの準備をしている段階と言っている。

そしてまた、人々の目をおおわんばかりの退廃ぶりを見ても、現人類が終末に近づいていることは理解できるだろう。

週刊誌がぎょうぎょうしく書きたてるニュースのどぎつさ、売るためなら何でもするという態度、マスコミやペンを握る人たちは誇りをすっかり失っている。それを買って読むほうも、より強い刺激を求めるものだから、双方のサイキスの汚さで、記事の内容がどんどん落ちていく。

ホモセクシュアルの人の数もふえた。男女がしてこそ意味がある神聖な結婚を、男同士でやっている。これは退廃以外の何ものでもない。また男女の結婚も、離婚がふえていることから推測できるように、その本来の意味が忘れられている。結婚は男女の協力によってエゴをやっつけるという目的をもっているものだが、今では逆にエゴの言いなりになってしまっている。

そして私たちの地球の汚染ぶりはどうだろう。農業や化学肥料の使いすぎで土地はやせつつあるし、多くの緑地がどんどん砂漠化していつている。かつてジャングルであった場所が、今では草一本生えないという砂漠となった。

核兵器の数は増える一方だし、人を殺すための能率的な方法についても熱心に研究されている。国相互の信頼関係は育たず、利害関係が優先している。

人工受精、人工中絶、生体実験と、医学の分野でも退廃ははなはだしい。性と生の本当の意味を知らないで行なっている諸々のことは、私をぞっとさせずにはおかない。

数えはじめたらキリがない。人間の手で行なってきたことのあまりのひどい結果に、目をおおいたくなる。自分は関係ない、それに直接手をかしていないのだから、という言いわけは成り立たない。直接手をかしていなくても、それらをとどめる努力をしていないのなら、同じことだ。この世界に起こっていることは、私たち人間の心理の表現であるという現実を忘れてはならない。人間がメンタリーにそんな要素をもっているからこそ、社会は惨状を呈しているのである。

あなたは今、肉体をもつてそこにいる。もうラスト・チャンスである。今生で高次へと上昇する努力をしなければ、死後、強制的な洗浄をしなければならぬ。そしてそれが終わっても、もう人間の肉体は与えられない。宇宙の原子の一つとして、永遠の時をすごすのである。

しかし高次へと上昇すれば、私たちの前には無限の可能性が広がっている。現人類はやがて滅びてしまうだろうが、その次の人類の種人となることもできる。もちろん高次での生活もある。

現在はアクエリアスの時代、光の時代である。その意味は、すべての神秘に光があてられ、私たちの前に明らかにされるとのことだ。これまでイニシエイトにだけ明かされた神秘が、すべての人々の前に明らかにされていく。

それは、もう最後の時代だからだ。そのためどんな人にも平等に、進化のためのキーが与えられる。それを生かすかどうかはその人の自由だ。しかし死後、法の審判の前に立たされたとき、知りませんでした、という言いわけは成り立たない。チャンスは目の前にあったのにそれを生かさなかったのは本人の責任だからだ。

次章ではアストラル・トリップのための具体的なテクニックをご紹介します。これも光があられた神秘の一つである。チャンスを生かすために、ぜひとも実行してほしいと思う。

VI

異次元の扉を開く
9つの秘法





チチェンインツァ・戦士の神殿

肉体と精神のバランスある進化のために

足がしびれたときの、くすぐったいような感覚を覚えているだろうか。なぜ、そんな感覚があるのだろうか。

医者に聞くと、それは血液の循環が悪くなったからだと答える。しかし、しびれを直す方法として、自分のつばで足に十字を切る、というやりかたがある。これで確かにしびれはなくなる。では、つばで十字を切ることで血の循環がよくなったのだろうか。もう少し他の意味がありそうではないか。

スペイン語では足がしびれることを「足が眠る」という。眠るとは、ご存知のように、アストラル体が外に出ることだ。すなわち、足がしびれているときは、足の部分のアストラル体が外に出ているのである。そしてそれが元に戻るときに、くすぐったい感じがある。ぴったり元に戻れば、くすぐったい感じはなくなる。

このくすぐったい感覚が、アストラル体が肉体から離れる時の感覚である。この感覚をよく覚えておくことだ。

この場合は、足につばで十字を切ることで、アストラル体は瞬間的に元に戻る。あまりにも早いスピードだから、くすぐったく感じる暇はない。十字のシンボルとエネルギーであるつば

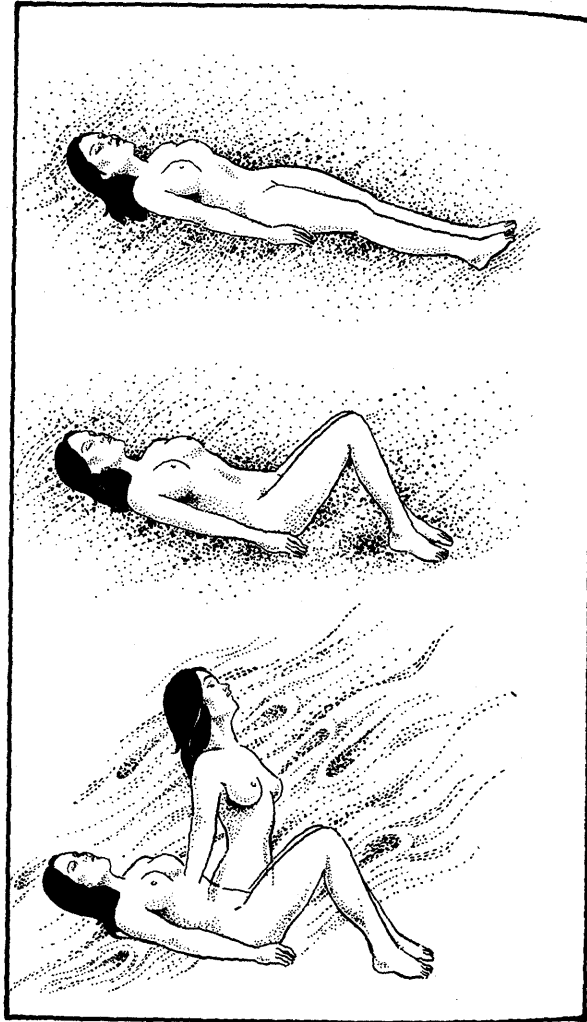
の働きで、それができるのである。

アストラル・トリップなんて自分には遠い世界のことだ、と感じている人も多いと思うが、私たちはこのように、日常生活の中でその片鱗を体験しているのである。

さて、アストラル・プロジェクションには無数の手段とシステムがある。その中から、私自身が体験し有効だったテクニクを、これから紹介していく。

必ずしも、すべてのテクニクをマスターする必要はない。一応ひとつおり実行してみても、自分に適したものを選び、それを洗練していけばよい。

アストラル・プロジェクション、アストラル・トリップは、私たちのノーマルな機能であり、その目的は肉体と精神のバランスある進化を成し遂げることにある。それでは早速、あなたも進化への第一ス



テップをのぼってみよう。

秘法1 大切なアストラル・トリップの感覚

① まず、上向きに寝る。頭はどちら向きでもかまわないが、北向きになると地磁気を利用できるので、さらに容易になる。また上弦の月（新月から満月まで）の時期は、月の磁気エネルギーの助けもある。

② ひざを立てて、足で三角を作る。目を閉じて眠気をもよおさせる。しかし、すっかり眠ってしまったはいけない。こうした条件を楽に作るためには、初めのうちはこれから寝ようとする時に練習するのがいいだろう。

③ そして次のようなマントラを唱える。何度くり返す。

ファ－ラー オーン

④ 雑念が入るのを防ぐため、大きなピラミッドを自分の体の上に想像する。そうすると、いろいろなことが起こる可能性がある。たとえば、ジェット機のようなツーンと細く高い金属音が聞こえたり、体の一部にかゆみというか、くすぐったいような感じを覚える時もある。

これは体の振動数が変わっていくからであり、アストラル体が肉体から離れはじめているからでもある。だからまちがっても、ボリボリ掻いたりしてはいけない。掻くことによって、ア

ストラル体は再び肉体に戻ってしまい、最初からすべてをやり直さなければならなくなる。

また、風船のように大きく大きくふくれる感じがあるかもしれない。または、まったく何も感じないのに、自分の肉体から離れているもう一人の自分を見たりする。

⑤ さてここでアストラル・プロジェクションを成功に導くために重要なのは、半分眠っていないながら、このようなきざしを感じた時、ふとんだりベッドから起き上がることである。しかも、目を覚まさずに、である。

⑥ ここで「起き上がる」というのは、本当に起き上がることをさす。起き上がると考えるのではなく、物理的に行動することである。

⑦ そのようにして起き上がってみると、あなたはすでに空中に浮いていたり、また起き上がった自分のそばに横たわっている自分の肉体を見たりする。

⑧ こうした肉体からのアストラル体の離脱は、まったく自然に起こることであり、私たちがしなければならぬのは、起き上がることで、それだけである。

⑨ ポイントは、起き上がるその瞬間をのがさないことだ。

眠っている間にトイレに行きたくなり、半分眠ったまま起き上がる。そしてトイレに行ったつもりが、実はふとんの中がぐっしょり——、こんなかたちで、あなたも起き上がる瞬間、すなわち分離する瞬間については体験済みなのだ。

秘法2 性エネルギーをアストラル体へ向ける

アストラル体のプロジェクション（投影）は、つねに大脳の松果腺を通して行なわれる。つまり、いつも頭から出て頭から入ることだ。それはものすごい速さでなされるため、自覚することは少ない。

意識した時には、すでに肉体の横にいたり、浮かんでいたりと、また遠い所にいたりするが、とにかく私たちの脳は、すべての出入りを、出入国管理事務所のように記録している。

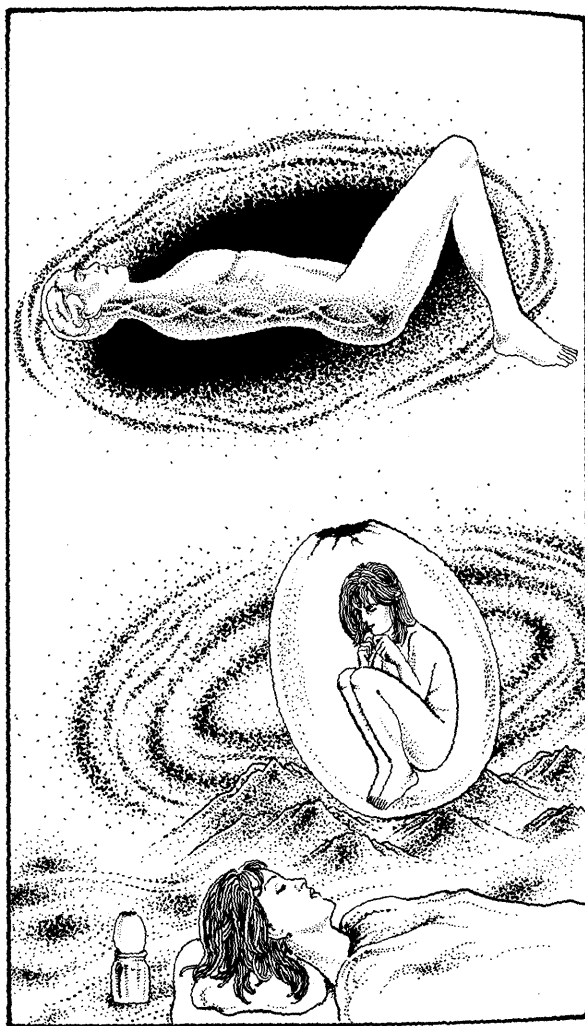
この松果腺は、私たちの性エネルギー、性ホルモンと密接な関係がある。したがって、私たちの性エネルギーを上昇させ、松果腺へ、さらにアストラル体へと方向づけることが可能である。それは以下の順序で行なう。

① 秘法1と同じように寝て、ひざを立てる。眠気をもよおしてきたら、次のようなマントラを唱える。

ラー(LA) ラー(RA)

ラー(LA)は女性ホルモンと、ラー(RA)は男性ホルモンと共振する。

私たちは性別にかかわらずこの二つのホルモンを持ち、男女の違いはそのバランスだけである。発音は英語のL、Rと同じ要領で行なえばよい。



② 眠気を感じながらこの振動バイブレーションを発音している間、背骨を私たちの創造エネルギーが上昇する様子を、ありありと想像する必要がある。

それは光（または電光）が、らせん形（またはジグザグ形）をとりながら、私たちの性腺の高さにある背骨（尾椎骨から四番目の仙骨）の位置から、脳にある松果腺まで上昇するさまである。練習を重ねるにつれて、想像力は強くなる。

③ そして、ほとんど眠ってしまうそのちょっと前、秘法1で説明したように起き上がる。そのときには、上昇している性エネルギーの力を利用して、アストラル体を押し上げるつもりで行なうと、うまくいくはずである。

秘法3 卵の宇宙カプセルで時空を飛翔する

準備するのはニワトリの卵一個である。これを熱湯で少しだけ温める。次にてっぺんに小さな穴をあけ、その穴から中身を全部取り出す。そうしてカラだけを残し、太陽でこのカラを乾燥させる。完全に乾いたら、空色の絵具でこのカラに色を塗る。

① 眠る前に、この青い卵のカラを枕元に置く。何かをあてておかないように、また穴が上を向くようにしておく。

② 秘法1と同じように寝る。そして、次のマントラを唱える。

ハール ポー クラー ティース

ハール ポー クラー ティース

ハール ポー クラー ティース

このマントラは、何千年も前、エジプトのピラミッドでこの種の秘術を教えた人物の名である。彼はいまだに高次の世界に生き続け、アストラル体で意識を持って旅したいという希望者を、教え導く。

③ さて、そろそろ眠ってしまうというころ、次のように言う。これは声をださなくても、強く念じるだけで十分である。

ハルポクラティス、オシリスの名において

私のアストラル体の離脱を助けたまえ

オシリスとは古代エジプトの神だが、これを三回くり返す。

④ そして枕もとの卵の穴から、体を小さくして入り、胎児のように体を丸くしておさまることを強く想像する。

⑤ 卵の中にいる感覚をすっかり覚えたら、卵を宇宙カプセルに見立てて、いざ、見知らぬ国々や宇宙への旅に出発しよう。

この宇宙カプセルに乗って過去の世界へ行き、テレビを見るように私たちの前生を見たり、また、未来の世界へ行って、近い将来何が起こるかをすることも可能である。

⑥ 旅から帰ってきたら、ハートに意識を集中し、このすばらしい体験のために助力してくれたことを、ハルポクラティスに感謝しよう。

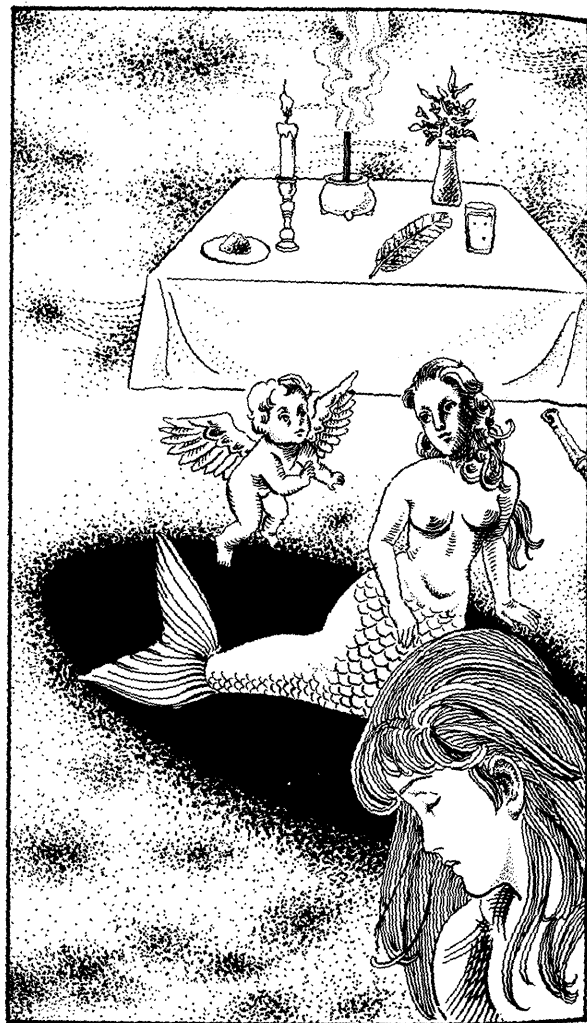
秘法4 自然界に宿る妖精の力を借りる

ここまで読み進んでくれば、読者にもアストラル・プロジェクトの性質がほぼわかってきたことと思う。そこで明白にしておきたいのだが、自然の中には知性（インテリジェンス）があり、それぞれの要素の中に、たとえば風や雨を、またわれわれにはごく自然に起こることのように見える現象のすべてをコーディネートする精が存在する。

たとえば火の中には、サラマンドラと呼ばれる小さなバツタとトカゲの中間のような精が住んでいるし、水には水の精（これはサイズも色も異なった人魚たち）、空気（風）には風の精、土には地表で働くノーム（小人）たちと、土中で鉱物・金属を担当するノームたちがいる。

これらの精たちは四次元の住人であり、肉眼では見えない。しかし幼い頃、庭の小人たちと遊んだことがある人もいるだろうし、またおとなになっても超常視覚があれば当然見える。

こうした精たちを使うには、儀式が必要だ。そこで、まず準備するのは、



- 白いテーブルクロス
ローソク一本
水の入ったコップ
大空を飛ぶ鳥の羽一本（ワシ、タカなどの羽が理想的。なければハトでも可）
皿に少量の土を盛ったもの
香（線香）
七つの節を持つ竹の棒
季節の花
- である。準備ができたら儀式をはじめめる。
- ① 香をたき、ローソクに火をつけ、寝床の横にひざまずく。そして次の言葉を唱える。
万物が幸福でありますように
万物が幸運でありますように
万物が平和でありますように
以上を三回くり返す。
アー オー ムー
これも三回くり返す。

② 次にローソクの炎にむかって、次のマントラを唱えてサラマンドラ（火の精）を呼ぶ。

ミカエル 太陽と光線の王

サマエル 火山の王

アナエル アストラルの光の王子

インリーの名において われを助けたまえ

サラマンドラよ

アグニ（火の神）の名において

ここに来たまえ

③ 次に七つの節の竹の棒を右手に握り、杖のように立てて、次のマントラで土の精に働きかける。

聖なる都の12の石

地中に隠されたタリズマン

地球をつらぬく磁石のくぎ

ノームたちよ ここに来たれ

ゴッブの名において

われを助けたまえ

ゴッブ シャム ハム

⑤ 最後に水の入ったゴッブを右手に持ち、水に意識を集中して言う。

ファイアット フィルマメントウム イン メディオ アクアルム エト セバレ アクア

ス アブ アキス／クアエ スーペリウス シクート クアエ インフェリウス／エト

クアエ インフェリウス シクート クアエ スーペリウス／アド ペルペトランダ ミ

ラクラ レイウニウス／ソル エフス パーテル エスト／ルナ マーテル エト ヴェ

ントウス ハンク ヘスタヴィット イン ウーテロ スオ／アッセンディット アテ

ラ アド コエルム エト ルウルスウス ア コエロ インテラム デセンディッ

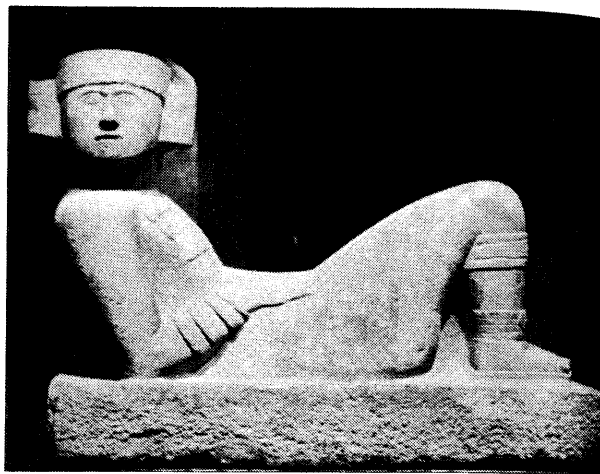
ト／エクソールシソ テクレアトゥア アクエ／ウト シス ミヒ スペクルム デイ

ヴィヴィ イン オペリブス エフス／エト フォン ヴィタエ／エト アブルーティ

オ ペカトオルム／アーメン

⑥ 少しでも超視覚のある人なら、もう部屋じゅうにノームたちや水の精（人魚）、火の精（サラマンドラ）を見るだろう。もし超視覚がなくても、そこにいるものと信じなさい。そして彼らにあいさつし、アストラル体で離脱するのを助けるように命令する。

これらの魔術的公式は、パワフルで神聖なものであり、この公式で呼ばれたら拒絶することではできないのである。



アストラル・プロジェクションのポーズをとる像（写真上下とも）
メキシコ国立人類考古学博物館

⑦ さてそこで、例のごとく眠気をもよおさせる（その前にローソクや線香の火の始末を忘れずに行なうこと）。
もう周囲には、小人たちがピョンピョン跳びはね、風の精たちも手助けしようと飛んでいる。彼らはあなたの手を引いて森の中へ行ったり、また、人魚たちとともに海底にまでも行くことができる。というのも、アストラル体は酸素を必要とする肉体と異なり、自由自在に海中深くもぐれるのである。

ここで一つ重要なポイントを明白にしておきたい。

すでに何度もいっているように、アストラル・トリップのあとはつねに肉体に還ってくる。しかし、小人たちや人魚たちといっしょにいる間は、それはそれは幸福で夢のような気分になり、美しい妖精たちに囲まれ、おとぎ話の中にいる錯覚に陥ってしまう。そうすると現実世界に戻りたくないと思う場合がある。

しかし、大切なのは、この地上の生活は回避できない責任であり、修行であるという認識である。だから一晩以上、肉体を放っておいてはいけない。というのも、アストラル体なしでは肉体は弱り始め、家族もあなたの目が覚めないのを心配するだろう。

毎晩のように小人や人魚たちと会い、彼らからいろいろなことを学ぶことはできる。たとえ

ば葉草の使いかた、治療の方法などである。またサラムンドラたちも、火事を防ぐ方法を教えてくれるだろうし、そのほかにも人間の中にある自然に関して習うことができる。

しかし、これらの体験は、あくまでも人生勉強の半分ではないということをお忘れしないことが大切である。あとの半分は日常生活の中で、社会の中で、物質的生活と直面しつつ行なうものなのである。私たちの肉体は素晴らしいラボラトリー（実験室）であり、それを利用していろいろなことを学ぶのである。

最後に、これらの儀式の公式は神聖なものであるで、遊び半分で使ったり、神聖さを冒瀆することのないように、くれぐれも注意しておきたいと思う。

秘法5 ピラミッド・パワーで叡知を知る

ピラミッドに集中するエネルギーに関してはよく知られているし、科学的にもその効果は立証されている。

ピラミッド内部には生命エネルギーが集中する。そしてアストラル界では聖なる寺院として形づくられる。それゆえ、ピラミッドを治療や瞑想の目的に使う人たちもある。

このすばらしいエネルギーを利用するには、まず簡単なピラミッドを準備する。

二〜三メートルの細い木の棒、または竹の棒を四本用意する。その上部を結んで、ピラミッ

ド型に下を開く、このとき、ピラミッドの底辺の一つが北を向くようにする。くぎや金属はエネルギーの進路を変えるので使わない。ピラミッドができたなら、さっそく訓練にとりかかる。

① 頭を北にして、上向きでピラミッドの中に寝る。そして次のマントラを何回も唱える。

タイレーレーレー

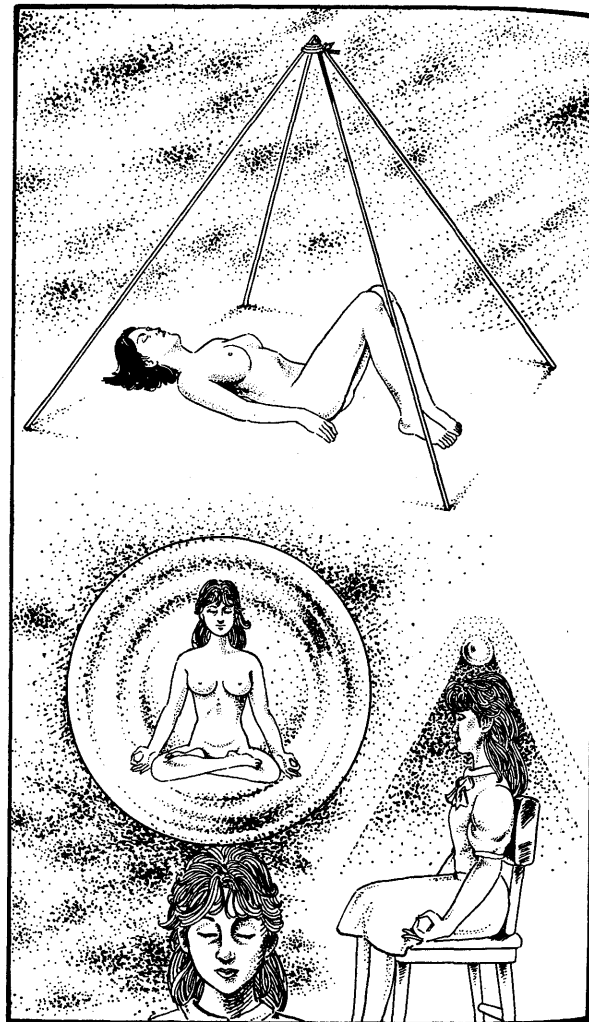
② 唱えながら、眠気をきそう。そうするといろいろなものが見えてくる。たとえば、竹の骨組みだけのピラミッドに黄金の壁が見えたり、またエジプトの象形文字らしきものが見えたりする。

③ そうなったら、完全に眠ってしまう一瞬前、秘法1のようにスッと起き上がる。うまくいけばその瞬間、アストラル体は肉体から離脱するはずである。そしてピラミッド内部を訪れて、そこに住むイニシエイトたちに、ファラオの神聖な叡知の教えを請うこともできるのである。

秘法6 瞑想を利用して泡の中に入る

アストラル・トリップは夜だけとは限らない。昼でも可能である。

ただポイントは、少し眠気のある半覚醒状態であるということである。したがって、瞑想状態のときには、この現象が起こることがしばしばある。だから、次のような方法を試してみる



のも効果的であろう。

① 床や椅子に、背骨をまっすぐにして坐り、肉体は完全にリラックスさせる。

② 次に『般若心経』の最後の部分、

羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提婆娑

を何度となくくり返す。

瞑想に入っても、少しの間は頭の中で唱え続ける。そしてだんだん深い瞑想に入っていく。

③ 次に、頭のとっぺんから泡が出ていくの思い浮かべる。そして自分のアストラル体が、松果腺を通して肉体の外に出、その泡の中に入るようすをありありと感じる。

④ 泡の中に入ったまま、宙に浮かび始める。部屋の中をふわりふわりと浮いている間、下に静かに瞑想している自分の肉体が見えるだろう。

⑤ なお、この訓練では『般若心経』のかわりに、こおろぎや鈴虫の鳴き声を録音したテープ（本物があれば、それにこしたことはない）を聞くのもよい。瞑想しながら、虫の声を頭の中で共振させるのである。

秘法7 猫科の動物と友だちになる

虎、ピューマ、猫などの猫科動物は、一般に動物としての感覚が非常に鋭敏である。

そのために古代エジプトでは、何万という数の猫をミイラにした。というのは、古代エジプト人は猫科動物のエネルギー的特性をよく知り、エジプトの土地にポジティブな磁気を保存しようとしたのである。また猫たちは、ある種の心理的独立心や優越性を持つ。

猫はまた予知力を持ち、暗闇の中ではつきり見ることができ、幽霊を見ることもできる。人間の肉眼では不可視とされる、一秒間十六振動以下の波長でも見えるからである。

猫科の動物と友だちになることは、こうした強力な盟友を得ることに等しい。猫と友情を持つてまじめに付き合えば、昼間はもちろん夜寝るとき、瞑想をするときなど、いっしょにいるよう習慣づけよう。

そして互いに信頼しあえるようになったら、猫とテレパシーを使って交信を試みる。猫の中にある魂に直接働きかけるつもりで行なう。そして、アストラル・トリップを実現するために手伝ってくれるよう頼むのである。

昼寝をしながらも、猫と無言のうちに意志を通じ合わせ、その状態を持続させる。眠気がやってきても、猫の魂に意識を集中し続け、体じゅうに繊細な細かい振動を感じるとき、猫がだんだん大きくなっていく。そうして自分と同じくらいの大きさになったら、目を覚さずに起き上がる。そうすると、いつの間にかアストラル体になっている。そこで四次元空間を猫といっしょに散歩するのである。

このことから、魔女たちがどうして黒猫を持っていたか分かると思う。彼女たちは猫の使い方をよく知っていて、その力を利用する術^{マジック}を心得ていたのである。

秘法8 内的な願望に照準を合わせる

子供たちの間によくあることだが、昼間母親と散歩などをしているときに、「アイスクリームを買って」「チョコレート、買って」とせがんでも、何かの理由で買ってもらえないと、欲望が満たされないまま残ることになる。

すると夜、食べたくても食べられなかったアイスクリームを、おいしそうに食べる夢を見ることがある。これは子供たちのアストラル体が、昼間、肉体がしたくてもできなかったことを、夜にするのである。

おもちゃ売り場などではよく見られる現象だが、朝になるとおもちゃの位置が昨日とまったく変わっていたりする。これも夜の間に、おもちゃを買ってもらえなかった子供たちが遊びに来たためなのである。

このように願望の感情を生かして、アストラル・トリップを行なうことができる。

寝る前に、心から行きたいと望んでいる場所や、会いたいと願う人を鮮明に思い起こす。ここで重要なのは、本当にその願望を強く念じることである。

たとえば、遠く離れた恋人に会いに行ったりするのは、無意識のうちにも感情が作用してよくあることだが、ここでは意図的に途中の道もはつきりと思い起こし、一步一步確実に歩いて行く。何かほかのことを考えてしまったら、もう一度歩きなおす。まわりの風景もはつきりに見えるくらい、意識を集中して行なう。

こうした練習を続けていると、そのうち、はっと気づくと、行きたかった場所にいる自分を発見することができる。願望が強ければ強いほど、その実現は早くなる。

秘法9 五つの体を次々に脱いでいく

① まず上向きに寝て、充分リラックスする。どこにも力をいれずにエネルギーを自由に流したら、三回深呼吸をする。

そのとき、空気が肺だけでなく、足先から頭まで体中にしみわたることを感じ、自分自身に向かつてゆっくりと次のように言う。

この肉体は私ではない

そうして、この皮膚の色の肉体の足先から頭までを、徐々に、肉の衣を脱ぐように思い浮かべていく。充分に集中し、ありありとその様子を見ることが必要である。

② 次に、

この生命体は私ではない

と自分に言い聞かせながら、同様に黄色に輝く生命体を、足先から頭まで徐々に脱いでいく。

③ 次に、

このアストラル体は私ではない

と自分に言って、白く輝くアストラル体を前と同じように脱いでいく。

④ 次に、

このメンタル体は私ではない

と言って、青く輝くメンタル体を脱ぎ、次に、

このコーザル体は私ではない

と言って、緑色に輝くコーザル体を脱いでいく。

⑤ 最後に

私は魂の本質、私は彼である

と自分に言う。

ここまでを充分に集中して実行してくると、体にバイブレーションや耳なりのような音、またはくすぐったい感じなどが生じるだろう。

こうして完全なリラックスの状態を保ちながら、眠るでもなく、かといって目を覚ますでも

ない微妙な半覚醒の瞬間に、起き上がり、空中に浮くつもりでジャンプするのである。そして本当に浮いているのなら、アストラル体でいることなので、その貴重な体験を精神的進化に生かすために、有意義な作動を試みよう。

もし、空中に浮かずに地上に落ちてしまう——すなわち肉体とアストラル体の分離ができなかったら、あきらめずにもう一度、最初から充分集中して秘法をくり返す。

しかし、つねに同じ秘法を使って機械的にくり返すのでは何の効果もないので、すでに述べた他の秘法と組合せて訓練を続ける。

重要なのは、つねに意識をもって、成功の日まで決して失望せずに根気よく練習することである。そうすれば、ある日、ハタと気づくと、時空を超越した四次元に浸透している自分を自覚するだろう。

アストラル界に在ることを確認する方法

アストラル・プロジェクトの練習をしているとよくあることだが、起き上がるつもりで横になったのに、眠気に負けてしまい、本当に眠ってしまうことがある。

ところが、アストラル・プロジェクトをする意図があつたために、夢の中で、「これは夢の中にいるのだ」

という意識が目覚めることがある。

そういった時、自分がアストラル界に在ることを確認する次のような方法がある。

〈1〉 自分自身に「私はアストラル界に在るのだろうか」と問う。そして思いきり空中に浮くつもりで、高くジャンプするのである。床に落ちることなく浮いているのなら、これは肉体を離脱したアストラル体であり、その意識があることを意味する。

〈2〉 夢の中だと気づいたら、自分の掌^{てのひら}を見るか、指の一本を引っ張ってみる。チューイングガムのように長く伸びるだろう。

私たちのアストラル体はゴムのように弾力があり、肉体のように凝縮された物質ではないからである。だから指が伸びたからといって、心配する必要はない。アストラル体の細胞記憶によって、またもとのように指は縮む。

さて、こうした体験によって、肉体から離脱したアストラル体の実体を知ることができ。そうしたらアストラル界の探険に勇んで出かけよう。

また、朝の目覚めの前に意識を持つことがよくある。まだ眠っているのに、すでに自分の意識に気づく場合である。もしそういうことがあつたら、次のような実験を試みよう。夢と現実を見分けることができるだろう。

〈3〉 たとえば、だれかと車の中にいる夢を見ているとしよう。そうしたとき、その車から

離れて、これは夢である、という意識をはっきりさせる。すると夢の中のイメージは、煙のようにみるみる消えていく。

また崖から落ちたり、暗い所に閉じこめられたりするとき、これは夢である、という意識を持ち、自分の行きたいと思う場所を強く念じる。それだけで、次の瞬間にはその場所に現われることができる。

アストラル界で攻撃された時

アストラル・トリップの体験を重ねるにつれて、その実態のさまざまな側面が分かってくるだろう。

ここでアストラル・トリップ中に何らかの攻撃を受けた場合の、防御法を説明しておこう。夢やアストラル・トリップの中で、人に追われたりすることはよくある。その間、冷や汗をかいて、必死に足をバタつかせたりする。

そんな時はヘタに逃げないですぐに止まり、追手に向かって両腕・両足を開いて星の形（ペンタグラム）をつくる。そして、

この力の星の前では、だれも何もできはしな
いと言え。

または高次からの援助を願うのもいい。苦しかったり、どうしていいかわからないほど追いつめられたときは、

第三ロゴスの名において、高次の霊たち、お助けください

と願うだけで、すぐに援助がやってくるから試してほしい。

次にアストラル界で、歯をむき出して襲ってくる犬や、蜘蛛、さそりなどの攻撃にあった時は、まず第一にこわがらないこと。そして、右手の親指、人差指、中指を伸ばし（他の二本の指は折って）、指の先から火のような光線を発射する気持で、

SSSSSS

と唱える（これは口を横に開き、歯の間から強く息を吐く音。スーとは違う）。すると、敵は消えてしまう。

こうした攻撃以外にも、アストラル界では多くの誘惑に出会うから充分な注意が必要である。もし地球上で誘惑に負けてしまう人なら、アストラル界でも同じように負けてしまうだろう。負けるということは、肉体と精神の両方が退化していることになる。

だからアストラル界の悪の場所に不必要に近づいたりせず、つねに光と叡知の寺院に行くようにこころがけることである。

アストラル・トリップの記憶再現法

夢やアストラル界での体験をはっきりと思い出せない時は、記憶を呼び戻す方法がある。

そのためにはまず、夢やアストラル界での体験の重要性を理解する必要がある。それは私たちの潜在意識の中で起こることを表わしているから、アストラル・トリップの記憶がないということは、たとえばどこかに旅行したとき、目隠しや耳栓をして行ってきたようなものである。これほど無意味なことはない。

だから、夜、床に就く時から、思い出そう、覚えていようと強く念じる。まず、そこから始めよう。思い出そうが忘れようが、それらは私たちの行動の一部には違いないのだから、私たちの責任なのである。

とにかく目覚めたとき、何の夢を見ていたか、に注意を向けることが重要である。そして、はっきりした記憶がないのなら、次のマントラを三回、ゆっくり唱える。

ラー・オム、ガー・オム (RA-OM, GA-OM)

もし他の人の迷惑になるようだったら、声を出さずに頭の中で唱えてもいい。

この時、肉体を動かしてはいけない。動くとも脳の成分がまざり合い、イメージが消え失せてしまうからである。

唱え終わって静かにしていると、最後に見ていた夢のイメージが現われるだろう。そうしたら記憶にはっきりと刻み、書きとめる。あるいは枕元にあらかじめテープレコーダを用意しておいて、録音するのも一案である。

このマントラはまた、記憶を促進する振動でもある。毎日、一〇〜一五分唱えることによって、記憶をよくする効果を持つ。さらに能力を開発すれば、前生を思い起こすことも可能である。

アストラル・トリップで高次元へ飛翔

アストラル界で重要なのは、思考、テレパシー、直観力である。すでにいままで述べた秘法を使って、アストラル・トリップに成功した人なら、それはもう充分お分かりだと思う。また、そこでの意志疎通はシンボリックなものだと感じたと思う。

たとえば、アストラル界での宇宙の寺院に入り、何か質問したとする。その解答はシンボル、または何らかのイメージで与えられる。

私たちは、彼らが何を伝えようとしているのか理解せねばならないが、そのための鍵、シンボルの意味するものについては付録として付けておいた。それらのシンボルは、神話や宗教に見られるシンボルの理解のためにも同じように適用できるものである。

ともあれ、アストラル・トリップでの行動範囲はあまりにも広く、多元的である。そして今まで作りごとでしかないと思っていた世界が、実際に存在していることも確認するだろう。私が百万言費やして説明するよりも、自分で異次元の世界へ行ってみることだ。体験することで、あなたの前に開かれてくる世界のすばらしさに、目をみはることだろう。

そうした世界でああなたがどのような体験をするか、そしてどのように変わっていくか、私はとても愉しみである。

どうか実行してほしい。

そして肉体を持っている間に、高次元への上昇を果たしてほしい。

あなたの成功を、私は心より祈っている――。

*

なお、本書に関するご質問、ご相談がある場合には、左記までお問い合わせください。

☎ 113-91 東京都文京区本郷郵便局私書箱一〇八

ミゲル・ネリ

《付》夢を解釈する鍵^キ——シンボルとその意味

シンボル I

- | | | | |
|---|--|---|--|
| 1 | ユニティ(和合・統一)
創造主、父 | 5 | ☆ミクロコスモス(小宇宙)
人間、ペンタグラム、力のシンボル
☆ヘキサグラム、性、優柔不断
上の三角と下の三角の交差⇨水と火
の結びつき⇨水銀と硫黄
△□ 3+4、生命の上に三位一体
がある、勝利、被創造物の秩序の法
則(オクタブの法則) |
| 2 | ドウアリティー(二元性)
陰陽、母、プラスとマイナス | 7 | ∞無限、正義、4+4
物質的生命(肉体)と精神的生命
(魂)の結合⇨調和 |
| 3 | トリニティー(三位一体)
△、陽子―電子―中性子、創造の法
則 | 8 | △△△三位一体を三度成す(3× |
| 4 | □、十、生命、四つの要素(火・
水・土・空気〔炭素・水素・窒素・
酸素〕)、四方、卍 | 9 | |

3) 完全なる人間、地獄の段階、隠者（ハーミット）



生命の輪、1への帰還、転

生、人間への進化と退化

11 反対の結合、説得、物理的力以上の知性

12 黄道帯12宮、使徒の任務

13 人類のために献身する人



死、神秘的死（エゴの死による新たな誕生）、13 || 1 + 3

|| 4

14 7 + 7、調和、慎み

15 悪魔、肉欲、男と女を奴隷にする性

シンボル II

奈落（絶壁）——危険、要注意

水（澄んでいるのならば）——性エネルギー

水で火を消す——性エネルギー消失の危険

棺・棺桶——神秘的死、欠点を排除する必

要性

権力者・警官——カルマの法

飛行機——精神的援助、内的援助

攻撃するスズメバチ——批判、中傷

杖・笏杖——イニシエーション、精神的段

階の上昇

山を降りる——段階を失う、下降

弾丸——悪意のある考え、マインド要注意

天秤——聖なる正義

透明な水を浴びる——性の克服、コントロール

ール

汚れた水を浴びる——病氣、悲しみ、痛み

船——偉大な秘密

自転車——内部のバランス

歯がぬけ落ちる——家族、または近い人の

——昇華における進歩、バイタリティ

〈魚が泳いでいるのならば〉——性の水

をコントロールする必要性

〈濁っているのならば〉——性エネルギー

——昇華に失敗あり、苦悩

〈岩から湧き出ているなら〉——性エネルギー

——生産中

〈自分が水に流される〉——精神的失

敗、世間の波に押し流される

風が顔に強く吹きつける——マインドの問題

題

A——アルファ、始まり、または何かの芽

がでるきざし

炎に包まれる祭壇——肉欲、性問題

壺（両側取手つきの）——意識ある信仰

たいまつ（高くかかげた）——錬金術を通

しての魂の達成

死、精神的悲劇、病氣

熱——絶望、知識の悪用

牢獄——償うべきカルマ

家——肉体

〈家が燃える〉——古い伝統の破壊

〈天井に穴がある〉——悪い考え

家がくずれる——内的後退、落ト

家にいる見ず知らずの人々——エゴたち、

もろもろの欠点など

結婚——性エネルギー昇華における達成

城——前生に行なわれた心理的ワーク

赤い首飾り——情欲

甘いものを食べる——私たちを待ちうける

苦痛

トマト——肉体的苦痛

少量の食事——内的ワークの不足

収穫・取り入れ——達成、美徳

体を縛られる——中傷、悪口

とうもろこし（皮をむいて実が見える）

——豊かさ

首切り——ある欠点の死

砂漠——イニシエーションへの道 使徒の

任務

軍隊や警官からの攻撃——カルマの法に反

する

軍隊や警官の味方——カルマの法に準ずる

泥まみれになる——問題

階段——精神的段階

ほうき——内部の洗浄

剣——意識ある意志、正義、火のパワー

槍——アダプト（帰依者）

矢——ポジティブな性エネルギー

弓——エネルギーを放つ

斧——破壊

汚れた雨にぬれながら歩く——苦痛

きれいな雨にぬれる——祝福、恩恵

海——生命の水、性エネルギー変換

静かな海——情欲の克服

荒れた海——おさえきれない情欲

動物を殺す——心理的欠点の死

コイン——（タロットにおける数値を考え

る。ダルマの可能性あり）

山——イニシエーション

炎につつまれた山——敵

怪物や獣——低次の霊体、エゴ、汚染

死人——エゴの死、望ましい変化

泳ぐ——「水」におけるワーク

雪——精神的達成、科学的貞操

雲——はっきりしないマインド、頭でつか

ち

暗い——アストラル界における視覚の不

とげ——クリスティックな意志、献身、犠

牲

排泄物——金銭、汚物

花——霊の機能、チャクラ

寒さ——孤独、悲しみ、エネルギー不足、

病氣、死

甘い果実——欠乏、悩み

すっぱい果実——喜び

オレンジの菓子を作る——経済的失敗

果物で菓子を作る——恋愛における失敗、

甘ければ甘いほどよくない

昆虫——アストラルの汚染 内的洗浄の必

要性

鞭——決心をした意志

絶壁に飛びこむ——空気の試練

水中に飛びこむ——水の試練（経済的見地

において）

足、ワークに欠陥がある

オメガ——時間制限、何かの終わり

金・黄金——望ましい結果

自然の景色——（はっきりと見え、水が澄

んでいるなら）アストラル界での目

覚め、ポジティブな経験

漁師——使徒の任務、決心したインストラ

クター

真珠・宝石——美德、価値ある教え

悪夢——低次、黒魔術の攻撃

石——性

オリーブの枝——平和の芽生え

雷・嵐——神の怒り

時計——過ぎ去る時、内的ワークの必要

数字を示している時計——（シンボルの

数の意味と照合すること）

魚の泳ぐ川——健康良好

鐘——音、創造する言葉
十字——神聖な力の交差
数珠（ロザリオ）——転生
ナイフ——報復、復讐
くぎ——受難、苦しみ
松——メディテーション
糸杉——生命
笏、王杖——パワー
鏡——霊
椰子——勝利（神秘的）
ピラミッド——生命エネルギー
ドーム（丸屋根）——思考の結晶
蝶々——解放された霊
鷹——魂の力、精神的なこと
象——力
白い象——クンダリーニの目覚め
らくだ——知恵（ウィズダム）

馬——知性（インテリジェンス）、肉体、感情
ろば——マインド
ぶた——変換（トランスフォーメーション）、肉欲
蛇——性エネルギー（上昇または下降）精液、聖なる母
〈蛇が攻撃するなら〉——性的攻撃、魔女
〈蛇を殺すなら〉物質界での危険除外（おとなしい蛇なら殺す必要なし）
爬虫類——攻撃、悪夢
竜——昇華された性エネルギーの火
魚——生命の水、水銀
こがね虫（スカラベ）——復活
ペリカン——父の献身
鶴——聖霊の純粹さ

水滴・露・細雨——精神的平和
白いシート——神々からの加護
種子——第二の誕生への招待
花を植える——美德を得るためのワーク、努力
太陽——魂の本質、私たちの内部の神からの火花
昼の輝く太陽——助け
赤い太陽——闘い、争い
黒い太陽——死
帽子——精神的に望ましくない状態
夢を見ていることを夢見る——アストラル界にいる
真実味を帯びたはっきりした夢——高次からのメッセージ
攻撃する虎——失敗、裏切り、消失
古びたハサミ——かげ口、批判

嵐・地震——破壊
大地にのみこまれる——土の試練（物質への執着）
走っている汽車——精神的進化の道
小麦の穂——太陽、キリスト
目——神々の監視
ぼろをまとっている——精神的に悪い状態、魂の黄金の寺院を造る必要性
ワイン——昇華された性エネルギー
靴——道、イニシエーションへの道（靴の状態によって自分の進歩状態を示す）
金星——愛、美
火星——闘い、戦争、魂の力
土星——死
木星——パワー、知恵
杯——（聖杯）永遠なる女性要素

犬〈おとなしい犬〉——忠実な友
〈荒れ狂う犬〉——性的な攻撃、誘惑
ひよこ——内的な精神的誕生
ねずみ——盗み、破壊
亀——精神的緩慢、長寿、永遠
きつね——悪知恵
赤色〈純粋な赤〉——愛、力
〈濁った赤〉——情欲
黄色——インテレクチュアルな知識または
精神的知識における進歩
紫色——至高なる精神主義
青色——宗教心
緑色——希望
灰色——悪魔的、注意
黒色——黒魔術

鳩——平和の精神
鹿——奉仕
子羊——謙虚
鷲——魂の力、精神の強さ
くも——問題、困難
猿——性的情欲
雄牛——根性、闘い、仕事、肥沃、土
おとなしい牡牛——宇宙の母、母なる自然
天の川
白い雄牛——白ロジのマスター
黒い雄牛——敵、エゴ、怒り、攻撃
虎——知恵
働いている虎——白ロジのマスターの助
け
攻撃する虎——失敗、裏切り、消失
ライオン・獅子——法、正義、火、神
〈従順ならば〉——目に見えない次元の

マスター
〈攻撃的ならば〉——償うべきカルマ
マスターから本を受けとる——内的世界で
の知識不足
狼——孤独な人、他人を必要としない
ジャッカル——骨のズイまでしゃぶる
ふくろう（みみずく）——肉体的死または
神秘的死、隠された知恵、黒魔術
師、瞑想
こうのとおり——善行に対する報い
きそり——アストラル界の汚染、ゴミ
めんどり——臆病
おんどり——性力、精力
黒猫——悪魔、黒魔術師
攻撃する猫——姦淫、不誠実、敵
おうむ——もつれ、要注意
くじゃく——うぬぼれ、自尊心

読者のみなさまへ

トクマブックスを読んでいただいて、ありがとうございます。

このシリーズのシンボル・マークはオニです。「オニのマークのトクマブックス」とご記憶ください。

トクマのオニは、怖いオニではありません。しかし、権力や権威を恐れない頑張り屋です。はげしく移り変わる世の中で、今日を生きる喜びを謳う、愛嬌ものです。このオニは、ひとりの人の胸の中にある夢や希望や情報や知恵を、広く世にひろめようと考えています。いつも時代を中心になる話題を、明日の力として提供しようと努力しています。

トクマのオニを可愛がってください。そして、読後のご感想をお聞かせください。これからの企画に反映させていきたいと思っています。

徳間書店 出版部

幽体離脱

アストラル・トリップ

異次元世界を探訪する9つの秘法

★著者／ミゲル・ネリ

★発行者／荒井 修 ★発行所／(株)徳間書店・東京

都港区新橋4の10・電話代表03(433)6231・郵便番号

105 ★印刷所／(株)廣済堂

©Miguel Neri

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。 Printed in Japan

ISBN4-19-502971-6